

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和30年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001183

昭和30年度
国立国語研究所年報

—7—

国立国語研究所

1956

はじめに

この年報7は昭和30年度の一年間に国立国語研究所でおこなった調査研究の報告である。

研究所の研究活動も7年を経過した。ようやく、研究の成果もかなり積み重ねることが出来たようである。ことに現在の建物に移ってからは、研究室や実験室の施設もある程度整って、研究は大体順調に進められている。しかし、一方国語の純化、合理化、言語生活の改善を考えた場合、言語現象、社会現象の複雑さを思うと、われわれは一層の努力を払わなければならないことを感ずる。

今後さらに精進を重ねて、ことばの問題に対する解決策の基礎資料を築き上げて行きたいと思う。

昭和31年12月

国立国語研究所長 西尾 実

目 次

はじめに

昭和30年度の調査研究のあらまし…………… 1

話しことばの調査研究

語形確定のための基礎調査…………… 5

書きことばの調査研究

総合雑誌の用語の調査……………92

地域社会の言語生活の調査研究

方言地図作成のための準備研究…………… 106

琉球首里方言辞典の編修…………… 112

国語教育に関する調査研究

言語能力の発達に関する調査研究…………… 114

言語の効果に関する調査研究

青年の新聞への接近・理解とその影響…………… 117

選挙公報文章の調査…………… 142

国語の歴史的発達に関する調査研究

明治時代語の調査研究…………… 160

音声史資料の収集と整理…………… 168

国語関係文献の調査…………… 169

図書の収集と整理…………… 174

庶務報告…………… 184

昭和30年度の調査研究のあらまし

神田一ツ橋の新しい庁舎に移ってから二年目、創設以来第七年目である。新しい庁舎に移ってから、各研究室がそれぞれ個室を持つようになり、調査研究の上で受ける便宜は大きい。30年度の調査研究項目は次のようである。

(1) 話しことばの調査研究——語形確定のための基礎調査

前年度に引き続いて、話しことばの上で語形の不確かな語彙について調査を行い、標準語形を確定する上に、どのような基準を考えるべきかを研究する。

(2) 書きことばの調査研究——総合雑誌の用語の調査

引き続き、総合雑誌を資料とする語彙調査を行う。総合雑誌を取り上げたのは、文化的な内容を表わす語彙がどのようなものであるかを明かにするためである。

(3) 地域社会の言語生活の調査研究

(a) 言語地図作成のための準備研究——日本における言語地図の作成を旨とし、それを実行する前に考えておかなければならないこと、すなわち、調査項目や調査地点の選定、調査票に盛る調査方法の決定等を考える上に必要な事柄を研究する。そしてこの研究には、将来実行する時期が来た時には参加してもらうはずの地方調査員に各種の準備調査を依頼する。

(b) 琉球首里方言辞典の編修——前年度から引き続き、辞典完成に必要な調査を行う。

(4) 言語能力の発達に関する調査研究

昭和28年度から始めた研究の継続である。同一児童が学年を追ってどのように言語能力が伸びて行くかを知るためのものであって、調査対象としている児童は本年度は第三学年生になる。なお補的に第二学

年生をも調べると共に、その他の学年の児童についても小規模な調査を行う。調査対象の児童は、実験学校として依頼している東京都新宿区立四谷第六小学校の児童である。なお対照するものとして、各地に協力学校を依頼し同一方法によるテストを実施してもらう。

(5) 言語の効果に関する調査研究

(a) 青年の新聞への接近・理解とその影響——前年度から始まり、本年度で終了する。前年度は東京および秋田県の高校生を対象として調査したが、本年度は、東京および三重県における勤労青年（定時制高校生を含む）を対象として調査を行う。

なお、この研究は文部省科学研究費（総合研究）を受けて行ったもので、日本新聞協会との共同研究である。

(b) 選挙公報文章の調査——30年2月に行われた総選挙の際、全国の有権者に配布された選挙公報を資料として、各候補者の文章について分析を試みる。相手に訴えかけようとする文章が実際にどのような構造を持っているかを知るためである。

(6) 国語の歴史的発達に関する調査研究

(a) 明治時代語の調査研究——現代語がどのような歴史をたどって成り立っているかを知るために、まず明治前期の文章を資料として、用語・表記法・文体について調べる。そのため最初に、明治十年ごろの新聞（郵便報知新聞）一年間のものについて、語彙を中心として、調査を行う。明治十年ごろには、単行本・雑誌等かなりの印刷物が出ているが、その中の主要なものであって、しかも多くの人に言語的にも影響を与えるものとして新聞を取りあげたのである。この調査が完了すれば、さらに、現代までに至る間の幾つかの時期について同じような調査を試みて、現代語までの経過を明かにする予定である。

(b) 音声史資料の収集と整理——音声史研究のための資料の一つとして、現在口頭で伝承されているものを録音して保存しようとする。

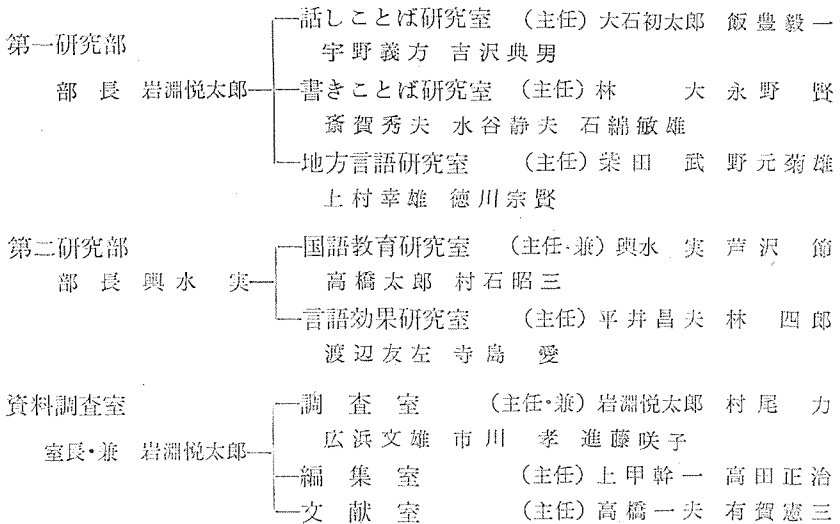
(7) 国語関係文献の調査

単行本はもちろん、雑誌・新聞に現われる国語関係の文献を収集整理し、その目録を作成する。

(8) 特殊問題の調査研究

ことばに関して社会で随時起る問題を処理するための小調査を行う。
またソナグラフによる音声研究を行う。

以上の項目を各研究室が分担して調査研究を実施したが、本年度の研究機構は次の通りである。



なお、年度の間、30年10月1日に第三部が設置された。そして人員の都合上、第三部の近代語研究室・古代語研究室・系統研究室のうち、とりあえず近代語研究室を作ることとなり、次のような構成で出発した。主任として山田巖が岐阜大学から着任し、資料室の広浜・市川・進藤の三所員が近代語研究室員を兼務することとなった。なお第三研究部の部長は西尾所長が事務取扱となった。

第一研究部は現代語を調査研究することをその内容とする。「話しことば研

研究室」は調査研究項目の(1)を、「書きことば研究室」は(2)を、「地方言語研究室」は(3)を担当した。

第二研究部の「国語教育研究室」は調査研究項目の(4)を、「言語効果研究室」はその(5)を担当した。

資料調査室においては、調査項目の(6)(7)(8)を担当したが、10月1日、第三研究部が設置されるに及んで、調査項目の(6)を第三研究部に引きつぐこととなった。

30年度内に編集し刊行したものは次の通りである。

国立国語研究所年報6（昭和29年度）

低学年の読み書き能力

明治
以降 国語学関係刊行書目

国語年鑑（昭和30年版）

以上のうち、「低学年の読み書き能力」は「国語教育研究室」が担当して来た、言語能力の発達についての調査研究のうち、調査対象の児童が一年生から二年生までの間に歩んで来たものを明かにしたものである。

（岩淵悦太郎）

語形確定のための基礎調査

み だ し

- | | |
|--|--|
| <p>A 調査の目的と前年度の作業</p> <p>B 本年度の調査計画と担当者</p> <p>C 調査の経過</p> <p>1. 年間の進行のあらまし</p> <p>2. 第1回調査</p> <p>(1) 調査法</p> <p>(2) 被調査者</p> <p>(3) 回答状況</p> <p>(4) 処理</p> <p>3. 第2回調査</p> <p>(1) 調査法</p> <p>(2) 被調査者</p> <p>(3) 回答状況</p> <p>(4) 処理</p> <p>4. 反省</p> | <p>D 調査の結果</p> <p>1. 一般的に考えて</p> <p>(1) 各人の回答</p> <p>(2) 集計によって見た傾向</p> <p>2. 問題語に即して</p> <p>(1) 各人の回答</p> <p>(2) 集計によって見た傾向</p> <p>(3) 語別整理</p> <p>(付) 採るべき形と使う形との一致率</p> <p>E 残された課題</p> |
|--|--|

A. 調査の目的と前年度の作業

ボク・ボク（僕）、イリクチ・イリグチ（入口）、論ジル・論ズルなどのように、語形が不確定である、いわばゆれているとされている語が少なからずあり、今日の言語生活の上でもしばしば問題とされている。そこで、このようなゆれている語にはどのようなものがあるか、どのようなゆれの種類があるか、それらの語に対して人々はどうのような意見をもっているか、等を明らかにして、標準語制定のための一資料を作ることを目的とした。

この調査のために2年間の作業を予定して、前年から着手したが、前年度は、文献についての調査を行った。すなわち、各種の文献から、ゆれている語とそれに関する意見・説明とを広く収集して、分類整理する、ゆれに関する研究文

献索引を作る，等の作業をした。

B. 本年度の調査計画と担当者

語形のゆれている語について標準的な語形の選択が行われる際には，何らかの基準がその根底になければならない。そのような基準を明らかにするための意見調査を本年度は中心の作業として計画した。すなわち，国語研究者および国語に特に関心をもっていると予想される各方面の人々に対して，ゆれている語の個々に即して，あるいは一般的な問題として，どのような条件を基準として標準的な語形を選ぶかをたずねようとした。なお，この調査に付随して，個人の現に使用している語形をたずねてみて，この調査のための一参考資料としようとした。また，前年度収集した，ゆれている語の取捨および分類にさらに検討を加えて，整理を完全にしようとした。

以上の調査を，話しことば研究室の次の4名が担当して，共同で作業を行った。

大石初太郎 飯豊毅一 宇野義方 吉沢典男

なお，筆生2名が所員を助けた。また，回答整理の段階で臨時のアルバイト1名を3か月間使った。

この報告は，飯豊・宇野・吉沢の協力のもとに，主として大石が執筆した。

C. 調査の経過

1. 年間の進行のあらまし

年度の初めに立てた調査計画にもとづいて，5月に小規模の準備調査を行った。ゆれている語を，アクセントに関するもの，音声に関するもの，語法に関するものの各類から計60語選び出し，標準語として採る形およびその理由等をたずねる調査表を作り，次の11人に送付して記入回答を依頼した。

井上 敏夫 神村 誠 桐原 徳重 斯林不二彦 鈴木 康子
中馬 静男 山口 恒 (他に国立国語研究所所員4名) ㊦

その検討の上に調査法を決め，30年7月第1回調査の調査表を発送した。8月から9月にわたって回答を分析整理し，同時に調査法を修正して第2回調

査の準備をした。10月、第2回調査の調査表を発送し、12月から31年3月までにわたって回答の分析整理を行った。(調査を2回に分けて行ったのは、この種の意見調査については困難が予想され、種々の不安があったので、まず第1回調査として少数の人々を対象とする調査を行ったのであった。その結果によって方法にも修正を加えた上で、第2回調査として一層多数の人々に回答を依頼したものである。)

なお、第2回調査の回答の整理の間に、前年度収集のゆれている語の整理の作業を行った。

2. 第1回調査

(1) 調査法

アクセントに関するもの、音声に関するもの、語法に関するもの、各100例を選んで、そのそれぞれについて、次のようにたずねることにした。

あらたまった場合(たとえば、講演やかしこまった気分で客に接する場合など。家族間・友人間などちがう場合)に話すことばとして、

- ① あなたはA, Bどちらをお使いになりますか。
- ② A, Bどちらの形が望ましいとお考えになりますか。
- ③ 望ましい(あるいは、望ましくない)と思われる理由は何でしょうか。
- ④ 同類の語としてお気づきのものをおあげください。
- ⑤ その語について何か特別の御意見がありましたら、御記入ください。

①②③には補足的な説明を添えた。

③については、(1)該当しそうな理由を各語例につき数個ずつかかげておいて、その中で指摘してもらい、あるいはそのほかに書き加えてもらうようにするもの(チェック式とよぶことにする)と、(2)白紙に記入してもらうもの(フリー式とよぶことにする)との両様のものを用意した。

次の6通りの調査表を作って、被調査者に配り分けることにした。

1. アクセント100例(フリー式) 2. 音声 100例(フリー式) 3. 語法 100例(フリー式) 4. アクセント 100例, 音声100例(チェック式) 5. アクセント 100例,

語法100例(チェック式) 6, 音声 100例, 語法 100例(チェック式)

問題としてかかげた語例は, 前年度の調査にもとづいて, ゆれている語のうちから, 主として理由の出方を見る上に重要と思われる類のものが片寄りなく取り上げられるように選んだ。

調査表の形式は下のとおりでである。(チェック式のものを示す。)

No.	問題語	① 使う形	② 望ましい形	③ 理由	④ 同類の語	⑤ 備考
1	A. アカトンボ			○古い・○多い○言いやすい ○新しい○少ない		
	B. アカトンボ (赤蜻蛉)			○語感がよい ○(その他)		
2	A. アクマデ			○多い ○古い ○東京語的 ○少ない○新しい○地方語的		
	B. アクマデ (鮑く迄)			○(その他)		

これに記入の手引きを添えた。また, 被調査者の氏名・生年月・出生地・居住経歴等の記入欄, 回答所要時間の記入欄, 「このような不確定語形について, 国として統一する必要があるとお考えになりますか, その必要がないとお考えになりますか。」の問に答える欄, この調査の方法についての批判を記入する欄を設けた。

(2) 被調査者

この調査表に対する回答を依頼したのは計50名で, 専門別では次のとおりである。

国語研究者 20名 言語・外国語研究者 5名 国語教育関係者 5名
新聞・放送等関係者 5名 文芸家 5名 他各界人 10名

専門別のほかに, 年齢的に片寄らず, 30歳台から60歳台に及ぶよう, また, 地域的にも, 東京から各地方に及ぶよう配慮して(出生地をおもな着眼点として)選んだ。

この50名に対して調査表を郵送し, あるいは訪問して, 回答の記入を依頼し

たが、その中のごく少数については、面接質問により回答をこちらの手で記録した。

(3) 回答状況

50名に依頼して、下記の43名から回答を得た。(五十音順、敬称略)

新井 達夫	安藤新太郎	池田弥三郎	井桁 貞敏	稲富栄次郎
江湖山恒明	円地 文子	大野弥穂子	大塚 明郎	緒方 富雄
木下 一雄	金原 省吾	久保寺逸彦	見坊 豪紀	佐藤 茂
佐藤 孝二	寒川 道夫	志波 末吉	鈴木信太郎	園田 次郎
高島進之助	築島 裕	中西甚太郎	中野 重治	野上 彰
野地 潤家	服部 静夫	服部 嘉香	福田 清人	藤倉 修一
堀籠 敬蔵	前田 雄二	松尾 拾	馬淵 和夫	宮城 文雄
宮地 幸一	村内 英一	望月 諠三	森岡 健二	矢口 新
山田 忠雄	吉田 澄夫	渡辺 修		

回答状況を検討してみると、フリー式とチェック式とでは、フリー式の方がはるかに記入所要時間が大きく、また、理由の示された語の割合は、チェック式の方がはるかに大きかった。

問題語としての適否の判断の材料となる意見、問題語の示し方(文脈のつけ方など)に対する意見、問題語の数量に対する意見、その他、調査の計画や方法に対する意見の記入されたものが多く、第2回調査の立案のために参考になるところが大きかった。

回答状況の検討から得た結論の大きなものは、問題語を減らす方が適當であること、フリー式よりもチェック式の方が適當であること、望ましい理由と望ましくない理由とがまぎらわしくない形で出るようにくふうすること、同類の語をたずねることは適當でないこと等であった。

(4) 処 理

被調査者各人ごとの回答をまとめた1人1枚の表を作った。

問題語ごとの回答をまとめた1語1枚の表を作った。

問題語のうち、アクセントに関するもの23、音声に関するもの28、語法に関するもの27、計78を選んで、理由の集計を行った。（なお、この問題語78は、第2回調査にも用いた。）

「望ましい形」と「使う形」との一致率を計算してみた。

不確定語形について、国として統一する必要があるか、ないかの意見を整理した。

第2回調査にも提出した問題語にかぎり、「使う形」のあらわれ方を人の類別によって調べ、第2回調査の結果と合わせて見た。

なお、全体として被調査者の数が少なく、かつ依頼した調査表の内容も各種に分れたので、人を類別して調べるような作業は、「使う形」以外については行わなかった。

3. 第2回調査

(1) 調査法

おもな調査目標を二つ設けた。（A）第1回調査と同様、問題語に即して採るべき形とその理由等をたずねる。（B）一般的に考えて、標準的な語形を考えるための判断の基準をたずねる。

（A）については、基本的には、第1回調査と変らないが、第1回調査の検討にもとづき、さらに審議を加えた結果、方法的にいろいろと変更した。

問題語には、アクセントに関するもの、音声に関するもの、語法に関するもの、各30を選び、そのうち各10、計30を共通問題語、残りの各20を非共通問題語とし、被調査者各人へは、共通問題語30と、非共通問題語のうちのアクセント関係、音声関係、語法関係のどれかが当てられるようにした。すなわち、

1. 共通30、アクセント非共通20——計50
2. 共通30、音声非共通20——計50
3. 共通30、語法非共通20——計50

の3種とし、3種の被調査者をほぼ同数にしたいと考えた。そして、被調査者へのふり当てをするとき、アクセント・音声・語法のそれぞれについて、研究

をしている人ないし意見をもっていそうな人ということを中心として、その問題を当てて無理のない人を選ぶようにした。その結果は、3種の被調査者の数はほぼ同数となった。問題語のこのような組合せを作ったのは、ある範囲の問題語（すなわち共通30語）については、なるべく多人数（すなわち被調査者全員）の回答を得たいと考えると同時に、そのほかに、問題語を相当数提出して調査してみたいと考えたからである。

たずね方および調査表の形式は下記のとおりである。

話し、聞くことばの標準的なもの	{	たとえば次のようなもの――	}	として
		ラジオ・ニュースのことば		
		あらたまった気分で話す場合のことば		
		辞典に採用することば		

- (1) 採るべき形の記号を記入してください。
- (2) 採る形について採る理由、採らない形について採らない理由の両方をあげてください。
- (3) あなたは、あらたまった気分で話す場合、どの形をお使いになりますか。
- (4) 特別の意見や説明のある場合、記入してください。

(1)(2)にはさらに補足的な説明を添えた。(2)については、第1回調査のときとちがって、すべてチェック式とした。すなわち、問題語ごとに該当しそうな理由をいくつかかかげておいて、その中から選んでもらい、あるいはそのほかに書き加えてもらうことにした。また、そのために別に「理由一覧」の表(13ページに示す。)を添えて、そのほかの理由を考えてもらうための便に供した。問題語とその個々に添えた理由の選択肢とは、のち(D. 調査の結果)に示す。

調査表の形式は次のとおりである。

問題形	(1)採る形へ	(2)理由		(3)使う形	(4)備考
		採る理由	採らない理由		
A アスコにある。 〔彼処〕	C	○言いやすい○一般的だ ○本来の形だ○共通語的だ	○言にくい○特殊のだ ○くずれた形○地方語的だ	C	
B アソコにある。		○東京山手的○口頭語的だ ○規範に合う○望ましい体系を作る ○語感がよい○ていねいだ その他○	○東京下町的○文章語的だ ○規範に合わ○望しい体系を作らない ○語感が悪い○ぞんざいだ その他○		
A イリグチ 〔入口〕	C	○簡潔だ ○一般的だ ○伝統的だ ○共通語的だ	○簡潔でない○一般的でない ○新奇すぎる○地方語的だ	C	
B イリグチ (か)		○口語的だ ○規範に合う ○望ましい体○変化の傾向系を作るにそう ○語感がよい○言いやすい その他○	○文語的だ ○規範に合わない ○望しい体系○変化の傾向を作らないにさからう ○語感が悪い○言にくい その他○		

これに記入の手引を添え、また、被調査者の氏名・生年月・現住所・居住経歴等の記入欄を設けた。

「理由一覧」は、二つの目的のために添えたものである。第一には、前記のように、問題語に関して採る理由、採らない理由を考えてもらう際の便宜のために添えた。第二には、具体的な語をはなれて、一般的に考えて、標準語としての採否をきめる場合の基準をたずねるために設けた。「理由一覧」の内容は標準語に関する従来の諸説および第1回調査の結果にもとづいて、話しことばに関する限りの標準語の基準に属すると考えられる事項を総合的に整理してかかげたものである。

理由一覽

I 話し、聞くことば（口頭語）について標準語としての採否をきめようとする場合、一般的に考えて、どのようなことが判断の基準になるとお考えになりますか。

この表にかかげられた項目のうち、大切と思われるものを選んで下さい。各項目の右側の数字を○でかこんでください。○でかこんだものうち、軽重の差がありましたら、特に大切なものを◎でかこんでください。

○一般的だ（多い）	} 1	○日本語的だ	} 12	○語感がよい	} 21
○特殊的だ（少ない）		○外国語的だ		○語感が悪い	
○増加の傾向にある	} 2	○本来の日本語調だ	} 13	○ていねいだ	} 22
○減少の傾向にある		○翻訳調だ		○ていねいすぎる	
○新鮮だ	} 3	○中流以上が使う	} 14	○よい表現を加える	
○古くさい		○下流が使う		○悪い表現を加える	
○伝統的だ	} 4	○教養層が使う	} 15	○おぼえやすい	} 24
○新奇すぎる		○非教養層が使う		○おぼえにくい	
○本来の形だ	} 5	○ある種の人だけが使う （性、年齢、職業など）	} 16	○言いやすい	} 25
○くずれた形だ		○規範に合う （従来の国語の規範 に合う）		○言いにくい	
○共通語的だ	} 6	○規範に合わない （従来の国語の規範 に合わない）	} 17	○聞きわけやすい	} 26
○地方語的だ （東京方言を含む）		○簡潔だ		○聞きわけにくい	
○東京山手的だ	} 7	○望ましい体系を作る （国語の法則として望 ましいものができる）	} 18	○簡潔でない	} 27
○東京下町的だ		○望ましい体系を作らな い（国語の法則として 望ましいものがで きない）		○意味を区別する （意味の区別に役 立つ）	
○関東的だ	} 8	} 9	} 18	○意味を区別しない （意味の区別に役 立たない）	} 28
○関西的だ					
○使用地域が広い	} 10	○変化の傾向にそう	} 19	○教科書にある	} 29
○使用地域が狭い		○変化の傾向にさからう		○NHKが使う	
○口頭語的だ	} 11	○論理的だ	} 20		
○文章語的だ		○非論理的だ			

II 調査票3枚目以下について、「理由」欄にかかげてあるもののほかに理由を考えていただくとき、この表の中に適当なものがありましたら、選んで御記入ください。

なお、このほかに理由がありましたら、ぜひ御記入ください。

〔注意〕 「自分が使いなれている」「教わったことがある」などのような個人的立場に基づく理由は省いてください。公共的な立場に基づいて理由を考えてください。また「○○がきめた」などのような理由も省いてください。

なお、調査表の冒頭には、次のようなことわり書きを添えた。

この調査票は、主として同一の語で二つ以上の形をもっているもの、あるいは使用の可否が問題にされている言い方などについて標準的なものをきめようとする場合、どのようなことがその判断の基準となるかを知るために、御意見をうかがおうとするものです。

(2) 被調査者

回答を依頼したのは計 300 名で、専門別では、次のような数である。

国語研究者 110名 言語・外国語研究者 40名 国語教育関係者 30名
新聞・放送等関係者 40名 文芸・芸能家 40名 他各界人 40名

第1回調査におけると同様、年齢的に片寄らず、年少層から年長層に及ぶよう、地域的にも、東京から各地方に及ぶよう、配慮して選んだ。

郵送または訪問によって、回答の記入を依頼したが、少数は面接質問によりこちらの手で回答を記録した。

(3) 回答状況

300名に依頼して、下記の207名から回答を得た。(五十音順、敬称略)

青木 一雄	青木千代吉	秋永 一枝	秋山 正次	秋山 雪雄
浅野 信	天沼 寧	有光 次郎	池上 二良	池上 退蔵
池上 禎造	石井 庄司	石垣 福雄	石黒 魯平	石黒 修
石森 延男	市河 三喜	市川 重一	一谷 清昭	糸井 寛一
伊藤忠兵衛	稲垣 正幸	井上 敏夫	井之口有一	岩井 隆盛
岩井 良雄	岩倉 具実	岩本 実	上野 勇	上野 陽一
宇野 精一	宇野 隆保	煤垣 実	大岩 正伸	扇谷 正造
大久保忠国	大久保忠利	大島 一郎	大住 遠雄	大田栄太郎
大塚 高信	大槻 一夫	大藤 時彦	大西 雅雄	大橋富貴子
大伏 肇	大村 浜	岡 義重	岡田荘之輔	岡本千万太郎
魚返 善雄	奥村 三雄	小野志真男	寛 五百里	金沢庄三郎
金田 元彦	上村 孝二	亀井 一綱	河合 茂	河竹 繁俊

川上三太郎	脊野 宏	菊沢 季生	木下 順二	金田一京助
金田一春彦	日下部文夫	熊沢 竜	熊谷 直孝	倉沢 栄吉
剣持隼一郎	高津 春繁	国分一太郎	小島 忠治	後藤 利雄
後藤 美也	此島 正年	小林智賀平	小林 淳男	小林 英夫
小松代融一	近藤 輝夫	斎藤義七郎	斎藤 静	斎藤 武雄
佐伯 功介	阪倉 篤義	佐久間 鼎	佐々木 達	佐藤喜代治
佐藤 孝	佐藤為治郎	沢登 哲一	塩田 紀和	穴甘 昭子
清水 茂夫	寿岳 章子	神保 格	末田 克美	杉山 栄一
杉山 正世	鈴木 明	鈴木 重幸	須藤 久幸	関 匡市
多賀 千世	タカクラ・テル	高辻 正美	高藤 武馬	田口泷三郎
竹内てるよ	田代 晃二	多々良鎮男	田付たつ子	近石 泰秋
千種 達夫	塚原 欽雄	辻村 敏樹	都竹通年雄	鶴田 常吉
鶴見 俊輔	寺川喜四男	寺田 泰政	土居 光知	土居 重俊
土井 忠生	時枝 誠記	徳川 夢声	野老 純一	戸塚 文子
中沢 政雄	中島 文雄	中田 祝夫	中村 茂	中山 崇
長沼 直兄	滑川 道夫	仁平 芳郎	西宮 一民	西本三十二
野島 秀義	長谷川敏正	花田 哲幸	浜田 敦	林 和比古
林 修三	林 義雄	原 富男	飛田多喜雄	日野 資純
平野 恒士	平山 輝男	広戸 淳	広幸 亮三	福岡 誠一
福田 恒存	藤井 継男	藤原 与一	古川 緑波	北条 忠雄
細川泉二郎	堀田 要治	堀内 敬三	堀川 直義	前田 勇
前田 賢次	真下 三郎	松井 利男	松方義三郎	松田 正義
松延 市次	松原 秀治	松宮 一也	松村 明	丸野不二男
三浦 葉子	三上 章	水島あやめ	満田新一郎	蓑手 重則
宮川 曼魚	宮島 達夫	宮良 当壮	宮本 義男	三宅 桂子
虫明吉次郎	武藤 辰男	村岡 浅夫	モモセ・チヒロ	森田 武
矢田部達郎	柳田 国男	山川 幸世	山田 俊雄	山内 才治
山村 恒雄	山本薫次郎	湯沢幸吉郎	吉川幸次郎	吉田甲子太郎

吉町 義雄 吉村 光夫 和田 利政 和田 実 渡辺 一夫
渡辺 保 渡辺 実

専門別、性別、地域別（言語形成期の居住地にもとづく）、年齢別の人の
類別と、依頼した非共通問題語の種類別との組合せによって回答者の数を見る
と、次のようになった。

回答者類別一覽

	語の類					計	語の類					
	人の類	アクセント	音声	語法	計		人の類	アクセント	音声	語法	計	
専門別	国語 1	16	7	19	42	地域別	山手・周辺	18	13	16	47	
	国語 2	14	20	11	45		下町	9	2	5	16	
	言語 1	7	6	1	14		東部	23	18	21	62	
	言語 2	4	3	8	15		西部	21	20	23	64	
	国語教育	8	9	7	24		九州	3	9	1	13	
	新聞・放送等	11	9	12	32	他	0	4	1	5		
	文芸・芸能	5	2	4	11	年齢別	～30	6	2	2	10	
	各界	9	10	5	24		31～50	40	32	38	110	
	性別	男	68	62	64		194	51～70	27	27	26	80
	女	6	4	3	13		71～	1	4	1	6	
計								74	66	67	207	

注1. 「国語1」は国語研究者のうち、現代語についての研究をしている人。
ただし、方言だけの研究をしている人は、これにはいらない。

「国語2」はその他の国語研究者。

注2. 「言語1」は言語・外国語研究者のうち、国語についての研究をもっている人。
「言語2」はその他の言語・外国語研究者。

注3. 地域別は東条操氏の方言区画により（東条操「日本方言学」P.32）、外地・沖繩等を含わせて「他」を添え、東京を特にぬき出して「山手・周辺」（山手およびその周辺の意味）と「下町」とに二分したもの。

注4. 専門別の分類では、二つ以上の類に属すると見られるような人もあったが、「国語」「言語」「国語教育」への取り方を優先させ、さらに全般的に、その人の活動面の重点を取って分類することを方針とした。

ただし、調査表の中での部分的な無答はかなり多くあった。すなわち、一般的な立場での理由の指摘を求めた「理由一覧」の欄の無答、問題語に即しての質問のうち、「採るべき形」「理由」「使う形」のそれぞれの全部ないし問題語別の無答は相当にあった。（理由の無答については、詳しくは「D. 調査の結果 2. 問題語に即して (1)各人の回答」の項に記す。）

(4) 処 理

理由一覧についての回答者全員の回答を合わせて一覧表を作った。

被調査者各人ごとの回答をまとめた1人1枚の表を作った。

問題語ごとの回答をまとめた1語1枚の表を作った。

理由一覧についての回答を、人の類別によって集計整理した。

問題語の理由集計を行い、全90語の一覧表を作った。

問題語別に人の類別による理由のあらわれ方を見た。これは、問題語によって、結果のはっきりと出そうな人の類別を当てて見たものである。

「使う形」のあらわれ方を、人の類別によって見た。これは、問題語によって結果のはっきりと出そうな人の類別を当てて見たものである。

なお、一つの参考資料として、「採るべき形」と「使う形」との一致率を計算してみた。

以上のうち、理由についての集計整理的作業は、その結果をあまり重要視しない。この調査の性質上、回答をすべて一律に扱って数的処理をすることは不適當で、各人の個々の回答を重要視すべきものだからである。数的処理は大体の傾向をつかむための一応の操作として試みたものである。第1回調査についても、もちろん同様である。

なお、人の類別による処理はあまり重要視しない。なぜなら、回答者はすべて国語についての専門家ないし国語に特別の関心をもつ文化人であるため、地域・年齢その他の相違は回答者の条件としてそれほど強くきいていると思われないからである。

4. 反 省

この調査は、問題語の歴史的事情や現代社会における行われ方の実態などを把握した上で、すなわち客観的な根拠にもとづいて回答してもらうことを予想したものではなかった。主観的な感じによって理由をあげてもらえば足りるものであった。調査表の冒頭に添えたことわり書きにもあるように、標準的な言い方をきめようとする場合の判断の基準を知ろうとするものであって、問題語について、A形・B形の採否を決めることが直接の目的ではなかったので、理由のあげ方は主観によって選んでもらってよかったのである。ところがその趣意を被調査者に徹底させることに欠けるところがあったため、被調査者に必要以上の負担を感じさせた向きがあった。その結果として、何人かからは残念ながら回答を得ることができなかった。また、回答の内容に自信がないという添え書も少なくなかった。中には、わざわざ調査をされた上で回答を寄せられた人もあった。いずれも申しわけのないことであった。また、上述のような調査の企図に対する誤解から、この調査に対する批判を寄せられた人もあった。

また、問題語が多すぎたということも反省された。第1回調査の反省によって問題語を大幅に減らしたのであったが、それでもなお多すぎた。

理由の選ばせ方が不備である、たとえば、二者択一的方法でなければ信頼できる厳密な回答が得られないというような、方法に関する批判も受けた。この調査形式では被調査者が非常に答えにくく、また、回答の態度の基準もゆれがちであるということでもある。われわれの調査目的のためにはこのような調査形式を採用することは基本的にやむをえないことだったが、なお、この基本線の幅の中にくふうをする余地はあったと思われる。

以上のような反省からも、この調査の回答を等質的なものとして数量的処理をすることは、厳密な意味においては適当でないと判断した。

なお、アクセントに関してはこのような調査は適当でなかったのではないかな等の反省もあるが、それについては後に述べる。

D. 調査の結果

われわれが調査の結果において得たものは、

標準的語形を考えるための基準

1. 一般的に考えて（第2回調査のみ）
2. 問題語に即して考えて

（付）採るべき形と使う形の一致率

であるが、そのそれぞれについて次に報告する。

1. 一般的に考えて

「C. 調査の経過」の中にかかげた「理由一覧」の表によってたずねたものである。これに対する回答は175名から得られたが、表にかかげた以外に記入された項目に次のようなものがあった。

- (外)1 新聞小説によく使われる。
- (外)2 話しことばと文章語との区別をなくしたい。
- (外)3 正常の変化か、訛った変化か。
- (外)4 有理な形か、無理な形か。
- (外)5 もっともな類推か、まちがった類推か。
- (外)6 表記（かな・ローマ字）の際、形がはっきり出てくるか、どうか。
- (外)7 語形が安定しているか、どうか。
- (外)8 意義質の場合短かすぎないか、どうか。
- (外)9 表現としての安定度が高いか、低いか。

なお、「ふだんの私生活を重視するか、改まった公的生活を重視するか」というような観点を付記された人もあった。

このほか、特に記入されてあっても、表中の項目に含められると考えられたものは、そのように取り扱った。要するに、「理由一覧」に(外)1～(外)9を加えたものが、この調査であらわれた理由の種類のもすべてである。

(1) 各人の回答

175名の回答を一覧表にして示せば、次のとおりである。

この表では、被調査者の条件は、次のような約束で示されている。

専門 11—国語 1, 12—国語 2, 21—言語 1, 22—言語 2, 3—国語教育,
4—新聞・放送等, 5—文芸・芸能, 6—各界

年齢 1—～30歳, 2—31～50歳, 3—51～70歳, 4—71歳～

地域 11—山手・周辺, 12—下町, 2—東部, 3—西部, 4—九州,
5—他

性 1—男, 2—女

(「C. 調査の経過」の内, 「被調査者類別一覧」の注参照)

No. は五十音順によるものではない。

表中の記号は次のような意味をもつ。

○は、たいせつな項目として選ばれたもの、◎は、○のうちに軽重の差
のある場合、特にたいせつなもの。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
専 門	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
年 齢	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地 域	3	3	2	3	3	11	3	4	11	11	12	4	3	3	3
性	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1. 一般的・特殊的	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
2. 増加の傾向・減少の傾向	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
3. 新鮮・古くさい												◎			◎
4. 伝統的・新奇		◎			◎			◎		◎	◎	◎			
5. 本来の形・くずれ		◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎
6. 共通語的・地方語的	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎			◎
7. 山手的・下町の															
8. 関東的・関西的													◎		
9. 使用地域が広い・狭い	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
10. 口頭語的・文章語的	◎	◎				◎	◎		◎			◎			◎
11. 口語的・文語的	◎	◎	◎				◎		◎						
12. 日本語的・外国語的	◎	◎			◎	◎			◎		◎	◎			◎
13. 日本語調・翻訳調					◎				◎		◎				
14. 中流以上・下流															
15. 教養層・非教養層	◎		◎					◎			◎	◎	◎		◎
16. ある種の人だけ	◎	◎							◎						
17. 規範に合う・合わない	◎	◎			◎				◎	◎					
18. 望ましい体系を作る・作らない	◎	◎			◎			◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
19. 変化の傾向にそう・さからう	◎			◎	◎			◎	◎			◎	◎	◎	◎
20. 論理的・非論理的			◎		◎	◎		◎	◎	◎					
21. 語感がよい・悪い	◎	◎	◎			◎					◎	◎	◎		◎
22. 丁寧・丁寧すぎる・ぞんざい	◎							◎							
23. よい表現・悪い表現	◎				◎			◎		◎		◎	◎		
24. おぼえやすい・にくい		◎		◎	◎			◎		◎		◎			
25. 言いやすい・にくい	◎	◎	◎	◎	◎			◎		◎		◎	◎	◎	◎
26. 聞きわけやすい・にくい	◎	◎	◎	◎	◎			◎		◎		◎	◎	◎	◎
27. 簡潔・簡潔でない					◎					◎					
28. 意味を区別する・しない	◎		◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎		◎	◎
29. 教科書にある												◎			
30. NHKが使う												◎			
(外)1～(外)9										◎(8)					

No.	16 17 18 19 20					21 22 23 24 25					26 27 28 29 30				
	専 年 地 性	門 齡 域 域													
1. 一般的・特殊的	○	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	◎	○	○	◎	○	◎
2. 増加の傾向・減少の傾向	○	○		○	○	◎	◎	○				○	○	○	○
3. 新鮮・古くさい															○
4. 伝統的・新奇	○	○	○		○	◎		○			○	◎			○
5. 本来の形・くずれ	○	○			○	◎		○	○	◎	○	○			○
6. 共通語的・地方語的	○	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	◎	◎		○	○	◎
7. 山手的・下町的					○	○	○	○		◎					○
8. 関東的・関西的		○			○	○	○	○		◎					○
9. 使用地域が広い・狭い	○		○		○	○	◎	○	○		○	◎	○	◎	
10. 口頭語的・文語的	○				◎	○	○	○		○			○	○	○
11. 口語的・文語的					○		◎			○	○			○	○
12. 日本語的・外国語的	○				○	○								○	○
13. 日本語調・翻訳調	○				○	○				◎	○	○			○
14. 中流以上・下流					○					◎	◎				○
15. 教養層・非教養層		○			◎		○			◎	○		◎	○	○
16. ある種の人だけ					○	○				◎					○
17. 規範に合う・合わない	○	○			○	◎					○		○		◎
18. 望ましい体系を作る・作らない	○		◎	○	○	◎					○	◎			◎
19. 変化の傾向にそう・さからう	○	○		◎	○	◎	◎								◎
20. 論理的・非論理的					○		○					◎	○	◎	
21. 語感がよい・悪い		○			○		○	○	◎	○	○		◎	○	◎
22. 丁寧・丁寧すぎる・ぞんざい								○				○		○	○
23. よい表現・悪い表現		○	◎		○			○			○	○	○	○	○
24. おぼえやすい・にくい					○				○						○
25. 言いやすい・にくい	○	○	◎			○	○	○	○		○		○	○	○
26. 聞きわけやすい・にくい	○	○	○	◎		○	○	○	○		○		○	○	○
27. 簡潔・簡潔でない	○		◎			○	○					◎	○	○	○
28. 意味を区別する・しない				◎	○	○		○	○	○	○	○	○	○	◎
29. 教科書にある															
30. NHKが使う		○													
(外)1~(外)9															

○(6,7)

70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93
12	12	12	12	12	12	12	12	12	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	22	22	22
2	2	2	2	2	2	3	3	3	2	2	2	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	2	2
3	2	5	3	2	3	3	3	3	3	3	11	3	2	3	11	11	11	3	2	2	3	2	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	
4	5	5	5	5	5	5	5	5	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
3	2	2	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
3	11	12	11	2	12	2	11	12	11	3	11	11	11	11	2	12	12	3	3	3	3	11	11	12
1	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
⊙			○	○	○	○		○	○	⊙	○	○	⊙		○	○	⊙	⊙	○	⊙	○	○	○	
				○	○			○	○			○	○				○			○	○	○	○	
○		○		⊙	○		○	○	○	○	○	⊙			○	⊙		○		⊙		○	○	
⊙	○		○	○				○		⊙	○	⊙		○	○	○	○	○		⊙		○		
○	○									⊙		○			○	○		○	○		○	○	○	
	○			○	○	○		○	○	○	○		○				○			⊙		○		
		○			○	○		○	○	○	○		○		○	○		○		⊙	○	○	○	
										○		○					○			○	○	○	○	
										○	⊙						○			○	○	○	○	
		○			○	○		○	○	○	○		○		○	○		○	○	⊙	○	○	○	
		○	○		○			○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	
⊙	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⊙	○	⊙		⊙	○	○	⊙	○		⊙	○	○	○	
○		○		○	○			○				⊙		⊙	○		○		⊙	○	○	○	○	
		○	○		○			○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	
○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○			○	○			○		○		○		○			○			○	○	○	○	
																					○			
																					⊙			

No.	172	173	174	175
専 門	6	6	6	6
年 齢	3	3	3	4
地 域	2	3	2	11
性	1	1	1	1
1. 一般的・特殊的	○	○	○	○
2. 増加の傾向・減少の傾向		○		
3. 新鮮・古くさい				
4. 伝統的・新奇	○			
5. 本来の形・くずれ	○	○	○	○
6. 共通語的・地方語的	○	○	○	
7. 山手的・下町的				
8. 関東的・関西的				
9. 使用地域が広い・狭い	○			
10. 口頭語的・文章語的	○	○	○	
11. 口語的・文語的	○			
12. 日本語的・外国語的	○		○	
13. 日本語調・翻訳調	○			
14. 中流以上・下流				
15. 教養層・非教養層			○	
16. ある種の人だけ				
17. 規範に合う・合わない				
18. 望ましい体系を作る・作らない				
19. 変化の傾向にそう・さからう				
20. 論理的・非論理的			○	
21. 語感がよい・悪い	○	○	○	○
22. 丁寧・丁寧すぎる・ぞんざい				
23. よい表現・悪い表現				
24. おぼえやすい・にくい				
25. 言いやすい・にくい	○		○	○
26. 聞きわけやすい・にくい	○	○	○	○
27. 簡潔・簡潔でない	○			
28. 意味を区別する・しない	○	○		
29. 教科書にある				
30. NHKが使う				
(外) 1～(外) 9				

(No. 29, 78, 93, 95, 103, 121, 139, 144, 148, 155, 162 の回答者はいずれも、対をなしている2項(「一般的・特殊的」など)のうちの左側の項に○◎を付けた。)

以上の各人の回答には、補足的な説明や意見の付記されたもので、重視すべきものが少なくなかったが、ここには省略する。

一覧表を観察するに、人により基準の取上げ方が種々さまざまである。

きわめて多種類の項目をあげた人がある。No. 30, No. 95, No. 168 などその著しいものである。逆にきわめて少数の項目をあげた人がある。No. 27, No. 87, No. 96, No. 100 などその著しいものである。

全体の項目は、大まかに見て、一般性(一覧表における項目の1, 2), 伝統性(3~5), 地域性(6~9), 文体(10~13), 階層(14~16), 規範性ないし体系性(17~20), 語感(21~23), 使用の便(24~28)等の類に分けられるが、

これらの全野にわたってあげた人があり、また、ある類に限ってあげた人があ
る。

上掲の多種類の項目をあげられた人々のほかにも、No. 65, No. 78, No.
104, No. 156 などは、各類にわたってまんべんなく項目をあげており、さら
に、No. 62, No. 108, No. 109, No. 134, No. 137, No. 151, No. 169, No.
174 などは、あげている項目の数は少ないが、各類にわたっている。逆に、狭
い範囲に限ってあげた人としては、上掲の少数の項目をあげた人のほかにも、No.
31, No. 49, No. 82, No. 84, No. 94, No. 131, No. 143, No. 162 などが目立
っている。その中には、類の選び方にいろいろの違いが見られるが、たとえば
No. 27, No. 84 のように、行われ方の広さという点にしぼっている人もあり、
また、語感や、使用の便のような、いわば主観的な立場の基準を強く打ち出し
た人もある。

(2) 集計によって見た傾向

〔全体集計〕

全員の回答を一応集計してみて、大体の傾向を知るための資料とした。○◎
の別なく、選ばれた項目のすべてを合わせて見た。

回答者総数に対する各項目を選んだ人数の百分率は次のとおりである。

1. 一般的, 特殊的	86.8	2. 増加の傾向, 減少の傾向	47.7
3. 新鮮, 古くさい	10.9	4. 伝統的, 新奇	37.9
5. 本来の形, くずれ	57.5	6. 共通語的, 地方語的	79.9
7. 山手的, 下町的	16.1	8. 関東的, 関西的	14.4
9. 使用地域が広い, 狭い	63.8	10. 口頭語的, 文章語的	50.0
11. 口語的, 文語的	42.0	12. 日本語的, 外国語的	39.7
13. 日本語調, 翻訳調	35.1	14. 中流以上, 下流	10.9
15. 教養層, 非教養層	36.2	16. ある種の人だけ	20.1
17. 規範に合う, 合わない	40.2	18. 望ましい体系を作る, 作ら ない	60.3
19. 変化の傾向にそう, さからう	46.6	20. 論理的, 非論理的	38.5
21. 語感がよい, 悪い	77.6	22. 丁寧, 丁寧すぎる, ぞんざい	24.1

23. よい表現, 悪い表現	33.9	24. おぼえやすい, おぼえにくい	28.7
25. 言いやすい, 言いにくい	69.0	26. 聞きわけやすい, 聞きわけにくい	74.7
27. 簡潔だ, 簡潔でない	28.7	28. 意味を区別する, 区別しない	62.1
29. 教科書にある	5.2	30. NHKが使う	4.6
外	5.7		

〔人の類別による集計〕

次に, 人の類別によって集計してみたところ, 比較的目立った現象として次のような傾向がとらえられた。

年齢別では, 年少層より年長層に多いもの,

- 規範に合う, 合わない ○ていねい, ていねいすぎる, ぞんざい
- 語感がよい, 悪い

年長層より年少層に多いもの,

- 一般的, 特殊的 ○増加の傾向, 減少の傾向 ○使用地域が広い, 狭い
- 論理的, 非論理的 ○望ましい体系を作る, 作らない

地域別では, 東京に少なく, 地方に多いもの,

- 共通語的, 地方語的 ○使用地域が広い, 狭い ○望ましい体系を作る, 作らない
- 変化の傾向に沿う, 沿わない ○よい表現を加える, 悪い表現を加える
- 聞きわけやすい, 聞きわけにくい ○意味を区別する, 区別しない

東京・東部に多く, 西部・九州に少ないもの

- 山手的, 下町的 ○関東的, 関西的 ○中流以上が使う, 下流が使う

性別では, 女の回答者数が少ないので, 比較することは問題であるが, 特に差の著しいものをあげると,

男に多いもの,

- 使用地域が広い, 狭い ○よい表現を加える, 悪い表現を加える
- 簡潔だ, 簡潔でない

女に多いもの,

○望ましい体系を作る，作らない ○語感がよい，悪い

専門別では，著しい傾向はつかみにくい，文芸・芸能に「語感がよい，悪い」が100%で，「関東的，関西的」「教養層が使う，非教養層が使う」が0であること，新聞・放送等に「関東的，関西的」「中流以上が使う・下流が使う」が0であることなどが目立った。

2. 問題語に即して

第1回調査・第2回調査とも，被調査者への質問の最も大きな部分を占めたところである。具体的な個々の語に即して，標準的な語形を考えるための基準としてどのようなものが取り上げられるかを見ようとしたものである。調査の方法については「C. 調査の経過」であらまし述べたが，ここに，用いた問題語とその個々に付した理由の選択肢とをかかげる。

問題語と理由の選択肢

第1回調査

第1回調査では前記のようにフリー式とチェック式とを試み，チェック式に理由の選択肢をかかげたのであるが，ここには問題語だけを示す。

アクセントに関するもの

アカトンボ・アカトンボ（赤蜻蛉） アクマデ・アクマデ（飽く迄） アサヒ・アサヒ（旭日，普通名詞） アシオト・アシオト（足音） アタマ・アタマ（頭）
 イガイ・イガイ（意外） イキゴミ・イキゴミ（意気込み） イトマゴイ・イトマゴイ（暇乞い） イネムリ・イネムリ（居眠り） イワエル・イワエル（所謂）
 ウイマゴ・ウイマゴ（初孫） エリモト・エリモト（襟元） オイシャサマ・オイシャサマ（お医者様） オンガク・オンガク（音楽） カクゴ・カクゴ（覚悟）
 カクリ・カクリ（隔離） カゼグスリ・カゼグスリ（風邪薬） カミナリ・カミナリ（雷） カレン・カレン（可憐） カンガエル・カンガエル（考える） カンチョー・カンチョー（官庁） キタ・キタ（北） キューメイ・キューメイ（糺明）
 キョーリョク・キョーリョク（協力） ギョギョー・ギョギョー（漁業） ゲジュン・ゲジュン（下旬） ゲンロン・ゲンロン（言論） コーチャ・コーチャ（紅茶）
 ゴゴ・ゴゴ（午後） ザ・ザ（座） ザイサン・ザイサン（財産） サカ・サカ

(坂) サクシヤ・サクシヤ (作者) サシダシニン・サシダシニン (差出人) シ
 ヨーヒン・シヨールヒン (商品) シンザン・シンザン (新参) シンルイ・シンル
 イ (観類) ス・ス (巢) セ・セ (背) セイメイセン・セイメイセン (生命線)
 セカイ・セカイ (世界) ソソグ・ソソグ (注ぐ) ソノトキ・ソノトキ (其の時)
 タイヒ・タイヒ (堆肥) タイリク・タイリク (大陸) タカラモノ・タカラモノ
 (宝物) タノシミ・タノシミ (楽しみ) タマゴ・タマゴ (卵) ダンチョー・ダ
 ンチョー (団長) チマタ・チマタ (悲) チュージュン・チュージュン (中旬)
 チューモン・チューモン (注文) ツケネ・ツケネ (付根) ツユ・ツユ (梅雨)
 テンジ・テンジ (展示) テンジンサマ・テンジンサマ (天神様) デンワ・デン
 ワ (電話) ドージ・ドージ (同時) トーリョー・トーリョー (棟梁) トクイ
 ・トクイ (得意) トマト・トマト (赤茄子) トモニ・トモニ (共に) トリア
 エズ・トリアエズ (取り敢えず) ドリョー・ドリョー (度量, 心の太さ) ナニ
 カト・ナニカト (何かと) ナワトビ・ナワトビ (縄飛び) ニジ・ニジ (虹)
 ニンカ・ニンカ (認可) ネッシン・ネッシン (熱心) ハードル・ハードル
 (hurdle) バウンド・バウンド (bound) ハザクラ・ハザクラ (葉桜) ハハ
 ・ハハ (母) ヒガシ・ヒガシ (東) ヒバチ・ヒバチ (火鉢) ヒフ・ヒフ (皮
 膚) ビフー・ビフー (美風) ブチョー・ブチョー (部長) フッタ・フッタ
 (降った) ベッコン・ベッコン (別懇) ポイント・ポイント (point) ホーズ
 エ・ホーズエ (頰杖) ボート・ボート (boat) ポール・ポール (pole) ボク
 ・ボク (僕, 代名詞) マーじゃん・マーじゃん (麻雀) マツノキ・マツノキ
 (松の木) ミガワリ・ミガワリ (身替り) ミサキ・ミサキ (岬) モクズ・モ
 クズ (藁屑) モノ・モノ (者) モノサシ・モノサシ (物差し) ヤキザカナ・
 ヤキザカナ (焼肴) ヨ・ヨ (世) ヨザクラ・ヨザクラ (夜桜) ヨロコビ・ヨ
 ロコビ (喜び) ヨロシイ・ヨロシイ (宜しい) リョーイキ・リョーイキ (領域)
 レール・レール (rail) ローラク・ローラク (籠絡)

音声に関するもの

アコーデオン・アコーデオン アスコ・アソコ アタタカイ・アッタカイ イ
 イ・ヨイ (良い) イキアウ・ユキアウ (行きあう) イギリス・イギリス (igiri-
 su・ijirisu) イク・ユク (行く) イロイロナ・イロンナ インキ・インク
 ヴァイオリン・パイオリン ウタウ・ウトー (歌う, 終止形) ウデル・ユデル (茹

である) エイギョーシヨ・エイギョージヨ (営業所) エンカツ・エンコツ (田滑)
 オカエンナサイ・オカエリナサイ (出迎えの時の) オトツイ・オトトイ (一昨日)
 オモウ・オモー (思う, 終止形) オリカミ・オリガミ (折紙) オンナジ・オナ
 ジ (同じ) カイイ・カニイ (痒い) カイル・カエル (帰る) カカシ・カガシ (菜
 山子) カカト・カガト (踵) カシ・クッシ カツテ・カッチ カンサン・カン
 ザン (換算) キシヤ・キシヤ (汽車, kisha・kisha) キツサ・キツチャ (喫
 茶) 京都イキ・京都ニキ (行き) キレイダ・キレダ グフウ・クフウ (工夫
 kufu:・kufu:) ケイエイ・ケーエー (経営) ゲイジツ・ゲイジユツ (芸術)
 ゲシユク・ゲシク (下宿) ケンキユーシヨ・ケンキユージヨ (研究所) ゲンサ
 イ・ゲンサツ (滅殺) コーオモウヒト・コーオモーヒト (こう思う人) コート
 ーガッコー・コートーガッコー (高等学校) ココ・ココ (此処, koko・koko)
 ココヘイケバ・ココヘユケバ (行けば) コノクライ・コノグライ (位, 脇詞)
 サカン・シャカン (左官) サケ・シャケ (鮭) サブイ・サムイ (寒い) サミ
 シイ・サビシイ シアワセ・シヤワセ (幸) シクハク・シユクハク (宿泊) シ
 ュジン・シジン (主人) ジッセン・ジュッセン (十銭) シツパツ・シユツパツ
 (出発) ジテンシャ・ジデンシャ (自転車) ジューゴヤ・ジューゴヤ (十五夜)
 シンガッキ・シンガッキ (新学期) シンジュク・シンジク (新宿) セイサクシ
 ュ・セイサクジヨ (製作所) セガタカイ・セーガタカイ (背が) ゼスチャ・ジ
 ェスチャ ゼリイ・ジェリイ ゼンアク・ゼンナク (善悪) ゼンコク・ゼンゴク
 (全国) センセイ・センセー (先生) センタク・センダク (洗濯) ソシテ・
 ソーシテ タトイ・タトエ (副詞) タマゴ・タマゴ (卵) チフス・チフス ツ
 オイ・ツヨイ (強い) テイム・チーム (スポーツの team) ドレクライ・ド
 レグライ ナド・ナゾ (等) ナスカ・ナノカ (七日) ニッポン・ニホン (日
 本) バアイ・バヤイ (繕合) ハイ・ハエ (蠅) ハカマ・ハカマ (袴) ハシ・
 ハジ (端) ハシユツシヨ・ハシユツジヨ (派出所) ハナカミ・ハナガミ (鼻紙)
 ハンカチ・ハンケチ ピアノ・ピヤノ ビスケット・ビスケット ビルディング・
 ビルジング ファン・ファン プラットホーム・プラットフォーム ホオ・ホホ
 (頬) ホオエム・ホホエム ホッソク・ハッソク (発足) ホケンジヨ・ホケン
 シヨ (保健所) ホノオ・ホノホ (炎) ホントダ・ホントーダ (本当) マッス
 グ・マツグ (真直) マッセキ・パッセキ (末席) マスカレル・マサガレル (免)

ミンナ・ミナ (皆) ムツカシイ・ムズカシイ (難) メタル・メダル (賞牌)
 メンボク・メンモク (面目) ヤッパリ・ヤッパシ (矢張) ユシツ・ユシユツ (輸
 出) リーグセン・リーグセン (一戦)

語法に関するもの

子供を愛することが大切です・愛す 仕事に飽かない・飽きない たいへん暖かい日です・暖かな 昨日は暖かかった・暖かだった 雨が降る日でした・雨の 私は今もういいです・いいんです (要りませんの意) 学校に行かせた・行かした 早く行かせればいい・行かせば どうしても行かなければならない・行かなくては あなたが行くしかないでしょう・行くほか 学校に行くみたいだ・行くようだ あなたが行けば大丈夫でしょう・行くなら よくいたましたら火からおろします・いためられましたら そう言っていらっしやいます・おっしゃっています みんなここにいます・いまです 試験を受けさせた・受けました 英語が話せる・英語を 英語の学び始めにこう言われました・英語を 大きな木です・大きい おかあさん・おかあさま お身体をお気をつけて下さい・お身体に 早く起きろ・起きよ お紅茶を飲みましょう・紅茶を お米を買う・米を 先生がお書きになったのです・書かれたのです 彼の努力に負っている・負うて おパンを食べましょう・パンを たいへん面白いですよ・面白いですよ たいへん面白かったです・面白でした 責任を重んずる人です・重んじる これをお話みなさい・話みなさい 話を終ります・終えます 芸術を解することは必要です・解す 誰にだって書きうることです・書きえる 写真が飾られてある・飾られている 学校に行く・学校へ かなりの人出でした・かなりな 何も感心することはない・感心する ちょつと感ずることがあってね・感じる 将来を期することにしよ・期す 書いて下さいませ・下さいまし 熱心に研究されました・研究になりました お降りの方はございませんか・いらっしゃいませんか あの人は多分こまい・くまい あの人はこやしないよ・きやしないよ 忙しくてこられませぬ・これませぬ 仕事をさせた・さした あの人の心を察することができる・察する ちょつと寒いがでかけよう・寒いけれど 裏切りをされて困った・しられて それには賛成できません・賛成することができません 勉強もしないで遊んでい

る・～せずに～ 前途を祝すことにしました・～祝する～ 出席させていただきま
 す・出席いたします 知らなければならぬ・～知らねばならぬ これからスケ
ッチするんです・～スケッチしるんです この風習は廃れるでしょう・～廃るで
 しょう 仕事をすませた・～すました 仕事をする時はしつかりやれ・しる～
席に着いて下さい・席へ～ 川に沿って歩きました・～沿うて～ 機械が損ずるで
 しょう・～損じるでしょう 全く大膽不敵の人でした・～大膽不敵な～ 時間が
 足りないね・～足りないね 足りないことはない・足らん～ 意味が通ずましょ
 う・～通じるでしょう 船を岸につないで置く・～つなげて～ そんなことはな
 かるう・～ないだろう 物をなくすことはよくありません・～なくすア～ 先生
 がなさいました・～なされました 先生がなさつたんです・～なすつたんで
 そんなににらまないで下さい・にらめないで～ 先生、教室には誰も残つていませ
 ん・～残っておりません 命令を發する人でしょう・～發する～ すぐ腹を立つ
 のはよくない・～腹を立てるのけ～ 明日は晴れましよう・～晴れるでしょう
風が吹くと寒くなるだろう・～吹けば～ とうとう滅んでしまいました・～滅び
 て～ 本が置いてある・本を～ 他人に任さない・～任せない 誰かに任せばい
 い・～任せば～ 真赤な顔をしています・真赤い～ 規則は守られべきだ・～
守るべきだ 映画を見させた・～見させた 見たがるなら見させればいい・～
見させば～ 水が飲みたい・水を～ どこからでも見られる・～見れる 努力が
報いられました・～報われました 怒るのも無理ならぬことであつた・～無理か
らぬ～ 仕事を命ずる人です・～命じる～ それは名誉なことです・～名誉の～
先生は煙草を召上りませんか・～おあがりになりませんか あの方のお名前は
 何と申し上げますか・～おつしゃいますか 日本語に訳すことは困難です・～訳
する～ 非常に時間を要する仕事です・～要す～ これは私にも読まれる・～読める
リンゴが好きだ・リンゴを～ わたくしはそう思います・～わたしは～ どう
しても忘れられません・～忘れられません わりに面白い映画です・わりと～

第2回調査

はじめに理由の選択肢を一括してかかげる。これは「C. 調査の経過 3. 第
 2回調査 (1)調査法」にかかげた「理由一覧」と同じものであるが、次のよう
 な数字記号をつけ、次の問題語一覧における各語の選択肢はこの数字記号をも

って示す。

- | | | |
|----------------|--------------|-----------------|
| 011—一般的だ | 021—増加の傾向にある | 031—新鮮だ |
| 012—特殊的だ | 022—減少の傾向にある | 032—古くさい |
| 041—伝統的だ | 051—本来の形だ | 061—共通語的だ |
| 042—新奇すぎる | 052—くずれた形だ | 062—地方語的だ |
| 071—東京山手的だ | 081—関東的だ | 091—使用地域が広い |
| 072—東京下町的だ | 082—関西的だ | 092—使用地域が狭い |
| 101—口頭語的だ | 111—口語的だ | 121—日本語的だ |
| 102—文章語的だ | 112—文語的だ | 122—外国語的だ |
| 131—本来の日本語調だ | 141—中流以上が使う | 151—教養層が使う |
| 132—翻訳調だ | 142—下流が使う | 152—非教養層が使う |
| 16—ある種の人だけが使う | 171—規範に合う | 181—望ましい体系を作る |
| | 172—規範に合わない | 182—望ましい体系を作らない |
| 191—変化の傾向にそう | 201—論理的だ | 211—語感がよい |
| 192—変化の傾向にさからう | 202—非論理的だ | 212—語感が悪い |
| 221—ていねいだ | 231—よい表現を加える | 241—おぼえやすい |
| 222—ていねいすぎる | 232—悪い表現を加える | 242—おぼえにくい |
| 223—ぞんざいだ | | |
| 251—言いやすい | 261—聞きわけやすい | 271—簡潔だ |
| 252—言いにくい | 262—聞きわけにくい | 272—簡潔でない |
| 281—意味を区別する | 29—教科書にある | 30—NHKが使う |
| 282—意味を区別しない | | |

問題語を次にかかげる。

選択肢の並べ方は次に示すような数字の順序ではなく、ランダムに並べた。

アクセントに関するもの

- アカトソボ・アカトソボ (赤蜻蛉) 【採る理由】 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—【採らない理由】 012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 アサヒ・アサヒ (旭日) 【新聞やたばこなどの名でない普通名詞】 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 カミナリ(ガ)・カミナリ(ガ)(雷) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 サカ(ガ)・サカ(ガ) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 16, 182, 192, 212 ス(ガ)・ス

(ガ) (巢) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 281, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212, 282 セカイ・セカイ (世界) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 16, 182, 192, 212 タカラモノ(ガ)・タカラモノ(ガ) (宝物) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 ハザクラ(ガ)・ハザクラ(ガ) (葉桜) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 ボク(ガ)・ボク(ガ) (僕[自分を呼ぶ語, 代名詞]) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 ヨ(ガ)・ヨ(ガ) (世) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 (以上, 共通の問題語)

アカスリ(ガ)・アカスリ(ガ) (垢磨) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 イガイ(ダ)・イガイ(ダ) (意外) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 イトコ・イトコ (従兄弟・従姉妹) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 イネムリ(ガ)・イネムリ(ガ) (居眠り) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 オキヤクサマ(ガ)・オキヤクサマ(ガ) (お客様) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 キューメイ(スル)・キューメイ(スル) (糺明) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 クメン(ガ)・クメン(ガ) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 コゴ(ガ)・コゴ(ガ) (午後) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 ザ(ガ)・ザ(ガ) (座[が白ける]) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 シロイ(イヌガ)・シロイ(イヌガ) (白い) 011, 021, 051, 071, 171, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 16, 172, 182, 192, 212 シロク(ナル)・シロク(ナル) (白く) 011, 021, 051, 071, 171, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 16, 172, 182, 192, 212 シンルイ(ガ)・シンルイ(ガ) (靨類) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 ツユ(ガ)・ツユ(ガ) (梅雨) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 281, 30—012, 022, 052, 072, 16, 182, 192, 212, 282

デンワ(ガ)・デンワ(ガ) (電話) 011, 021, 031, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 182, 192, 212 ナワトビ(ガ)・ナワトビ(ガ) (繩飛び) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 ハハ(ガ)・ハハ(ガ)

(母) 011, 021, 051, 071, 181, 191, 211, 30—012, 022, 052, 072, 182, 192, 212 ボー
 ト(ガ)・ボート(ガ) (boat) 011, 021, 051, 071, 121, 181, 191, 211, 30—012, 022,
 052, 122, 172, 182, 192, 212 マーじゃん(ガ)・マーじゃん(ガ) (麻雀) 011, 021,
 031, 051, 071, 121, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 122, 182, 192, 212
 ラジオ(ガ)・ラジオ(ガ) (radio) 011, 021, 031, 051, 071, 121, 181, 191, 211, 30—
 012, 022, 032, 052, 072, 122, 182, 192, 212 レール(ガ)・レール(ガ) (rail) 011, 021,
 031, 051, 071, 121, 181, 191, 211, 30—012, 022, 032, 052, 072, 122, 182, 192, 212 (以
 上, 非共通の問題語)

音声に関するもの

アコーディオン・アコーディオン (de・di, 手風琴) 011, 061, 121, 122, 151, 171, 211,
 231, 251, 30—012, 062, 121, 122, 152, 172, 212, 232, 252 未だカツテ聞いたこと
 がない・〜カッチ〜(嘗て) 041, 051, 101, 151, 211, 251, 271, 281, 29—042, 052,
 102, 152, 212, 252, 272, 282 サケ・シャケ (sa・ja, 鮭) 011, 051, 071, 081, 091,
 211, 251, 261, 29—012, 052, 072, 082, 092, 16, 212, 252, 262 シンジュク・シンジ
 グ (新宿) 011, 051, 061, 101, 171, 191, 211, 221, 251, 271—012, 052, 062, 102, 172,
 192, 212, 223, 252, 272 この国をニッポンといいます・〜ニホン〜(日本) 011, 041,
 062, 121, 122, 211, 251, 261—012, 042, 061, 121, 122, 212, 252, 262 ハイ・ハエ
 (蠅) 011, 021, 051, 061, 101, 211, 251, 261, 29—012, 022, 052, 062, 102, 212, 252, 262
 ピアノ・ピヤノ 011, 051, 101, 121, 122, 171, 191, 211, 221, 251—012, 052, 102, 121,
 122, 172, 192, 212, 223, 252 ファン・ファン (野球の〜) 011, 051, 121, 122, 151,
 211, 231, 251, 261—012, 052, 121, 122, 152, 212, 232, 252, 262 ホオ・ホホ (頬)
 011, 041, 051, 061, 101, 171, 191, 241, 251—012, 042, 052, 062, 102, 172, 192, 242, 252
 ムツカシイ・ムズカシイ (難しい) 011, 051, 061, 081, 101, 211, 251, 261—012, 052,
 062, 082, 102, 212, 252, 262 (以上, 共通の問題語)
アスコ・アソコ (彼処) 011, 051, 061, 071, 101, 171, 181, 211, 221, 251—012, 052,
 062, 072, 102, 172, 182, 212, 223, 252 イリグチ・イリグ [グ] チ (入口) 011,
 041, 061, 111, 171, 181, 191, 211, 251, 271—012, 042, 062, 112, 172, 182, 192, 212, 252,
 272 ヴァイオリン・バイオリン (va・ba) 011, 051, 061, 121, 122, 151, 191, 211,
 231, 251, 30—012, 052, 121, 122, 152, 192, 212, 232, 252 ウサギ・ウサギ (gi・ji,
 兎) 031, 061, 091, 101, 171, 181, 191, 211, 251, 30—032, 062, 092, 102, 172, 182, 192,

212, 252 歌をウタウ・〜ウトー(歌う) 011, 021, 041, 051, 081, 101, 181, 211, 251,
261—012, 022, 042, 052, 082, 102, 16, 182, 212, 252, 262 カイイ・カニイ(痒い)
011, 031, 051, 061, 081, 101, 191, 211, 251, 261—012, 032, 052, 062, 082, 102, 192, 212,
252, 262 カシ・グッシ(ka・kwa, 菓子) 011, 021, 051, 061, 091, 101, 191, 211,
241, 251—012, 022, 052, 062, 092, 102, 16, 192, 212, 242, 252 ケンキューシヨ・
ケンキュージヨ(研究所) 011, 051, 061, 081, 171, 191, 211, 251, 30—012, 052, 062,
092, 172, 192, 212, 252 この紙がイイ・〜ヨイ(良い) 011, 041, 061, 101, 151, 211,
221, 251, 261—012, 042, 062, 102, 152, 212, 223, 252, 262 サミシイ・サビシイ(寂
しい) 011, 051, 061, 101, 151, 171, 211, 251, 261—012, 052, 062, 102, 152, 172, 212,
252, 262 ジッセン・ジュッセン(十銭) 011, 051, 061, 101, 191, 211, 221, 251, 271
—012, 052, 062, 102, 192, 212, 223, 252, 272 シッパツ・シユッパツ(出発) 011,
021, 051, 061, 101, 171, 191, 211, 221, 251—012, 022, 052, 062, 102, 172, 192, 212, 223,
252 センセイ・センセー(先生) 011, 051, 061, 101, 171, 191, 211, 221, 251—
012, 052, 062, 102, 172, 192, 212, 223, 252 センタク・センダク(洗濯) 011, 031,
051, 061, 081, 101, 171, 191, 211, 251—012, 032, 052, 062, 082, 102, 172, 192, 212, 252
タトイ雨が降っても・タトエ〜(副詞) 011, 031, 051, 061, 101, 171, 211, 221, 251, 261
—012, 032, 052, 062, 102, 172, 212, 223, 252, 262 卵をウデル・〜ユデル(茹で
る) 011, 051, 061, 071, 091, 141, 191, 211, 221, 251—012, 052, 062, 072, 092, 142, 192,
212, 223, 252 ホオエム・ホホエム(微笑む) 011, 051, 091, 101, 181, 191, 211, 251,
261, 29—012, 052, 092, 102, 182, 192, 212, 252, 262 ホッソク・ハッソク(発足)
011, 021, 041, 051, 061, 101, 151, 171, 211, 241—012, 022, 042, 052, 062, 102, 152, 16,
172, 212, 242 マスカレル・マスカ〔ガ〕レル(免れる) 011, 021, 041, 051, 061,
101, 151, 211, 251—012, 022, 042, 052, 062, 102, 152, 212, 252 ユシツ・ユシユツ
(輸出) 011, 021, 051, 061, 101, 171, 191, 211, 221, 251—012, 022, 052, 062, 102, 172,
192, 212, 223, 252 (以上, 非共通の問題語)

語法に関するもの

仕事に飽かない・〜飽きない 011, 031, 061, 081, 111, 181, 211, 281—012, 032, 062, 082,
112, 182, 212, 282 ここにお名前をお書き下さいませ・〜下さいまし(女性の会話)
011, 031, 041, 051, 061, 101, 171, 181, 211—012, 032, 042, 052, 062, 102, 16, 172, 182,
212 あの人はこやしませんよ・〜きや〜 011, 031, 041, 061, 101, 141, 171, 181,

251—012,032,042,062,102,142,172,182,252 ぼくには彼の心を察さススことが
 できません・～察さスス～ 011,021,031,051,061,101,111,181,211,251—012,022,
 032,052,062,102,112,182,212,252 この仕事はあなたがななさなつたのですか・～
ななさなつたのですか 011,031,041,051,062,111,181,211,251—012,032,042,052,
 061,102,16,182,212,252 水みづが飲のみたい・水みづを～ 011,021,031,041,131,171,
 181,201,281—012,022,032,042,132,172,182,202,282 ひまがなくて美術展は
見みられななかつた・～見みれななかつた (可能の言い方) 011,021,041,061,091,101,171,
 181,281—012,022,042,062,092,102,172,182,282 これをそのまま日本語に訳
すことはできません・～訳わけする～ 011,031,061,101,111,171,181,211,251—012,
 032,062,102,112,172,182,212,252 先生はそうおおつつしゃしゃっていました 011,021,
 031,041,061,171,181,211,251—012,022,032,042,062,172,182,212,252 どん
 な場所でも交通規則は守まもられるべきだ 011,021,041,131,151,171,181,211,231,29
 —012,022,042,132,152,172,182,202,212,232 (以上、共通の問題語)
雨あめが降ふっている日でした・雨あめの～ 011,031,041,061,101,111,171,181,211,281—
 012,032,042,062,102,112,172,182,212,282 大急ぎで学校に行いかせたんですよ・
～行いかしたんですよ 011,021,031,041,061,101,171,181,211,251—012,022,032,
 042,062,102,172,182,212,252 弟は英語が話はなせます・～英えいご語ごを～ 011,021,031,
 041,061,101,131,171,181,201—012,022,032,042,062,102,132,172,182,202
ずいぶん大おおきな家いえですね・～大おおきいい～ 011,061,081,101,181,211,251,261—012,
 062,082,102,182,212,252,262 お身体おからだをお気おきをつけて下さい・お身体おからだに～011,
 061,101,131,141,171,211,251,281—012,062,102,132,142,172,212,252,282
 他人に任まかさないで自分でおおやりななさい・～任まかせない～ 011,031,041,051,061,101,
 171,191,251,281—012,032,042,052,062,102,172,192,252,282 かなりかなりの成績せいせき
 をおさめました・かなりかなりな～ 011,031,041,061,101,181,211,281—012,032,042,
 062,102,182,212,282 迷惑めいわくを感かんずる人もあるでしょう・～感かんじる～ 011,031,
 041,051,061,101,111,141,171,211—012,032,042,052,062,102,112,142,172,212
誰たれも知しらならならうです・～知しらならならうです 011,021,051,061,141,171,211,251—
 —012,022,052,062,142,172,212,252 川かわに沿よって歩あいて行いきました・～沿ようて～
 011,031,041,061,081,111,171,211,251,29—012,032,042,062,082,112,172,212,
 252 この仕事はどなたがななさいましたか・～ななさいましたか 011,031,041,051,

061, 101, 141, 171, 211, 251—012, 032, 042, 052, 062, 102, 142, 172, 212, 252 そんなことは誰かに任せばいい・～任せれば～ 011, 031, 041, 051, 061, 101, 171, 191, 251, 281—012, 032, 042, 052, 062, 172, 192, 252, 282 雪が朝日にきらきらと輝いている景色がとてもきれいでした・雪の～ 011, 031, 041, 061, 101, 171, 211, 281—012, 032, 042, 062, 102, 172, 212, 282 これならわたしも読まれます・～読めます 011, 031, 041, 051, 061, 101, 171, 211, 251—012, 032, 042, 052, 062, 102, 172, 212, 252 先生は熱心に御研究されました 011, 031, 051, 061, 101, 151, 171, 181, 211, 221—012, 032, 052, 062, 102, 152, 172, 182, 212, 223 お紅茶を飲みませんこと(女性どうしの会話) 011, 021, 041, 061, 101, 171, 211, 221—012, 022, 042, 062, 102, 16, 172, 212, 223 みんなここにいるです 011, 031, 041, 061, 171, 181, 211, 241, 281—012, 032, 042, 062, 16, 172, 182, 212, 242, 282 あなたが行くしか方法がないでしょう 011, 021, 041, 061, 141, 171, 181, 211, 271—012, 022, 042, 062, 142, 172, 182, 212, 272 これが日本の運命であることを知らねばなりません 011, 031, 041, 061, 081, 101, 171, 211, 251, 271—012, 032, 042, 062, 082, 102, 172, 212, 252, 272 まあ、ぜんぜんすばらしいわ 011, 021, 041, 061, 101, 171, 181, 191, 211—012, 022, 042, 062, 102, 16, 172, 182, 192, 212 (以上、非共通の問題語)

問題語の中には、2形にゆれているだけでなく、3形以上にゆれていると見られるものもある。しかし、既述のように、今は標準的な形を問うことが目標ではなく、それを考える際の基準を求めようとしたものであるから、ゆれている形を全部かかげてたずねることはせず、2形だけをかかげた。(採るべき形としてその他の形を考える場合は、それを記入してもらうことにした。)

また語法関係の問題の中には、「おっしゃってました」「守られるべきだ」のような、1形だけをかかげたものがある。これらは、使用形がゆれているというよりも、この形が標準的なものとして認められるかどうかの問題とされると見られるものである。

理由欄の無記入

第1回調査・第2回調査とも、回収された調査表の中には、質問事項中のある欄が無記入のままになっているものが少なからず含まれていた。この、「採

る(望ましい)理由,採らない(望ましくない)理由」についても無記入のもの多かった。第2回調査について見ると,理由欄の無記入(完全無記入ないし大部分無記入)の数は次のような状況であった。

アクセント 34名, 音声 9名, 語法 11名

なお,無記入の特に多かった問題語は,次のとおりである。

〔アクセントに関するもの〕

アサヒ カミナリ サカ ス セカイ タカラモノ ハザクラ ボク ヨ イネム
リ オキヤクサマ ゴゴ ザ

〔音声に関するもの〕

シンジユク・シンジク ニホン・ニッポン ハイ・ハエ ピアノ・ビヤノ ムツ
カシイ・ムズカシイ ウサギ・ウサギ イイ・ヨイ サミシイ・サビシイ ウデ
ル・ユデル

〔語法に関するもの〕

下さいませ・～まし 水が・～を 見られなかった・見れ～ おっしゃってしま
した 守られるべきだ 雨が・～の 英語が・～を 大きな・大きい おからだを・
～に かなりな・～の 御研究されました お紅茶 います 知らねばなりません
ん ぜんぜん

用いられた理由の種類

さきにかかげた「理由一覧」表中のもので全く用いられなかった理由は,一つもなかった。のみならず,その他に書き加えられた理由はかなり多かった。第1回調査の結果あらわれた理由は整理して,第2回調査における理由の選択肢に加えたが,第2回調査の結果,さらに新しく書き加えられた理由は,下記のようにまとめた。

- 〔外〕1. 表記と合う,合わない。
- 〔外〕2. 流行語だ。
- 〔外〕3. 原地の発音だ(地名の場合)。
- 〔外〕4. 外人にも言いやすい。
- 〔外〕5. 意味が強い,弱い。

〔外〕6. 正式だ。

〔外〕7. 自然だ。

〔外〕他 ○地方に広めよい。○京阪の中心地で使う。○学校で習っている。

○演説口調だ。○書きにくい。○語形がくずれない。○ていねいすぎず、よい。○文としての表現がすぐれている。○改めることは事実できぬ。

○歴史的かなづかいから現代かなづかいへの変化を起さない。

そのほか特に記入されていても、かかげられているものに含められると考えられたものは、そのように取り扱った。要するに、「理由一覧表に〔外〕1～〔外〕他を加えたものが、この問題語に即した調査であらわれた理由、すなわち標準的語形を考えるための基準の種類の手立てである。

(1). 各人の回答

各人の回答は、1人1枚の整理表に写し取って、保存することにした。各人の回答のさまは、その傾向がきわめて多様である。

全体として非常に多種類の理由を用いているものがあり、反対に少数種類の理由を用いているものがある。さらにそれを、個々の問題語に対するあげ方について見ると、問題語ごとに多種類の理由をあげているものがあり、逆に、少数種類の理由をあげているものがある。また、同一の理由を多くの語に適用している、すなわち、理由の適用に一貫性の著しいものがあり、逆に、語ごとに理由の選び方がちがうもの、すなわち理由の適用が分散的であるものがある。また、たとえば、アクセントに関する問題語については一貫性がある、音声・語法に関する問題語については分散的である、というようなものも多い。また、「理由一覧」についての調査の結果にも見られたように、「一般的 特殊的」「共通語的、地方語的」「本来の形、くずれた形」等の、いわば客観的な条件に関する項目を主として用いているもの、また、「語感がよい、悪い」「言いやすい、言いにくい」等の、いわば主観的な条件に関する項目を主として用いているもの、各種の理由にまんべんなくわたっているものなどがある。

具体的に一二の例を示す。(第2回調査の中から出す)

(表の中で、A、Bのように示したものは採る形、(A)、(B)のように示したものは採らない形である。)

A表は、全体として理由の種類が多く、個々の問題語に相当多くの理由を用いているもの。また、アクセントに関する問題語については理由の適用の一貫性がかなり著しく、音声・語法に関する問題語については、かなり理由の適用が分散的であるもの。客観的条件に属する理由が多く出ているが、主観的条件に属する理由もかなり用いられている。

B表は、全体的にも、個々の問題語についても、理由の種類が少なく、アクセント・音声に関するものと、語法に関するものと二つに分けて、それぞれにおける理由の適用が著しく一貫的であるもの。そして、その二つにおける理由の性格は異質的である。

なおA表・B表は、傾向のかなり著しく違うものを例として出ただけのことで、代表的のものを示すというような意味は全くない。

各人の回答には、付記された説明や意見で重視すべきものが少なくなかったが、ここには省略する。

(2) 集計によって見た傾向

問題語ごとの理由のあげられ方を見るために、回答者全員のものを合わせて、語別に理由の度数を数えて一覧してみた。(第1回調査は問題語別の回答者の数が少なく、さらにまた方法もフリー式・チェック式と分れていたため、集計の意味は特に少ない。よって、第2回調査の結果だけについて述べる。)

まず個々の語について述べる前に、理由のあげられ方の全般的な傾向を述べる。すなわちアクセント・音声・語法のそれぞれの問題語全体について特に多くあげられた理由を調べてみることにする。

アクセント

回答者の10%以上があげた理由

一般的・特殊的・本来の形・語感がよい・語感が悪い——30語に

山手的・望ましい体系を作る——20語以上に

増加の傾向・くずれた形——15語以上に

特に、「一般的」の理由は全体30語中の26語について回答者の50%以上が、「特殊的」「語感がよい」はともに28語について回答者の30%以上が、「語感が悪い」は23語について回答者の30%以上があげている。

音 声

回答者の10%以上があげている理由

一般的・特殊的・語感がよい・語感が悪い——28語に

言いやすい・言いにくい——29語に

本来の形・くずれた形——20語以上に

口頭語的——15語以上に

また、回答者の50%以上が使用した理由は、「一般的」が3語に、「言いやすい」が6語に用いられたほか、1語に用いられたものが二三。アクセントにおけるような著しいものは見られない。

語 法

回答者の10%以上があげている理由

一般的——30語に

特殊的・共通語的・語感がよい・語感が悪い——20語以上に

規範に合う・地方語的・伝統的・口頭語的・望ましい体系を作る・望ましい体系を作らない・言いやすい・言いにくい——15語以上に

また、回答者の50%以上が使用した理由は「一般的」の10語に用いられたほかは、各1語に用いられたものが二三あるにすぎない。

以上、アクセント・音声・語法を通じて、特に多くあげられた理由は「一般的」「特殊的」「語感がよい」「語感が悪い」であることが見られる。ことに、「一般的」は全問題語の約3分の2について50%以上の回答者が用いているのである。

各類を比較してみると、アクセントでは、音声・語法における以上に、「一

般的」「特殊的」「語感がよい」「語感が悪い」がきわめて多く用いられて強力な理由となっているほか、「山手的」「増加の傾向」等、他の類にあまり多くないものの多くあげられているのが目立ち、音声では「言いやすい」「言にくい」が強力で、「口頭語的」が他の類に比べて多く用いられているのが目立ち、語法では「共通語的」「地方語的」「規範に合う」「伝統的」等の多いのが特色をなしている。

また、アクセントの問題語について「山手的」「増加の傾向」が多く用いられたことは、回答者のうちに、アクセントは東京語の実態調査にもとづいて標準的なものをきめればよいという意味の意見を付してきた人々があったことと符合するとも考えられるし、また、アクセントの問題語としてかかげたものの中には、山手的・下町的のちがいのしばしば論ぜられてきたものが少なくなかったことにもよると思われる。アクセントについては、山手的アクセント・下町的アクセントの別のこと、年長層のアクセント、年少層のアクセントの別のことなどが実態調査にもとづいてよく論ぜられているところである。アクセントについて考えるときはこれらはおのずから問題となる観点だとも言えよう。音声について「言いやすい」「言にくい」が多いのは、問題語の性質上自然であろうし、「口頭語的」が多いのは、くだけた感じの言い方とあらたまった感じの言い方の違いとしてよく論じられてきた語がかなり多く出されたことによる。語法については、一般にわかっていることが多い。「共通語的」「地方語的」「伝統的」などはそういう知識にもとづく判断であろう。また、「規範に合う」の多いことは、そうした理由の考えられやすい問題語が多く出されたためとも考えられるが、また、そうした理由の考えられやすいことが、語法の問題の一般的な性質であるとも言えよう。

なお、大まかに言って、アクセントに関する問題語については、あげられた理由の種類が比較的少なく、かつ問題語の大多数に対して同一の理由があげられるという傾向が著しい。いわば理由の集中度が高いと言えよう。これに対し、音声に関する問題語、語法に関する問題語については、あげられた理由の種類

が比較的多く、かつ、問題語ごとにあげられる理由が異なるという傾向が著しい。いわば、理由の適用が分散的で、集中度が低いのである。ことに語法に関する問題語において集中度がもっとも低い。

このような結果のあらわれ方については、個々の問題語の出し方によって左右されるところのあることは予想されるし、また、各問題語に付した選択肢のかかげ方に影響されるところのあることも考えられないではない。選択肢については、事実、われわれのかかげ方は、アクセントに関する問題語については、各語に同じもののかかげ、音声に関する問題語、語法に関する問題語については、語ごとにちがったもののかかげるといふ相違が傾向としてあった。しかし、問題語ごとに、考えられそうな理由をできるだけ幅広く取ってかかげた結果として、アクセントに関する問題語において選択肢が語ごとに共通的になり、全体的にその種類が少なくなったのであるから、それは、問題語の性質にもとづく、ある程度必然の結果であったと考える。したがって、回答の結果についても、選択肢のかかげ方に大きく影響されたと見ることは、当を得ないと考える。また、音声や語法に関しては考えられるが、アクセントについては考えられにくいという条件が、いくつかある。たとえば、「口頭語的」「文章語的」「口語的」「文語的」「日本語調」「翻訳調」「論理的」「非論理的」「ていねい」「ぞんざい」「簡潔」「簡潔でない」「教科書にある」等。逆に、アクセントについてだけ考えられて、音声や語法については考えられないというような条件はほとんどない。このような事実が、問題語の性質の相違としてあると言えよう。また、アクセントに関しては、国語研究者や国語に特別の関心をもつ文化人の中でも、知識・反省・意見等をもっているものが音声や語法に関するほど多くないのではなからうか。そのことは、回答中、アクセントに関する問題語に対する無記入が著しく多かったこと、また、回答中、アクセントに関する問題語の回答には自信がないという意味のことわり書きを付された人が多かったことなどによってもうかがわれる。このような一般的な事実の相違が、かなり強く反映されるところがあると考えられる。したがって、アクセント・音声・語法の

それぞれの問題語の別に応じてあらわれた結果の差異は、ある程度一般的なものとして見てよかろうと考える。

一般的立場で考えられた結果との比較

個々の問題語を離れて一般的に考えられた結果（「理由一覧」による質問への回答）と、問題語に即して考えられた結果との異同を検討してみよう。「共通語的」「地方語的」は語法についてかなり著しく出たものの、アクセント・音声においてはあまり目立っていない。しかし、一般的立場では、これは「一般的」「特殊的」「語感がよい」「語感が悪い」とともに最も多く出た項目に属する。そのほか、問題語に即してはあまり出なかったが一般的立場では著しく多く出ているものを拾うと、「聞きわけやすい」「聞きわけにくい」「使用地域が広い」「使用地域が狭い」「意味を区別する」「意味を区別しない」等があった。また逆に、アクセントでかなり著しく出た「山手的」は、一般的立場においては、あらわれ方の最も少ない部類の一つであった。

このような両者の間のずれは何によるものであろうか。第1には、問題語に即した場合の理由のあらわれ方は、問題語の選び方によって左右されることが大きい。したがって、この調査においては、ここに選ばれた90語に応じた理由のあらわれ方が見られたのだということである。その具体的な事情は、すぐ次に個々の問題語に即しての吟味をする時にある程度明らかにされるであろう。第二に、たとえば「共通語的」「地方語的」や「使用地域が広い」「使用地域が狭い」のような条件は、一般的立場では、すなわち観念的には重要視されても、具体的な問題語については、判断の根拠となる知識がなければ理由としてあげにくいということがある。このような事情も考えられる。特にこの第2の事情については、こういう事情に制約されない結果を出すためには、どういう調査を行ったらいいかという、調査法の反省を促されるわけでもある。

C. 語別整理

1語1語について整理してみる。観察の重点は、標準的語形を考えるための基準の反映であるところの、それぞれの語形についての「採る理由」「採らな

い理由」であるが、その観察を助けるために、「採る形」「使う形」についても大まかに傾向をとらえてみる。記述のしかたは次に述べるとおりである。

1. 【採る形】 次のような表現を用いる。「絶対多数」——回答者の80%以上が採るとしたもの。「多数」——回答者の55~79%が採るとしたもの。「ほぼ同数」A・B両形がともに46~54%の場合。「少数」——回答者の21~45%が採るとしたもの。「ごく少数」——回答者の20%以下が採るとしたもの。(標準的語形として採るべきものを直接考えようとするのがこの調査の目的ではないので、このようにごく大まかに整理することにした。)

2. 【理由】 まず、それぞれの語形について、「採る理由」として回答者の10%以上があげたもののかかげ、「採らない理由」として回答者の20%以上があげたものを()に包んで添える。「採らない理由」は概して「採る理由」ほど重視して回答されていない傾向にあったので、軽く扱うことにしたのである。(こうしてかかげられたもののうち、A・B両形に出た同一理由に○をつけ、同一語形に出た相反する理由に*をつける。)

次に、アクセント・音声・語法のそれぞれの問題語における理由の出方の全般的な傾向(前述)からややはずれた特徴的な現象を、()に包んで付記した。主として、全般的に多く出た理由(「(2)集計によって見た傾向」に示した。)以外に、その語に限って多く出た理由(A・B・Cの語形全部を合わせて回答者の10%以上があげたもの)、および他の語に比べて特に多く出た理由を示したものである。その問題語について標準的語形を選ぶ際にどういう基準が多く適用されるかを見るためには、このような整理も有意義と考えられるからである。回答の中に、A形を「一般的」の理由で採ると指定しながら、「事実においてB形の方が一般的であるならばB形を採る」と付記されたようなものもあったのである。

次に回答者の類別によって見た理由の出方の差異を記述する。回答者の類別は「C.調査の経過」の中にかかげた回答者類別一覧による。これには、専門・年齢・地域・性という各種の分け方のうち、その語によって差異が出そうだと

考えた分け方をあててみて著しくあらわれた点だけを記述することにする。回答者の類別は、前にも述べたように、この調査ではあまり重視されるものではないが、これによって理由の出方を見るとき、とにかく問題語における理由の出方が一層具体的に示されて、その語の理由の出方について説明するところがあるのである。

以上の理由の整理は、第2回調査の回答だけを対象としたものである。

3. [使う形] 回答者の類別によって見た使う形の傾向的な差異を述べる。これも、その語によって差異の出そうだと考えた分け方をあてはめてとらえた目ぼしいあらわれだけを述べることにする。一般に、標準的なことばと考えるものと自分の使うことばとの間には、かなり大きな相関があるだろうと予想される（両者の一致率は後述）のであって、標準的語形を考えるための基準に関する意見の観察の上にも、使う形の傾向は、一つの参考資料となるものと考えられる。そのためにこれをここに合わせて示す。なお、この項については、第2回調査の語と、これと共通する第1回調査の語との結果を合わせて見た。（回答者の類別のしかたは第1回調査のものを第2回調査と同様に直して取り扱った。）したがって、第2回調査の回答だけを対象とした[理由]の項と合わせて見る上にやや不都合がある。ただし、第1回調査は人数が少なかったこと、また少数の語について両回における傾向を別々に出して比べてみたところでは、ほとんど同一であったことを考えると、ここに示すところは第2回調査だけにおける傾向と大差はないものと言えそうに思う。

以上1, 2, 3の各項をながめ、おもに[理由]のあらわれ方に関し、多少の考察を添えてみることにする。ただしこれは十分に尽そうとするものでなく、思いつくものを述べるという程度にする。

アクセントに関するもの

Aアカトンボ・Bアカトンボ（赤蜻蛉）回答者 174

[採る形] B形が多数。第1回調査ではB形が絶対多数。

[理由] B形——°一般的44%, °語感がよい26%, 増加の傾向20%, 望ましい休

系を作る・変化の傾向にそう各15% A形——本来の形, °*語感がよい各12%, °*一般的10% (*語感が悪い29%, *特殊的, 減少の傾向各21%) 回答者の類別によって見ると, 下町に限って, A形を「語感がよい」とし, B形を「語感が悪い」とするものが多い。また, 下町においては, A形を「一般的」とするものとB形を「一般的」とするものがほぼ同数である点も注目される。〔使う形〕全般にB形が多いが, 下町に限ってA形の方が多い。また, 年長層ほどA形の率が比較的高い。

○従来, A形を老人たちが使い, B形を若い人たちが使う, A形は下町に行われているなどと言われてきたことと相通ずる結果がここにも出た。理由の出方について見ても, 「増加の傾向」「変化の傾向にそう」「本来の形」等がそれぞれかなり多く出たことなどは, こうした事情の反映と見られる。(以下アクセントに関する問題語については, これと似た関係の考えられるものが少なくないが, いちいち述べることを省略する。)

Aアサヒ・Bアサヒ(旭日) 回答者 169

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——°一般的44%, °語感がよい22%, 増加の傾向11% A形——°*一般的24%, °*語感がよい15% (*特殊的・*語感が悪い各19%) 回答者の類別によって見ると, 年少層ほど, B形を「語感がよい」とし, A形を「語感が悪い」とするものが多く, 年長層ほどその逆が多い。

〔使う形〕年少層にはB形が多く, 年長層にはA形が多い。また, 東部に限ってA形の方が多い。

Aカミナリ・Bカミナリ(ガ)(雷) 回答者 158

〔採る形〕A形とB形とがほぼ同数。第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕B形——°一般的23%, °語感がよい23%, 本来の形16% A形——°*一般的24%, °*語感がよい13% (*語感が悪い23%, *特殊的20%) 回答者の類別によって見ると, 下町には, B形を「一般的」とし, A形を「特殊的」とするものが多く, 山手周辺においてはその逆である。

〔使う形〕山手・九州だけにA形の方が多い。

Aサカ(ガ)・Bサカ(坂) 回答者 164

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査ではA形が多数。

〔理由〕A形——一般的53%, 語感がよい26%, 本来の形・山手的各19% B形——(特殊的39%, 語感が悪い27%)

〔使う形〕全般にA形が多いが, 西部にB形の率が比較的高い。

Aヌ(ガ)・Bヌ(巢) 回答者 161

〔採る形〕A形とB形とがほぼ同数。第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕B形——^o一般的26%, ^o意味を区別する20%, ^o語感がよい17%, 本来の形13%, 望ましい体系を作る10% A形——^{o*}一般的22%, ^o語感がよい14%, ^o意味を区別する11%(*特殊的17%)(「意味を区別する」, 「意味を区別しない」《A形に》が他に比べて多く出た点特徴的。) 回答者の類別によってみると, 東部には, B形を「一般的」とするもの, 「語感がよい」とするもの, 「意味を区別する」とするものが多く, 西部には, A形を「一般的」とするもの, 「語感がよい」とするもの, 「意味を区別する」とするものが多い。

〔使う形〕年長層にB形の方がやや多く, 年少層にA形の方がやや多い。

○「意味を区別する」「意味を区別しない」の理由が比較的多く出たものには, このほかにヨ・ヨ, ツユ・ツユがあるが, いずれもアクセントによって意味の区別される同音語の関係にあるものである。

Aセカイ・Bセカイ(世界) 回答者 161

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——^o一般的36%, ^o語感がよい18%, A形——^{o*}一般的26%, ^{o*}語感がよい16%(*特殊的・*語感が悪い各21%) 回答者の類別によって見ると, 年少層には, B形を「一般的」とするもの, 「語感がよい」とするものが多く, 年長層には, A形を「一般的」とするもの, 「語感がよい」とするものが多い。また, 山手周辺には, B形を「一般的」とするものが多く, 下町にはA形を「一般的」とするものが多い。

〔使う形〕年少層にはB形が多く、年長層にはA形が多い。

A タカラモノ(ガ)・B タカラモノ (宝物) 回答者 155

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——°一般的36%，°語感がよい27%，本来の形12% B形——
°*一般的21%，°*語感がよい10% (*語感が悪い27%，*特殊的23%)

A ハザクラ・B ハザクラ(ガ) (葉桜) 回答者 159

〔採る形〕A形が多数。第1回調査ではA形が絶対多数。

〔理由〕A形——°一般的50%，語感がよい33%，本来の形・山手的各11%
B形——°*一般的10% (語感が悪い36%，*特殊的32%)

A ボク(ガ)・B ボク (僕) 回答者 159

〔採る形〕B形が多数。第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕B形——°一般的44%，語感がよい28%，本来の形25% A形——増
加の傾向11%，°*一般的10% (語感が悪い31%，*特殊的26%)

A ヨ・B ヨ(ガ) (世) 回答者157

〔採る形〕A形・B形がともにほぼ半数。第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕B形——°一般的27%，本来の形19%，°語感がよい17% A形——
°*一般的20%，°語感がよい11% (*特殊的20%)

A アカスリ(ガ)・B アカスリ (垢磨) 回答者 57

〔採る形〕A形が多数。

〔理由〕A形——°*一般的32%，°語感がよい25%，山手的16% (*特殊的25
%) B形——°*一般的37%，°*語感がよい16% (*語感が悪い26%，°*特殊的
21%) 回答者の類別によって見ると、年長層にはA形を「語感がよい」とす
るものが多く、年少層にはB形を「語感がよい」とするものが多い。

〔使う形〕年長層にはA形が多く、年少層にはB形が多い。

○この語は現在ほとんど行われていない語であるが、カミナリ・イネムリなど
同型の問題と大体において同じような結果があらわれたことは、アクセントに
ついて考える上で注目すべきことであろう。さらに言うならば、この語におけ

る理由のあげられ方は、アクセントに関する大部分の問題語と、大体において同じ状況であるが、このことは、アクセントの類に関しては、大体同様の基準によって標準的語形が考えられる傾向が強いと言えようか。

Aイガイ・Bイガイ(ダ) (意外) 回答者 49

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——°一般的37%， °*語感がよい18%， (°*語感が悪い27% A形——°*一般的29%， °*語感がよい25%， 本来の形14% (*°語感が悪い27%， *特殊的25%)

Aイトコ・Bイトコ (従兄弟・従姉妹) 回答者 59

〔採る形〕 B形が絶対多数。

〔理由〕 B形——°一般的56%， 本来の形27%， 語感がよい24%， 山手的14%， 望ましい体系を作る10% A形——°*一般的10% (*特殊的42%， 語感が悪い24%， くずれた形17%)

Aイネムリ(ガ)・Bイネムリ (居眠り) 回答者 56

〔採る形〕 A形・B形がほぼ同数。 第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕 B形——°*一般的39% (*特殊的23%， 語感が悪い21%) A形——°*一般的32%， 語感がよい25%， 本来の形11% (*特殊的20%) 回答者の類別によって見ると、下町に限ってA形を「一般的」とするものの方が多い。

Aオキヤクサマ・Bオキヤクサマ(ガ) (お客様) 回答者 53

〔採る形〕 A形・B形がほぼ同数。

〔理由〕 A形——°一般的40%， °語感がよい25%， 山手的13% B形——°*一般的23%， °語感がよい17%， 本来の形11% (*特殊的23%)

Aキューメイ・Bキューメイ(スル) (糺明) 回答者 58

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕 B形——°一般的45%， 増加の傾向・°語感がよい各16%， °本来の形14% A形——°*一般的14%・°本来の形・°*語感がよい各12% (*特殊的・*語感が悪い各33%) 回答者の類別によって見ると、年少層には、B形を「一般

的」とするもの、「語感がよい」とするものが多い。年長層には、A形を「一般的」とするもの、「語感がよい」とするものが多い。

〔使う形〕全般にB形が多いが、年長層ほどA形の率が比較的高い。

Aクメン・Bクメン(ガ) (工面) 回答者 60

〔採る形〕A形・B形がほぼ同数。

〔理由〕A形——°*一般的35%・°*語感がよい17% (*特殊的・*語感が悪い各33%) B形——°*一般的40%、°語感がよい25%、増加の傾向15%、山手的10% (*特殊的30%)

Aゴゴ(ガ)・Bゴゴ (午後) 回答者 57

〔採る形〕B形が多数。第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕B形——語感がよい35%、本来の形26%、°一般的・望ましい体系を作る各19%、山手的11% A形——°*一般的12% (*特殊的・語感が悪い各39%) 回答者の類別で見ると、B形を「本来の形」とするものの率は、年長層ほど高い。

Aザ・Bザ(ガ) (座) 回答者 57

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——°一般的39%、°語感がよい21% B形——°*一般的32%、°*語感がよい14% (*特殊的26%、*語感が悪い25%)

Aシロイ・Bシロイ(イヌ) (白い) 回答者 59

〔採る形〕A形が絶対多数。

〔理由〕A形——°一般的54%、語感がよい29%、本来の形24%、望ましい体系を作る17%、規範に合う15%、山手的10% B形——°*一般的14% (*特殊的39%、語感が悪い29%)

Aシロク・Bシロク(ナル) (白く) 回答者 58

〔採る形〕A形が絶対多数。

〔理由〕A形——一般的45%、語感がよい40%、本来の形24%、望ましい体系を作る17%、規範に合う14% B形——(語感が悪い34%、特殊的29%、くず

れた形21%)

A $\overline{\text{シ}}\text{ンルイ}$ ・B $\overline{\text{シ}}\text{ンルイ(ガ)}$ (親類) 回答者 59

〔採る形〕 B形が多数。第1回調査ではA形が多数。

〔理由〕 B形—— $^{\circ}$ 一般的53%, 増加の傾向14% A形—— $^{\circ}$ *一般的27%, $^{\circ}$ 語感がよい14%, 本来の形12% (*特殊的39%) 回答者の類別によって見ると B形を「一般的」とするものは年少層ほど多い。また, A形を「本来の形」とするものは特に年長層に多い。

A $\overline{\text{ツ}}\text{ユ(ガ)}$ ・B $\overline{\text{ツ}}\text{ユ}$ (梅雨) 回答者 59

〔採る形〕 A形が多数。第1回調査ではA形が絶対多数。

〔理由〕 A形—— $^{\circ}$ 一般的44%, 意味を区別する27%, 本来の形25%, $^{\circ}$ 語感がよい15%, 望ましい体系を作る10% B形—— $^{\circ}$ *一般的・ $^{\circ}$ 語感がよい各14% (意味を区別しない31%, *特殊的25%) (「意味を区別する」「意味を区別しない」の多く出たことが特徴的。)

A $\overline{\text{デ}}\text{ンワ}$ ・B $\overline{\text{デ}}\text{ンワ(ガ)}$ (電話) 回答者 59

〔採る形〕 B形が多数。第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕 B形—— $^{\circ}$ 一般的54%, 語感がよい19%, 増加の傾向12% A形—— $^{\circ}$ *一般的24% (*特殊的34%) 回答者の類別によって見ると, B形を「一般的」とし, A形を「特殊的」とするものが, 年少層ほど多い。

A $\overline{\text{ナ}}\text{ワトビ}$ ・B $\overline{\text{ナ}}\text{ワトビ(ガ)}$ (縄飛び) 回答者 57

〔採る形〕 A形が多数。第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕 A形—— $^{\circ}$ *一般的42%, 増加の傾向21%, $^{\circ}$ 語感がよい18%, 変化の傾向にそう12% ($^{\circ}$ *特殊的21%) B形—— $^{\circ}$ *一般的23%, $^{\circ}$ 語感がよい12%, 本来の形11% ($^{\circ}$ *特殊的25%)

A $\overline{\text{ハ}}\text{ハ(ガ)}$ ・B $\overline{\text{ハ}}\text{ハ}$ (母) 回答者 61

〔採る形〕 B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形—— $^{\circ}$ 一般的48%, 語感がよい33%, $^{\circ}$ 本来の形18% A形—— $^{\circ}$ 本来の形13%, $^{\circ}$ *一般的10% (語感が悪い25%, *特殊的16%) 回答者の類別

によって見ると、B形を「一般的」とするものが特に年少層に多い。

Aポート(ガ)・Bポート 回答者 60

〔採る形〕B形が絶対多数。第1回調査も同じ。

〔理由〕B形——一般的52%，本来の形・語感がよい各38%，望ましい体系を作る17%，山手的12% A形——(特殊的38%，くずれた形27%，語感が悪い25%)

Aマージャン・Bマージャン(ガ) (麻雀) 回答者 58

〔採る形〕A形が多数。第1回調査ではA形・B形が同数。

〔理由〕A形——^o一般的43%，語感がよい35%，本来の形17%，望ましい体系を作る10% B形——^{o*}一般的22% (語感が悪い33%，*特殊的26%)

Aラジオ・Bラジオ(ガ) 回答者 59

〔採る形〕A形が絶対多数。

〔理由〕A形——一般的53%，語感がよい39%，本来の形31%，新鮮だ・望ましい体系を作る各14% B形——(語感が悪い36%，特殊的29%，くずれた形24%)

Aルール(ガ)・Bルール 回答者 60

〔採る形〕B形が多数。第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕B形——^o一般的28%，本来の形27%，語感がよい19% A形——^o一般的35% (くずれた形・語感が悪い各22%)

(以上のポート・マージャン・ラジオ・ルールの各問題語には、「日本語的」「外国語的」の理由の出たことが他に比べて注目されたが、それもA・B両形のいずれかに10%以上に出たものはなかった。)

音声に関するもの

Aアコーディオン・Bアコーディオン 回答者 194

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——語感がよい26%，言いやすい25%，教養層が使う23%，*外国語的22%，^o一般的16%，よい表現を加える11% (*外国語的26%) A形——^o一般的26%，日本語的25% (語感が悪い30%) 回答者の類別によって見

ると、国語1・国語2・国語教育・新聞放送等・各界に、A形を「言いやすい」とするものの率が比較的高い。

〔使う形〕全般にB形が多いが、国語1・国語2・国語教育にA形の率が比較的高い。

Aピアノ・Bピアノ 回答者 191

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——本来の形34%，語感がよい30%，規範に合う16%，°一般的・外国語的・°言いやすい各14% B形——°言いやすい22%，°一般的12%，日本語的11%（くずれた形30%，語感が悪い21%）

〔使う形〕全般にA形が多いが、国語1・国語2にB形の率が比較的高い。

Aファン・Bファン 回答者 195

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——本来の形43%，教養層が使う35%，語感がよい28%，外国語的20%，よい表現を加える15%，°言いやすい・聞きわけやすい各14% B形——一般的・°言いやすい各13%，日本語的12%（くずれた形34%，非教養層が使う33%，語感が悪い30%）

〔使う形〕全般にA形が多く、特に言語1・言語2・各界はA形に集中しているが、国語，なかんづく国語2に比較的B形の率が高い。

Aヴァイオリン・Bバイオリン 回答者 51

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——言いやすい69%，一般的63%，日本語的59%，変化の傾向にそう12% A形——本来の形14%，*外国語的12%（言にくい59%，*外国語的51%，特殊的33%） 回答者の類別によって見ると、国語2に、特に、B形を「言いやすい」とするもの、「一般的」とするもの、「日本語的」とするもの、が多い。

○以上、外来語の問題語アコーデ(ディ)オン・ピア(ヤ)ノ・ファ(フア)ン・ヴァ(バ)イオリンの結果を通して見て、共通の現象として「日本語的」「外国語

的」「教養層が使う」「よい表現を加える」等の理由が他の語に比べて多く出たことが注目されるが、これは外来語としての性質上もっとものところである。なお、ひとしく外来語であっても、性質・事情の差異によって結果の上にも差異のあることが看取される。たとえば、ヴァ(バ)イオリンに「一般的」「外国語的」「日本語的」「言いやすい」「言いにくい」の集中度の高いのは、外来音の中でも、とりわけヴァの音が国語の発音に比べて異質的であるというようなことにもよるものと思われる。

A カツテ・B カッテ (嘗て) 回答者 195

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——本来の形54%，意味を区別する23%，語感がよい12%，教養層が使う10% B形——言いやすい17%，口頭語的12%（くずれた形47%，意味を区別しない20%）（「本来の形」「くずれた形」「意味を区別する」「意味を区別しない」のそれぞれ多く出たことが他の語に比べて特徴的。）

〔使う形〕全般にA形が多いが、年長層に特にA形の率が高い。

○カツテが本来で、カッテは読み誤りから生じたものとされていること、カッテと「勝手」との同音関係などが、以上の結果のうちに反映していることはいうまでもない。

A サケ・B シャケ (鮭) 回答者 194

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——一般的40%，本来の形35%，語感がよい26%，使用地域が広い・°言いやすい各16%，教科書にある10% B形——聞きわけやすい14%，°言いやすい13%（くずれた形・語感が悪い各26%，特殊的23%）（「使用地域が広い」「教科書にある」の多く出たことが他の語に比べて特徴的だが、その他にも「下町的」「ある種の人だけが使う」《ともにB形に》などの特徴的な理由が10～20%ほど出た。）回答者の類別によって見ると、A形を「本来の形」としB形を「くずれた形」とするものが特に国語教育に多い。また、A形を「一般的」とするものが東部・西部には圧倒的に多いが、東京にはB形を「一般的」

とするものが比較的多い。特に下町にはA形を「一般的」とするものは0。A形を「語感がよい」とするものの率は西部>東部>東京の順。A形を「言いやすい」とするものも西部に多く、東部ではA形・B形ほぼ同数。

〔使う形〕全般にA形が多いが、東京ではB形の率が比較的高く、特に下町ではB形の方が多い。

○従来B形が「下町的」と言われてきたが、以上の結果にはそれと符合する点が著しい。

Aシンジク・Bシンジク（新宿） 回答者 151

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——本来の形65%，共通語的28%，規範に合う27%，^o一般的23%，語感がよい11%（言いにくい29%） B形——変化の傾向にそう19%，口頭語的13%，^o一般的12%（くずれた形50%，地方語的23%）（「本来の形」「くずれた形」が後出のシュッパツ・シッパツとこの語とに全問題語中最も高率に出たこと、「規範に合う」「変化の傾向にそう」が他の語に比べて多く出たことが特徴的。なお少数ながら、「原地の発音に従う」《B形に》という理由のあったことが注目される。）

○ジュー→ジは拗音の直音化の現象と見られ、また、「宿」の字音から考えてA形が、「本来の形」「規範に合う」とされることは自然であって、このような理由の出方はうなずかれる。また、直音化が東部などではかなり一般化していることを考えれば、以上のあらわれ方はもっともと思われる。

Aニッポン・Bニホン（日本） 回答者 168

〔採る形〕A形が多い。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——聞きわけやすい35%，^o語感がよい32%，^o一般的・^o伝統的各16%，^o言いやすい13% B形——^o言いやすい24%，^o一般的22%，^o語感がよい19%，^o伝統的14%，日本語的11%（「伝統的」「日本語的」「聞きわけやすい」がそれぞれ多く出たこと、また、「語感がよい」が特に多く出たこと——音声に関する30語中、ウサギ・ウサギとともに最高——が特徴的。「日本語的」

は外来語以外にはこの語のみに出た。) 回答者の類別によって見ると、新聞放送等・文芸芸能にはB形を「一般的」とするものが多く、他はA形・B形ほぼ同数である。「伝統的」の理由は、国語2・文芸芸能に多く出たが、そのA形・B形における数は大体伯仲している。言語2に限ってB形を語感がよいとするものが多い。

〔使う形〕国語1・国語教育・新聞放送等では、かなりの差をもってA形が多いが、他ではA形・B形大体同数である。

○A形は戦争中の用法のいやな連想を起させて「語感が悪い」というような意見もあった。「日本語的」という理由については、国号として用いられるというこの語の特殊性に関連するところもあろう。なお、外国人にも発音しやすいという意味で、A形を「外国語的」だから採るという意見が、少数ながらあった。これも国号というこの語の特殊性に関連するものであろう。また、「一般的」「伝統的」「語感がよい」「言いやすい」の4種もの理由が、A形・B形に等しく多く出たことは、音声に関する問題語の中では異例に属することとして注目される。

Aハイ・Bハエ（蠅） 回答者 189

〔採る形〕A形が多数。 第1回調査ではB形が多い。

〔理由〕A形——言いやすい38%、一般的27%、増加の傾向18%、語感がよい15%、口頭語的13% B形——本来の形24%、聞きわけやすい20%（言いにくい27%）（「増加の傾向」「聞きわけやすい」の多く出たことが特徴的。なお、B形を採る理由として「教科書にある」というのが約5%出ていたことも他に比べて注目された。） 回答者の類別によって見ると、国語1・国語2・国語教育に特に「増加の傾向」「減少の傾向」の理由をあげたものが多い。また特に下町にはA形を「言いやすい」とするものが多い。東部には、B形を「言いやすい」とするものの率が比較的高い。

〔使う形〕全般にA形が多いが、下町に特にA形の率が高い。東部に限ってB形の方が多い。

Aホオ・Bホホ（頬） 回答者 194

〔採る形〕 A形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——言いやすい47%， 一般的28%， 口頭語的・変化の傾向にそう各22%， °本来の形・共通語的各10% B形——°本来の形17%（言いにくい39%， 変化の傾向にさからう20%）（「変化の傾向にそう」「変化の傾向にさからう」の多く出ていることが特徴的。） 回答者の類別で見ると， A形を「言いやすい」とするものが年長層ほど多い。 また， B形を「本来の形」とするものが年少層ほど多い。

〔使う形〕 最年少層を除いて全般にA形が多いが， 年少層ほどB形の率が高い。 ○B形は歴史的かなづかひの綴り字発音によるものだとする説もあるが， B形を「本来の形」とする考え方の中には， 歴史的かなづかひにもとづいているもののあることが察せられる。

Aホオエム・Bホホエム（微笑む） 回答者 60

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——本来の形38%， 語感がよい28%， 一般的・°言いやすい各22% A形——°言いやすい23%， 口頭語的・変化の傾向にそう各10%（くずれた形27%， 語感が悪い22%）

○ホオ・ホホの場合と似た結果を示しているが， B形「本来の形」—A形「くずれた形」の対比の著しい点は， ホオ・ホホの場合と異なる。「ホホと笑む」という語源から考えると注記した回答もあったが， そういう考え方の多いことを反映したあらわれ方とも見られようか。

Aムツカシイ・Bムズカシイ（難しい） 回答者 190

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——一般的35%， °言いやすい34%， °語感がよい21%， 共通語的19%， 口頭語的16%， 関東的14% A形——°語感がよい14%， 本来の形・°*言いやすい各12%（*言いにくい29%）（「共通語的」， 「地方語的」《A形に》， 「関東的」， 「関西的」《A形に》， 「聞きわけやすい」《A形・B形に》， がそれぞれやや

多く出たのが特徴的。) 回答者の類別によって見ると、東部・東京には、B形を「言いやすい」とするもの、「語感がよい」とするものが多く、西部には、A形を「言いやすい」とするもの、「語感がよい」とするものが多い。

〔使う形〕全般にB形が多いが、西部・九州にA形の率が比較的高い。

○以上の結果には、このゆれが関東・関西の対立として論じられてきたことと符合する点や、放送・教科書にB形が用いられていることを反映していると思われる点が多い。なお、「語感がよい」「言いやすい」がA・B両形に等しく多く出、またA形に「言いやすい」「言にくい」という相反する理由がともに多く出たのも、関東・関西の対立によるものとして理解できる。

Aアスコ・Bアソコ (彼処) 回答者 62

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——本来の形44%，[○]一般的24%，共通語的・語感がよい各21%，[○]言いやすい15%，望ましい体系を作る11% A形——[○]言いやすい23%，[○]一般的10% (くずれた形32%) (このほかに、「山手的」《おもにB形に》、「規範に合う」《おもにB形に》、「ぞんざい」《おもにA形に》がそれぞれ約10%出ており、これは他の問題語に比べて特徴的である。)

Aイリクチ・Bイリグチ (入口) 回答者 61

〔採る形〕B形が多数。

〔理由〕B形——言いやすい51%，[○]一般的31%，語感がよい18%，共通語的・口語的・望ましい体系を作る各13%。伝統的・変化の傾向にそう各10% A形——[○]一般的12% (言にくい43%)

Aケンキュージョ・Bケンキュージョ (研究所) 回答者 60

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——[○]言いやすい40%，一般的35%，語感がよい25% A形——[○]*言いやすい12% (*言にくい35%)

○以上の二語は連濁に関する問題語であるが、「入口」の場合は狭い母音に挟まれているものであり、「研究所」の場合は長音に後続する拗音であるという

ように条件の相違があり、また、和語と漢語との違いというような語の素姓の相違があり、それらが理由の出方の上に差異を生じていると見られる。

Aウサギ・Bウサギ（兎） 回答者 54

〔採る形〕 B形が多数。

〔理由〕 B形——語感がよい46%、^o言いやすい32%、^o共通語的24%、使用地域が広い・望ましい体系を作る各11% A形——^o*言いやすい17%（語感が悪い41%、地方語的・*言にくい各26%）（「共通語的」「地方語的」「語感がよい」「語感が悪い」「言いやすい」「言にくい」等の理由がそれぞれ多く出たことが注目される。） 回答者の類別によって見ると、A形を「語感がよい」とするものが東部・西部に少数あるが、東京にはない。

〔使う形〕 全般にB形が多いが、九州だけにA形・B形同数。

○ηとgとの使用が地域的に分れていること、放送でηが用いられていることなどが理由の出方の上に反映していると見られる。

Aウタウ・Bウトー（歌う） 回答者 63

〔採る形〕 A形が絶対多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——一般的46%、本来の形29%、望ましい体系を作る・聞きわけやすい各27%、言いやすい24%、口頭語的18%、関東的16%、増加の傾向・語感がよい各14% B形——（特殊的30%、文章語的27%、聞きわけにくい21%、くずれた形19%）（「望ましい体系を作る」、「望ましい体系を作らない」《B形に》、「聞きわけやすい」、「増加の傾向」、「減少の傾向」《B形に》、「関東的」、「関西的」《B形に》、「文章語的」がそれぞれ比較的多く表われたことが特徴的。）

○従来、ウタウは口語で、関東で用いる、ウトーは文語で、関西で用いるなどとも言われてきたが、それらと符合するものがある。また、「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」は、活用形を考えたの立場であろう。

Aカイイ・Bカユイ（痒い） 回答者 61

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——本来の形46%、一般的26%、共通語的・語感がよい・聞きわけやすい各16%（言いにくい21%） A形——口頭語的・言いやすい各16%、関東的10%（くずれた形33%）（「本来の形」が特に多く出たこと、「聞きわけやすい」「聞きわけにくい」《A形に》、「関東的」がそれぞれ比較的多く出たことが特徴的。）

Aカシ・Bクッシ（菓子） 回答者 61

〔採る形〕 A形が絶対多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——言いやすい61%、一般的53%、共通語的44%、使用地域が広い39%、増加の傾向31%、変化の傾向にそう23%、口頭語的21%、語感がよい12% B形——（言いにくい49%、地方語的44%、減少の傾向41%、使用地域が狭い34%、変化の傾向にさからう28%、特殊的26%）（「言いやすい」「言いにくい」が特に多く出たこと、「増加の傾向」「減少の傾向」「使用地域が広い」「使用地域が狭い」「変化の傾向にそう」「変化の傾向にさからう」がそれぞれ多く出たことが特徴的。）

〔使う形〕 大部分がA形。西部・九州に少数B形がある。

○いわゆる唇音退化によるクッ行拗音の直音化の現象であり、それが全国的に広がっていることから、上記の結果は当然のあらわれ方であろう。音声の問題語に共通的に多く出た「本来の形」「くずれた形」などの理由は、すでにここでは出る余地がなくなっているようである。

Aイイ・Bヨイ（良い） 回答者 56

〔採る形〕 A形が多数。 第1回調査ではA形・B形ほぼ同数。

〔理由〕 A形——言いやすい45%、口頭語的39%、°一般的30%、語感がよい16%、°共通語的14% B形——°一般的・伝統的各16%、°共通語的・ていねい各14%（文章語的・言いにくい各29%）（「口頭語的」「文章語的」が特に多く出たこと、「伝統的」「ていねい」の比較的多く出たことが特徴的。）

〔使う形〕 全般にA形が多く、特に東京はA形の率が高いが、西部に限ってB形が多い。

○B形が「伝統的」「文語的」であり、あらたまった場合の言い方であるなどと言われていることと相応ずるあらわれ方と見られる。(なお、使う形の上に見られた差異に応ずるものが理由の上に出なかったのは、この場合は、「関東的」「関西的」等の理由を選択肢の中にかかげなかったためかとも思われる。)

Aサミシイ・Bサビシイ(寂しい) 回答者 55

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——一般的46%、本来の形35%、共通語的32%、言いやすい16%、口頭語的・語感がよい・聞きわけやすい各15% A形——(特殊的40%、くずれた形・地方語的各20%) (「共通語的」が相当多く出、「聞きわけやすい」、「教養層が使う」《おもにB形に》がやや多く出たのが特徴的。)

○文語形「さびし」に照してB形を「本来の形」と見ることや、放送用語としてふつつB形が行われていることなどを反映したあらわれ方と言えよう。

Aジッセン・Bジュッセン(十銭) 回答者 58

〔採る形〕A形が多数。第1回調査はB形が多数。

〔理由〕A形——言いやすい43%、^o一般的25%、^o本来の形22%、語感がよい17%、共通語的12%、変化の傾向にそう・簡潔各10% B形——^o本来の形26%、^o一般的10% (言にくい24%、語感が悪い22%) (「本来の形」「言いやすい」「言にくい」が相当多く出、「変化の傾向にそう」「簡潔」がやや多く出たことが特徴的。) 回答者の類別によって見ると、A形を「言いやすい」とするものが共通して多いが、特に下町にはB形を「言いやすい」とするものは0。

○A形・B形のいずれが「本来の形」ということはしばしば問題にされていて、しかも説が定まらないが、「本来の形」という理由がかなり多く、しかも両形にほぼ同じ率に出ていることは、このことを反映しているものと言えよう。

Aシッパツ・Bシュッパツ(出発) 回答者 60

〔採る形〕B形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——本来の形65%、規範に合う38%、一般的33%、共通語的27%、語感がよい22%、^o言いやすい17%、ていねい12% A形——^o言いやすい15%

(くずれた形58%, 語感が悪い28%, 規範に合わない23%, 特殊的22%)

Aユシツ・Bユシュツ (輸出) 回答者 60

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——本来の形60%, °一般的35%, 規範に合う22%, 共通語的15%, 語感がよい10% (言にくい25%) A形——言いやすい33%, 口頭語的15%, °一般的・変化の傾向にそう各10% (くずれた形43%)

(上の二つの問題語に共通して、「本来の形」「くずれた形」「言いやすい」等が特に多く出たこと、「規範に合う」「規範に合わない」《ともにA形に》, 「ていねい」《B形に》, 「ぞんざい」《A形に》等が、やや目立って出たことが特徴的。)

○これも拗音の直音化として問題にされる現象で、B形が字音に即して本来であり、「規範に合う」などとされることはうなずかれる。なお、この二つの問題語が同類のものであるといっても、問題の音節の語中における位置や接続する前後の音節が違うために、回答の結果に多少の差異が生じたことも当然であろう。

Aセンセイ・Bセンセー (先生) 回答者 60

〔採る形〕 A形・B形がほぼ同数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——本来の形37%, ていねい20%, 規範に合う・語感がよい各18%, °一般的・°共通語的各17% (言にくい33%) B形——言いやすい33%, °一般的32%, 変化の傾向にそう20%, 口頭語的15%, °共通語的12% (くずれた形27%, ぞんざい20%) (「本来の形」「くずれた形」「言いやすい」「言にくい」が特に多く出たこと、「規範に合う」, 「変化の傾向にそう」, 「変化の傾向にそわない」《A形に》, 「ていねい」, 「ぞんざい」がそれぞれ多く出たことが特徴的。) 回答者の類別によると、九州に、A形を「一般的」とするもの、「本来の形」とするもの、「言いやすい」とするものの多いのが、他地域と対照的。

〔使う形〕 国語1・国語2・国語教育にはB形が多く、新聞放送等・各界には

A形が多い。

○二重母音の長音化と考えられている問題であって、A形を採る理由には、それが字音に即した本来のものとする見方が著しくあらわれていると言えよう。

Aセンタク・Bセンダク（洗濯） 回答者 61

〔採る形〕 A形が絶対多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——一般的49%，共通語的38%，語感がよい28%，°言いやすい25%，本来の形18%，関東的12% B形——°言いやすい15%（語感が悪い38%，地方語的31%，特殊的26%）（「共通語的」「地方語的」「語感がよい」「語感が悪い」「言いやすい」が、それぞれかなり多く出たこと、「関東的」，「関西的」《B形に》の出ていることが特徴的。） 回答者の類別によると、西部に限って、B形を「一般的」とするもの、「言いやすい」とするものが多い。特に東京・九州にA形を共通語的とするものが多い。また、特に、東部にA形を「一般的」とするものが多い。

○この語の清濁が関東・関西の対立とされていることを、以上の結果は反映している。

Aタトイ・Bタトエ（副詞） 回答者 61

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——°一般的25%，本来の形23%，言いやすい21%，語感がよい18%，共通語的16%，口頭語的15%，規範に合う・聞きわけやすい各13% A形——°一般的13%（「聞きわけやすい」「規範に合う」がやや多く出たことが特徴的。）

Aウデル・Bユデル（蕪でる） 回答者 59

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査はA形・B形同数。

〔理由〕 B形——本来の形44%，一般的39%，語感がよい27%，共通語的25%，°言いやすい20%，使用地域が広い・中流以上が使う各12% A形——°言いやすい10%（くずれた形34%，語感が悪い24%，特殊的22%，地方語的20%）（「共通語的」，「中流以上が使う」，「下流が使う」《A形に》，「使用地域が広い」

がそれぞれやや多く出たことが特徴的。)

○A形をなまった俗っぽい語とする見方にもとづくと思われる点が著しい。

Aホック・Bハック(発足) 回答者 60

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——伝統的38%, 教養層が使う32%, 本来の形23%, 語感がよい20%, °一般的17% B形——増加の傾向22%, おぼえやすい20%, °一般的13%(非教養層が使う27%, 語感が悪い22%) (「伝統的」「教養層が使う」, 「非教養層が使う」, 「増加の傾向」, 「減少の傾向」《A形に》, 「おぼえやすい」, 「おぼえにくい」《A形に》がそれぞれかなりの率で出たことが特徴的。) 回答者の類別で見ると, 年少層にはB形を「一般的」とするものが多く, 年長層にはA形を「一般的」とするものが多い。

○近來A形が若い人々の間にふえてきていると見られ, また, どちらを使うかは知識教養の違いであると考えられているが, そのような一般の見方を反映していると思われる点が多い。なお, 「おぼえやすい」「おぼえにくい」は音声に関する30語中もっとも高率に出ているが, これは「発」の字をハツと読む場合が大部分であることを考えたものであろう。

Aマヌカレル・Bマヌガレル(免れる) 回答者 70

〔採る形〕A形・B形がほぼ同数。第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕A形——°一般的10%(言にくい27%) B形——言やすい37%, °一般的16%, 語感がよい13%(率はあまり高くないが「伝統的」「文章語的」《以上おもにA形に》, 「増加の傾向」「口頭語的」《以上おもにB形に》)の出ていることが特徴的。) 回答者の類別では, 東京にはA形を「一般的」とするものが多く, 西部にはB形を「一般的」とするものが多い。東部には, A形を「一般的」とするものとB形を「一般的」とするものとがほぼ同数。また, 東京にはA形を「言やすい」とするものとB形を「言やすい」とするものとがほぼ同数で, 東部・西部・九州にはB形を「言やすい」とするものが多い。
○A形については文語形マヌカルとの連想があり, 「伝統的」「文章語的」等の

理由は特にそれにもとづくものと察せられる。

語法に関するもの

(文脈を省略する。文脈は、さきにかかげた問題語一覧に示すとおり。)

A飽かない・B飽きない 回答者 192

〔採る形〕B形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——一般的46%，共通語的・口語的の各34%，語感がよい24%，関東的・望ましい体系を作る各13% A形——（文語的33%，特殊的・地方語的の各19%）（「関東的」，「関西的」《A形に》，「口語的」，「文語的」がそれぞれかなり多く出ていることが，他の問題語に比べて特徴的。）回答者の類別で見ると，A形を「一般的」とするものは全般に少ないが，特に東京には0。西部にはA形を「一般的」とするものの率がやや高い。

〔使う形〕全体にB形が多いが，東京に特にA形が少なく，西部に比較的A形の率が高い。

○A形は古い形，関西系，文語に用いられる，B形は東京語，話し言葉に用いられるなどと言われてきたが，上記の結果には，これと相通ずる点が多い。

A任さない・B任せない 回答者 60

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——一般的30%，本来の形23%，規範に合う・言いやすい各20%，共通語的17%，伝統的15% A形——（言にくい20%）（「本来の形」，「くずれた形」《A形に》，「変化の傾向にそう」《おもにA形に》，「意味を区別する」《A形・B形ともに》）が比較的多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると，A形を「一般的」とするものが西部だけに比較的多い。B形を「伝統的」とするもの，「本来の形」とするものが東京・東部に多く，A形を「伝統的」とするもの，「本来の形」とするものが西部に多い。

○この語は近世以降五段活用に用いられるようになり，それがしだいに多くなりつつあると言われているもので，上の理由の出方はこれと符合している点が多い。なお，関東・関西の相違と言われていることも理由の分れ方の上に反映

している。

A任せば・B任せれば 回答者 61

〔採る形〕 B形が多数。 第1回調査ではB形が絶対多数。

〔理由〕 B形——°一般的31%，本来の形25%，規範に合う23%，°言いやすい16%，口頭語的15%，伝統的13% A形——°言いやすい20%，°一般的12%（「任さない」、「任せない」と大体同様のあらわれ方である。） 回答者の類別で見ると、B形を「言いやすい」とするものが東京・東部に多く、A形を「言いやすい」とするものが西部に多い。西部に限ってまた、A形を「共通語的」とするものが多い。

〔使う形〕 全般にB形が多いが、西部に、A形の率が比較的高い。

A行かせた・B行かした 回答者 60

〔採る形〕 A形が絶対多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——一般的42%，規範に合う35%，共通語的30%，伝統的・望ましい体系を作る・語感がよい各22% B形——言いやすい10%（特殊的28%，地方語的・語感が悪い各22%） 回答者の類別で見ると、A形を「一般的」とするものが全般に多いが、東京・東部には、B形を「一般的」とするものの率が比較的高い。A形を「言いやすい」とするものと、B形を「言いやすい」とするものとは全般にほぼ同数であるが、東京にはA形を「言いやすい」とするものは0。

○これも五段化現象の例によくあげられる語で、これについての結果もさきの「任さない・任せない」の結果と似た傾向を示している。

Aなさいました・Bなさいました 回答者 61

〔採る形〕 A形が絶対多数。B形は0。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——口頭語的53%，一般的49%，言いやすい43%，語感がよい36%，共通語的25%，規範に合う15% B形——（古くさい48%，文章語的44%，語感が悪い28%，言にくい26%，特殊的23%）（「古くさい」「口頭語的」「文章語的」「言いやすい」「言にくい」が多く出たことが特徴的。） 回答者の

類別で見ると、年少層に特にB形を「古くさい」「文章語的」とするものが多い。○以上の結果は、この2形について一般に論じられている所とほとんど全く符合する。

・Aなさった・Bなすった 回答者 189

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——本来の形57%，一般的42%，望ましい体系を作る32%，語感がよい19%，伝統的18%，言いやすい14% B形——（くずれた形43%，特殊的25%，ある種の人だけが使う19%，望ましい体系を作らない14%）（「本来の形」「くずれた形」「ある種の人だけが使う」「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」が多く出たことが特徴的。ことに、「本来の形」「くずれた形」の出た率の高さは、語法に関する問題語の中では異例である。） 回答者の類別で見ると、国語1・国語2に特に「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」の理由をあげたものが多い。文芸芸能に「語感がよい」「語感が悪い」の理由をあげたものが多い。なお、下町に限ってB形を「語感がよい」としたものが多い。

〔使う形〕全般にA形が多いが、西部・九州に比べて東京にB形の率が高い。○B形は女性に多く用いられるとか、下町に多いとか言われているが、「ある種の人だけが使う」という理由は、これらにつながるものかと思われる。「女性語としてはよい」との意見の付されている回答もあった。また、五段活用の語として考える立場から、「本来の形」「くずれた形」「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」等の理由が出たものであろう。

・A察する・B察しる 回答者 194

〔採る形〕A形が多数。第1回調査ではA形が絶対多数。

〔理由〕A形——本来の形40%，一般的29%，語感がよい26%，言いやすい20%，共通語的18%，望ましい体系を作る16% B形——口頭語的13%，口語的12%，増加の傾向10%（語感が悪い29%，くずれた形24%，特殊的・言いにくい各19%）（「本来の形」「くずれた形」「口語的」「文語的」「A形に」が比

較的多く出たことが特徴的。) 回答者の類別で見ると、下町に限って、B形を「一般的」とするものの方が多い。

〔使う形〕全般にA形はるかに多いが、下町に限ってB形の率がやや高い。

○これはサ変の一段活用化と言われる現象の例に属するもので、B形は東京特に下町や関東の話し言葉で行われると言われている。上記の結果はこのような事情を反映している。

A感ずる・B感じる 回答者 58

〔採る形〕B形が多数。第1回調査ではA形が多数。

〔理由〕B形——口語的34%，口頭語的31%，°一般的28% A形——伝統的17%，°一般的・本来の形各16%，規範に合う12%，語感がよい10%（文語的31%，文章語的19%）（「口語的」「文語的」が多いこと、「本来の形」「くずれた形」《B形に》、「古くさい」《A形に》がやや多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると、B形を「一般的」とするものが年少層ほど多い。

○これは「察する・察する」と同類の問題語で、結果の上にも似た傾向が見られるが、かなりの差異もある。両問題語の性質・事情の差異によるものであろう。また、文脈の相違による点があるかとも考えられる。

A訳す・B訳する 回答者 195

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——一般的58%，口語的・言いやすい各35%，口頭語的29%，語感がよい24%，共通語的19%，望ましい体系を作る12%，規範に合う11% B形——（文語的34%，言にくい30%，文章語的29%，特殊的・語感が悪い各26%）（「口語的」「文語的」が多く出たこと、「古くさい」《B形に》がやや多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると、九州に限ってB形を「規範に合う」とするものが多く、また、西部にもその率が比較的高い。

〔使う形〕全般にA形が多いが、西部に比較的B形の率が高く、九州ではA形B形同数。

○サ変か五段活用かの問題で、現在では五段活用が多い。特に関東に多いとき

れているが、そういう事情が上の結果にも反映していると見られる。

以上の3語を通じて「口語的」「文語的」の理由がかなり多く出ていることは注目すべきであろう。

Aこやしません・Bきやしません 回答者 193

〔採る形〕B形が多数。第1回調査でも同じ。なお、A形・B形のほかに「きはしません」の形がかなり出た。

〔理由〕B形——一般的48%、共通語的29%、言いやすい24%、望ましい体系を作る21%、規範に合う19%、伝統的10% A形——（地方語的31%、特殊的30%、望ましい体系を作らない25%、言いにくい20%）（「共通語的」、「地方語的」、「望ましい体系を作る」、「望ましい体系を作らない」、「規範に合わない」《A形に》がそれぞれ相当多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると、国語1・国語2・国語教育に「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」の理由をあげたものが多い。国語教育・新聞放送等・文芸芸能・各界に「言いやすい」「言いにくい」の理由をあげたものが多い。また、B形を「一般的」とするものが全般に多いが、東京、とりわけ山手周辺にはA形を「一般的」とするものの率が比較的高い。

〔使う形〕全般にB形はるかに多いが、東京・東部にはA形の率がやや高く、特に山手周辺に高い。

A沿って・B沿うて 回答者 61

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——共通語的43%、一般的36%、関東的34%、口語的25%、語感がよい・言いやすい各16% B形——（関西的41%、地方語的33%、文語的21%）（「共通語的」「地方語的」「関東的」「関西的」「口語的」「文語的」がそれぞれかなり多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると、国語2に限ってB形を「語感がよい」とするものが多い。

○A形・B形の対立が関東系と関西系、口語と文語等の対立と考えられ、また放送や教科書等で一般にA形が用いられているという事情が上の結果に反映し

ている。

A 知らなそう・B 知らなさそう 回答者 60

〔採る形〕 B形が多数。

〔理由〕 B形——°一般的20%，°本来の形17%，°言いやすい13%，規範に合う10%（言にくい30%） A形——°言いやすい22%，°一般的18%，°本来の形17%，語感がよい13%（「本来の形」，「くずれた形」《A形・B形に》，「言いやすい」，「言にくい」の多く出たことが特徴的。）

○形容詞「ない」の語幹が「そう」に連なるときは「さ」がはいるが、助動詞「ない」の場合はいらないのが普通であるとも言われているが、ここでは、A・B両形にそれぞれ「本来の形」「くずれた形」が多く出たことが注目される。そのほか、「一般的」「言いやすい」も両形にそれぞれかなりの率で出、また、B形には「言いやすい」「言にくい」の相反する理由が共にかかなりの率で出ている。問題をはらんだ語である。

A 大きな・B 大きい 回答者 54

〔採る形〕 A形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——°一般的57%，°口頭語的・語感がよい各20%，°言いやすい17% B形——°一般的28%，°言いやすい17%，°口頭語的11%（「一般的」が著しく多く出たことが特徴的。）

○関東・関西の対立であると言われているが、この調査ではその反映らしいものが見られなかった。使う形においては回答者の40%以上が両形使用で、「語感・内容が違ふ」との意見の添えられたものもあった。このことは、「一般的」「口頭語的」「言いやすい」など種々の理由がA・B両形に等しく多く出たことを説明するものでもあろう。

A かなりの・B かなりな 回答者 57

〔採る形〕 A形が多数。 第1回調査でも同じ。

〔理由〕 A形——一般的61%，語感がよい39%，望ましい体系を作る14%，共通語的11% B形——（語感が悪い35%，特殊的33%）（「一般的」「語感がよ

い「語感が悪い」が著しく多く出たことが特徴的。) 回答者の類別で見ると東京・東部だけにB形を「一般的」とするものがある。また、東部だけにB形を「共通語的」とするものが出た。

○この語はA形からB形に移りつつあるなどと言われているが、この結果においては、全般的にはそれが認められるとは言えない。

Aぜんぜんすばらしい 回答者 58

〔採る形〕この用法を採るものはごく少数。

〔理由〕A形——(新奇すぎる60%, ある種の人だけが使う47%, 特殊的38%, 規範に合わない36%, 語感が悪い26%) (「新奇すぎる」「ある種の人だけが使う」「規範に合わない」「語感が悪い」がそれぞれ多く出たことが特徴的。特に「新奇すぎる」が10%以上出た語は全問題語中、二三に過ぎないが、この語にとりわけ高率に出たことが注目される。)

○この言い方は近年若い人たちの間に行われるようになったものと見られるがこれに対する意見は上のようにかなりはっきりと否定的にあらわれた。

A見られなかった・B見れなかった 回答者 192

〔採る形〕A形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——一般的50%, 伝統的・共通語的・規範に合う各33%, 望ましい体系を作る27%, 使用地域が広い15% B形——増加の傾向10% (地方語的35%, 特殊的32%, 規範に合わない30%, 望ましい体系を作らない26%) (「伝統的」「共通語的」「地方語的」「規範に合う」「規範に合わない」「望ましい体系を作る」「望ましい体系を作らない」がそれぞれ相当多く出たこと、「使用地域が広い」「使用地域が狭い」《B形に》、「新奇すぎる」がそれぞれやや多く出たことが特徴的。) 回答者の類別で見ると、A形を「望ましい体系を作る」とし、B形を「望ましい体系を作らない」とするものが全般的に多いが、特に西部にそれが多い。

○本来の東京語としてはA形で、B形は新しい形であるとか、地方語からの影響によるとか言われているが、上記の結果は、これを反映しているところが多

いと見られる。

A読まれます・B読めます 回答者 61

〔採る形〕B形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕B形——言いやすい57%，一般的44%，口頭語的38%，共通語的23%，語感がよい18%，本来の形15%，規範に合う12% A形——（言にくい44%，文章語的25%，語感が悪い20%）（「言いやすい」「言にくい」「文章語的」が特に多く出たことが特徴的。）

○これも「見られ・見れ」と同じく可能表現に関するものであるが、現在ではB形の方が多く使われると言われており、上の結果もこれと相通ずる。

A知らねばなりません 回答者 51

〔採る形〕A形とC形（「知らなければ」）とがほぼ同数。第1回調査では「知らなければ」（B形として対立させた）が絶対多数。

〔理由〕A形——°一般的29%，言いやすい23%，簡潔21%，°共通語的13%（文章語的32%）C形——°一般的・関東的各16%，口頭語的13%，°共通語的11%（「簡潔」，「関東的」，「関西的」《A形に》がやや多く出たことが特徴的。）

回答者の類別で見ると、A形を「一般的」とするものの多いのは西部>東部>東京の順。A形を「共通語的」「言いやすい」とするものが特に西部に多い。

「文章語的」とするものは東京・東部に多い。

○A形は「関西的」であるとか、「文章語的」であるとか一般に言われているもので、このことは上記の結果にもはっきり反映している。

A下さいませ・B下さいまし 回答者 187

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——一般的39%，本来の形34%，共通語的25%，°語感がよい20%，望ましい体系を作る18%，伝統的12% B形——°語感がよい12%，口頭語的11%（ある種の人だけが使う28%，特殊的25%，くずれた形23%）（「本来の形」，「くずれた形」，「ある種の人だけが使う」，「語感がよい」，「語感が悪い」《おもにB形に》がそれぞれかなり多く出たことが特徴的。） 回答者の類別

では、B形を「ある種の人だけが使う」とするものが女性に特に多い。下町にはそれが少ない。また、下町に限って、B形を「望ましい体系を作る」とするものが多い。

〔使う形〕全般にA形が多いが、特に女性にその率が高い。下町に限ってB形が多く、山手周辺もB形の率が比較的高い。

○A形は婦人語、古い言い方、上層階級のことばで、B形は男性語、本来の東京語であるなどと言われていることと符合する点が多い。

A います 回答者 59

〔採る形〕A形はごく少数で、「います」などのC形が絶対多数。第1回調査ではA形は0。

〔理由〕A形——（語感が悪い53%，ある種の人だけが使う46%，新奇すぎる34%，特殊的32%，望ましい体系を作らない25%，規範に合わない24%，地方的19%）（「新奇すぎる」「ある種の人だけが使う」「規範に合わない」が多く出たこと、また、「語感が悪い」が特に多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると、A形を「新奇すぎる」「望ましい体系を作らない」とするものが国語1・国語2・国語教育にとりわけ多い。

○A形は書生語である、軍隊用語である、漫談家が用いだした、卑俗であるなどと言われているもので、上記の結果は、このような見方と大方相通ずる。

A 守られるべきだ 回答者 172

〔採る形〕A形とC形（「守るべきだ」など）とがほぼ同数。第1回調査では「守るべきだ」（B形として対立させた）が絶対多数。

〔理由〕A形——一般的19%，論理的13%，*本来の日本語調11%（*翻訳調40%，語感が悪い19%）（「論理的」「本来の日本語調」「翻訳調」がそれぞれ多く出たことが特徴的。「本来の日本語調」は、A形のほかに「守るべきだ」などのC形に22%出た。）回答者の類別で見ると、A形を「一般的」とするものが年少層ほど多い。A形を「翻訳調」とするものは年長層ほど多い。

〔使う形〕年少層ほどA形の率が高い。また、国語1ではA形の率が著しく低

い。

○A形は西欧文の影響によるものとされているが、以上の結果には、そうした性質に関連するところが著しい。

A水が飲みたい・B水を飲みたい 回答者 181

〔採る形〕A形が多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕A形——一般的45%，本来の日本語調35%，伝統的24%，°増加の傾向・規範に合う各11% B形——論理的23%，°増加の傾向10%（翻訳調26%）（「増加の傾向」「伝統的」「本来の日本語調」「翻訳調」「論理的」がそれぞれ多く出たことが特徴的。） 回答者の類別で見ると、年少層ほどB形を「論理的」とするものが多い。また、B形を「特殊的」とするもの、A形を「望ましい体系を作る」とするものは、ともにあまり多くは出なかったが、その中では、国語1・国語2に著しく多い。

〔使う形〕全般にA形が多いが、A・B両形使用もかなりある。なお、年少層ほどB形の率が高い。

○B形は西欧文の影響によって多く用いられるようになったなどと言われていることと符合する点が多く、「守られるべきだ」の結果と似た点がある。

A英語が話せませす・B英語を話せませす 回答者 55

〔採る形〕A形が多数。第1回調査ではA形が絶対多数。

〔理由〕A形——一般的46%，本来の日本語調35%，共通語的18%，望ましい体系を作る13%，伝統的13%，増加の傾向・口頭語的・規範に合う各11% B形——論理的13%（翻訳調35%）（「本来の日本語調」「翻訳調」「増加の傾向」「伝統的」「論理的」がそれぞれ多く出たことが特徴的。） 回答者の類別で見ると、年少層ほどB形を「論理的」、A形を「非論理的」とするものが多い。

○問題語の性質として「水が・水を」と似たものであり、調査の結果も大体において似た傾向を示している。

Aお身体をお気をつけて・Bお身体にお気をつけて 回答者 58

〔採る形〕B形が絶対多数。第1回調査でも同じ。

〔理由〕 B形——「言いやすい」41%、語感がよい35%、一般的・本来の日本語調各29%、規範に合う24%、共通語的21% A形——（「言いにくい」43%、語感が悪い36%、規範に合わない24%、翻訳調19%）（「本来の日本語調」「翻訳調」「規範に合わない」が多く出たこと、「言いやすい」「言いにくい」「語感がよい」「語感が悪い」がそれぞれ特に多く出たことが特徴的。）

○これは、本来はB形で、近年A形も行われるようになってきたと言われるもので、このことと相通ずる結果と見られる。

A雨が降っている日・B雨の降っている日 回答者 55

〔採る形〕 A形・B形がほぼ同数。 第1回調査ではB形が多数。

〔理由〕 A形——[○]一般的46%、口頭語的31%、口語的16% B形——[○]一般的26%、語感がよい20%、望ましい体系を作る13%、規範に合う11%（文章語的26%）（「一般的」「文章語的」の特に多く出たことが特徴的。） 回答者の類別で見ると、国語教育にとりわけ、B形を「規範に合う」とするもの、B形を「望ましい体系を作る」とし、A形を「望ましい体系を作らない」とするものが多い。

〔使う形〕 全般にA形・B形ほぼ同数であるが、国語2・国語教育にはB形が多い。また、両形使用が40%以上あった。

○「語感や意味が違う」「場合によって使い分ける」などの付記のあった回答のあったこと、両形使用の多かったことは、「一般的」という理由が両形にそれぞれかなり多く出たことなどと関連するかと思われる。

A雪が朝日にきらきらと輝いている景色・B雪の……景色 回答者 58

〔採る形〕 A形が多数。

〔理由〕 A形——一般的50%、口頭語的45%、意味を区別する16%、[○]規範に合う12%、共通語的・語感がよい各10% B形——[○]語感がよい12%、[○]規範に合う10%（文章語的43%）（「意味を区別する」「文章語的」の多く出たことが特徴的。）

○「雨が・雨の」と同じく連体修飾句における主格指示の問題であるが、句の

長さ及び句中の成分のつながり方の異なることが条件の相違としてきて、この調査の結果の上にも相違を示していると考えられる。「意味を区別する」というのも、A形の方が主格指示が明確であるということであろう。

A行くしか方法がない 回答者 60

〔採る形〕A形とC形（「行くほか」など）とがほぼ同数。第1回調査では、「行くほか」（B形として対立させた）が多数。

〔理由〕A形——一般的29%，簡潔12%，増加の傾向10%（語感が悪い37%）（「語感が悪い」が著しく多く出たことが特徴的。）

○A形は東京語の話し言葉にはあまり行われなと言われてしているものである。

Aおっしゃっていました 回答者 168

〔採る形〕A形が多数。第1回調査では「言っていっしゃいました」をB形として対立させたが、やはりA形が多数。

〔理由〕A形——一般的32%，共通語的24%，言いやすい14%，増加の傾向11%，伝統的・語感がよい・規範に合う・望ましい体系を作る各10%（「増加の傾向」の多いことが他に比べてやや目立つ。）回答者の類別で見ると、東部・西部にはA形を「規範に合う」「望ましい体系を作る」とするものが多く、東京・九州にはA形を「規範に合わない」「望ましい体系を作らない」とするものが多い。

○敬意を表わす要素をあとに付けるのが本来であり、A形は新しい言い方であるとされるが、この言い方はかなり一般化しつつあると見られる。「増加の傾向」などの多いことは、こうした傾向を反映したものと見えよう。また、A形を採るとする回答者の中に、「敬語体系を簡単にしたい」という意見を添えたものもあった。

A御研究されました 回答者 52

〔採る形〕A形は少数で、C形（「御研究になりました」その他）が多数。第1回調査（「御研究になりました」をB形として対立させた）でも同様。

〔理由〕A形——（望ましい体系を作らない44%，語感が悪い42%，規範に合わ

ない25%，特殊的19%）（「望ましい体系を作らない」「語感が悪い」「規範に合わない」がそれぞれ特に多く出たこと，また「本来の形」《C形に》，「くずれた形」《A形に》のやや多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると，特に国語2・国語教育・新聞放送等にはA形を「望ましい体系を作らない」とするものが多く，また，国語2・言語・文芸芸能・各界にはA形を「語感が悪い」とするものが多い。

○このA形も近年若い人の間に用いられるようになったなどと言われるもので，上記の結果はこのような事情と相通ずるところがある。

Aお紅茶 回答者 57

〔採る形〕A形は少数でC形（「紅茶」）が多数。第1回調査では「紅茶」（B形として対立させた）が絶対多数。

〔理由〕A形——一般的・*ていねい各14%，増加の傾向11%（*ていねいすぎる47%，ある種の人だけが使う23%）（「ていねい」「ていねいすぎる」「ある種の人だけが使う」がそれぞれ多く出たことが特徴的。）回答者の類別で見ると，年少層にはA形を「一般的」とするもの，「増加の傾向」とするものが多い。

○東京のある層の婦人の用語と言われ，また，「お」の乱用という意味で問題にされている現象に属するもので，上記の結果は，こうした事情をはっきり反映している。

一つの反省

以上一語一語について整理してみたが，一つの傾向として気づいたことは，（a）採る理由として同一の理由がA・B両形ともに多く出たもの（°で示した）のかなりあったこと，また，（b）同一語形に対して，同一の観点において相反する，採る理由・採らない理由（たとえば「一般的・特殊的」）がともに多く出たもの（*で示した）のかなりあったことである。しかも，（a）（b）ともに，アクセントに関する問題語に著しく多かった。すなわち，

アクセント（30語中）	（a）——26語	（b）——26語
音声・語法（60語中）	（a）——34語	（b）——7語

2種以上の理由が両形に出たもの

アクセント 16語 音声・語法 13語

2対以上の相反する理由が同一語形に出たもの

アクセント 10語 音声・語法 0

同一理由が両形にともに多く出るといふことは、同一語形に対して相反する理由がともに多く出るといふことは、いずれも、回答者の判断が二つに割れて、一方にきまらないことを示すものである。これがアクセントに関する問題語に著しく多かったといふことは、注目すべきである。内容について見ると、アクセントの問題語においては、「一般的」「語感がよい」が両形の同一理由としてきわめて多く、また、「一般的・特殊的」「語感がよい・語感が悪い」が同一形の相反理由としてきわめて多く出ている。これは、ごく大まかに言って、アクセントにおける「一般的」といふことが客観性に乏しいものであり、またアクセントに対する語感が人によってまちまちなものであることを示していると言えよう。このことは、アクセントが日本語においては言語の要素としてそれほど有力なものでなく、じゅうぶん定着してもいず、また、したがって人々の意識の上における把握も必ずしも確実でないという事実を反映しているものとも考えられる。既述のように、アクセントの問題語については回答困難であるといふことが、直接、間接に表明されていたが、上記と照らし合わせてみてアクセントについてはこの調査を行うことが必ずしも適当でなかったのではなかが反省させられる。

(付) 採るべき(望ましい)形と使う形との一致率

採るべき形(第1回調査では「望ましい形」とした)と考えるものと実際に使用する形とはどの程度に一致するか、どの程度にちがうか。個人ごとに見れば、問題語全部について一致しているものもあれば、多くの問題語についてちがっているものもあるが、一つの参考資料として統計的に算出してみた。取扱った対象は第1回調査の回答全部と、第2回調査の全員共通の問題語30語につ

いての回答である。

採るべき（望ましい）形と使用形との合致したものを1点，半ば合致したものの（たとえば，採るべき形が「ニッポン」および「ニホン」で使う形が「ニホン」，採るべき形が「ニッポン」で使う形が「ニッポン」および「ニホン」のような場合）を0.5点，全然別であるものを0点として集計し，問題語数に対する比率を見た。

結果は次のとおりである。

	第1回調査	第2回調査
アクセント	83%	86%
音 声	86%	86%
語 法	89%	91%
全 体	86%	87%

第1回調査・第2回調査ともほぼ似た数値を示し，また，語法において最も数値の高いことも一致している。

なお，アクセントについては，年齢別では，

第1回調査	～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳～
	70%	90%	93%	91%
第2回調査	～30歳	31～50歳	51～70歳	71歳～
	82%	83%	91%	92%

のように，大抵，年長層ほど一致率が高い。また，アクセントは地域別では，第2回調査について見ると，

山手周辺	下町	東部	西部	九州	他
91%	90%	86%	85%	71%	77%

である。第1回調査においても，東京が最も一致率が高かった。

語別に，一致率90%以上のものと，79%以下のものとをわかげると，次のとおりである。

90%以上のもの——キューメイ，ザ，シロイ，マージャン，ラジオ，ウタウ・ウトー，

カシ・クッシ、イリクチ・イリグチ、センセイ・センセー、センタク・センダク、
 訳す・訳する、おからだを・おからだに、なさいました・なされました、います、
 ぜんぜん

79%以下のもの——アカトンボ、カミナリ、ボク、イガイ、イネムリ、ツユ、ハハ、
 ニッポン・ニホン、イイ・ヨイ、タトイ・タトエ、ホッソク・ハッソク、下さいま
 せ・下さいまし、水が・水を、行かせた・行かした、大きな・大きい、かなりな・
 かなりの、知らねば

E. 残された課題

語形確定のための基礎調査として、われわれは、(1)ゆれている語を収集すること、(2)標準的な語形を考えるための判断の基準を求めること、(3)ゆれている語についての意見・説明等を整理すること等の作業を行なってきた。語形確定のための基礎調査としては、もちろんさらにいろいろな仕事が考えられる。

われわれの行なった作業のうち、ゆれている語の収集は、文献に記録されたものを広く集めたものであるが、収集のためには、文献から拾うだけでなく、さらに調査の幅を広げて収集を徹底的に行う仕事がある。次に、ゆれの現象の整理については、われわれがある程度試みた語形構造にもとづいての整理のほか、社会的な行われ方を調査分析する仕事がある。これには、社会心理学的な実験・観察の方法を加えてみることも考えられる。また、歴史的変遷の上で個々の語あるいは同類の現象としてのゆれが、どのような状況を示しているかを調べてみる仕事も考えられる。以上のような調査と整理の結果、個々ないし同類の現象としてのゆれについて、勢力関係をとらえたり、推移に関する見通しを得たりすることがあろう。さらに、このような語形構造、社会的な行われ方、歴史的変遷等の角度からの分析整理によって、ゆれの生ずる要因・条件やゆれの現象の上の法則などが明らかにされることが期待されるのである。

以上のような大きな課題の残されている問題ではあるが、われわれは、本年度の作業をもってこの仕事に一応終止符を打つことにする。 (大石)

総合雑誌の用語の調査

A. 総 説

今年度は、前年度に着手した「総合雑誌の語彙調査」を継続して、その集計整理および分析を行った。この調査は、次年度において完結する見込みである。

この調査は、総合雑誌およびそれに近い内容を持つ雑誌13種の、昭和28年7月号から昭和29年6月号までを対象とし、標本調査法によるものである。その目的、計画、ならびに前年度における実施概要、その中間結果の一部等については、すでに29年度の年報に報告してあるので、ここには繰り返さない。

B. 調査の担当者

書きことば研究室に属する次の5人の所員が、前年度に引き続いて共同でこの調査にあたった。

林 大 永野 賢 斎賀秀夫 水谷静夫 石綿敏雄

なお、臨時筆生5人が所員を助けた。

C. 実 施 経 過

(1) 集計整理

調査の対象は、雑誌A群と雑誌B群に大別されるが、標本の大きさは、全体で約二十四万語、各群十二万語と見積られる。その標本を雑誌の性質ならびに整理の便宜の上から56（各群28）の集落に分け、29年度においては、第一次の整理作業として、そのうちA群の14の集落について集計整理を完了し、またその結果の一部について分析を行った。この第一次の14集落は、28集落を無作為に振り分けた半数の部分であって、延べ六万語から成っている。

30年度においては、第二次の整理作業として、B群の14集落について集計・整理を行った。この部分もやはり延べ六万語から成っている。

従って、今年度までに、標本全体の56集落のうちA B両群からそれぞれ半数の28集落、延べ語数にして二十四万語のうちの十二万語の整理が完了したわけである。

B 群		A 群	
百九十万語	改造人物読本	次年度整理	今年度整理六万語
二百六十万語	平和ニエー・エイジ	← 標本の大きさ二十四万語 →	昨年度整理六万語
	学園評論 国民		次年度整理
	心及日本手帖		四百五十万語
	日本人生		改造 解放 世界 世潮 中央公論

母集団の大きさ九百万語

(2) 分 析

上述の整理の作業と並行して、次のような項目のそれぞれについて分析を始めた。

- 語彙構造に対する計量的分析（語の使用率の分布函数、語彙の総量など）
- 語彙の質についての分析（語の意味分野、語の構造など）
- 語の表記についての分析

これらの分析は、いずれも次年度において完了する見込みである。

(3) そ の 他

整理作業を進める際に、語形が同じまたは似ている場合、同じ語と認めるか異なる語と認めるかの識別が問題である。これをなるべく客観的に行うための一つの操作的方法として、線型判別函数法の利用を考えた。試作した函数は実用に供しうる程度の判別力をもつので、整理作業で実際に使っている。

また、語彙調査の作業過程で生ずる狂いについて数量的分析を行った。結果は別項で述べる。

D. 次年度の見通し

31年度は、まず「総合雑誌の用語の調査」を完了し、引き続いて「雑誌一般の用語の概観調査」（三年計画）に着手する予定である。（林^六）

語彙調査の作業過程で生ずる狂いの数量的分析

1 前書き

語彙調査で生ずる狂いについて、われわれは先に（国立国語研究所年報5で）一往の定性的分析を試みたが、ここにその狂いの程度を数量的に追って見よう。データには、われわれが昭和29、30年度に行った総合雑誌の調査の中間集計までの記録を使った。この調査の作業手順は年報5に述べたものとはほぼ同じである。作業の一まとまりをなす各段階の終りには必ず検査を通し、かつ作業記録・検査記録を取った。その後の作業段階で見つけた検査漏れ等についても、別に記録した。これらの記録がこの分析のデータである。

何らかの調査または総索引作成のためにカードを採ったことのある人には、ひとしく次のような経験があろう：十分注意してカードを操作し保管したはずなのに、作業後に確かめると、枚数が当然あるべき数と幾分かどこかで食い違っている。もしカード枚数が割合少ない場合には、検査によってその狂いを零にすることも出来よう。しかし多数のカードを扱う場合には、検査した結果の方が検査前より確実に正しいという保証はない。すなわち検査によって狂いが零になるとは、必ずしも期待出来ない。検査という作業段階を一つ増したために、かえって検査前より狂いが大きくなることさえある。こう考えると、調査結果にどの程度の誤差が残るかを評価して置く必要がある。従来の語彙調査では、延べ二百万とか五百万とかその量の多きにたよる傾きがなかったとは言えない。だがどんなに大量を調べても、作業精度が悪ければ結果の数値はさして信頼に値しない。われわれはいたずらに大量の調査を目ざしはしなかった。その代り出来るだけ作業の精度を高く保つことに心掛けた。検査も、重要な段階

では一回にとどめなかった。こういう努力を重ねてもなお、次の程度の狂いが残っていると見積られる。延べ1000語当りの標準誤差が^(注)

延べ語数（具体的な形では採集カード枚数）について 1.2 語程度

異なり語数（具体的な形では整理票枚数）について 2.0 語程度

以下の分析で述べる狂いの量は、もちろんそれがそのまま調査結果にまで持ち込まれはしない。検査その他の措置によって訂正されたものの量である。従って単に作業記録とその検査記録とを突き比べただけでは、狂いの量は評価されない。この（近似的な）評価が出来るような計画を、（詳細は省くが）われわれは作業手順の要所要所に織り込んだ。またわれわれの調査は標本調査であるから、ここに扱う観測関係の誤差のほかに抽出誤差があることを言い添えて置く。

2 語数の観測誤差

延べ語数、従って採集カードの総枚数を押さえることが、精度を高めるためにまず必要である。ここでの狂いに大別すると次の二つになる。一つは調査単位語の分割のしかたに起因するもの、他は分割の指定通り一単位語を一枚のカードに採る作業自体の狂いである。後者の狂いは割合に訂正しやすい。しかし前者については国語研究における認識の基礎に関する重大な問題を含む。ある文章が何語から成るかは（たとい原文が分ち書きになっていても）自明ではない。われわれが調査単位語を定義し、それによって原文を句切するという操作を施して、初めて知り得るにとどまる。従って延べ語数は単位語の定義のしかたと相対的な関係に立つ。われわれはそういう単位語として「 β 単位」と名づけるものを定義した。次に、定義が完全なら問題はないが、幾分でも不明確な点があると、（不明確な点を全く除き去ることは事実上出来ないから）その適用のしかたが場合によって揺れ、統一を欠くような分割指定が行われることにな

注 評する人、あるいはかなり狂いがあると言ふかも知れない。しかしたとえば普通の機械製作に許されている寸法の公差が百分の一ぐらい、精密機械で千分の一である事を考えれば、上述の誤差もあながち大きいとは限らない。かつ測定には誤差がつきものだから、その根絶を期するのは実際的でない。小さな偶然誤差の範囲に迫り込む努力の方が重要だという事を、国語研究でも早く常識としたいものである。

る。仮に十分明確な定義が用意されても、適用上の間違いは依然としてある程度起ろう。更に原文が誤植かと疑われる箇所、語の句切り方が揺れる場合もないではない。こう考えると實際上、ある文章が何語から成るかを絶対的に確定することはほとんど出来ない。われわれの得る観測値は、程度の差があるにはせよ、誤差をもった近似値なのである。

さて今度の調査で延べ語数つまり β 単位数の観測には、どのくらいの狂いがあり、集計後になお残った誤差の程度はどのくらいと見積られるか。われわれは従来の経験から、観測精度を高めるために次の方法を採用した：まず作業単位ごとにその仕切りから採集されるはずのカード数を、初めに入れた分割指定に従って勘定する。その仕切りの採集が済んで初めての検査の時、実際の枚数とあらかじめ勘定して置いた延べ語数と合うかを確かめ、食い違いが出れば両者の数値が合うまで狂いの原因を捜して修正する。更にそれ以後の作業中に生じたどんな枚数変更も記録し、予定枚数を修正して行く。整理作業に移る直前に、もう一度この修正予定枚数と実際に保管されている採集枚数とを合わせる。こうして一往の集計を終えた時に、そこから計上される延べ語数と順次修正を加

第1表 カード枚数の狂い

区 分	総数または 変更数	変更数の内訳	
		増	減
中間集計後の延べ語数	116233	—	—
着手前の予定枚数	116134	—	—
予定枚数の勘定違い	11	39	28
“ “ 原簿への誤写	7	7	0
採集枚数の狂いに対する 検査漏れ	1	1	0
分割指定の誤り	42	127	85
“ “ 脱	46	46	—
“ “ 行	—26	—	26
不統一な分割の調整	20	21	1
原因未詳の誤差	—2	26	28

えて来た予定枚数とを引合わせ、両者間に差があればこれが小さくなる（出来れば零になる）ように再び点検する。以上の操作を経て得られた値を延べ語数と認めるのである。この間の記録によって各種の狂いの程度を示せば、第1表の通りであった。なお、まだ整理

を終えていない標本の残り半数の部分では、この表にあげた狂いの類型のほかに、採集カード印刷の際の脱文による枚数変更2枚があった。

この調査には雑誌本文十ページ分を抽出単位とする集落抽出法を用いた。中間集計は28個の集落についてなされ、その一集落は平均約四千二百の β 単位を含む。そこで集落を単位として「原因未詳の誤差」の分布を調べると

変更数	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	計
集落数	3	2	4	2	5	4	4	2	2	28

従って原因未詳誤差の集落当り平均は -0.071β 、その不偏分散平方根は 2.377β であった。この事からして延べ語数1000当りの誤差の平均は0、その標準偏差は1.2程度と見積られる。

次に異なり語数の観測誤差を考える。この場合も延べ語数について述べたと同じ大別二種の、性質の違う狂いが存する。一つは、任意の二つの単位語を同じ語だまたは異なる語だと見分ける規準の決め方、およびその適用法に起因する誤差である。^{注)} また原文に誤植があった場合の影響は、延べ語数の場合より大きい。狂いの他の一方は整理作業の段階で、不注意または誤認によって正当な整理票が作られないという狂いである。

ところで結果にまで残る観測誤差の評価は、事前に異なる語の予定数が勘定出来ないなど二三の困難な問題があって、延べ語数の場合のようにうまく行かない。今は便宜上、各集落ごとに、整理作業の結果に対してその検査以後の段階で修正された整理票の変更枚数をもって評価しよう。この変更数の分布は

変更数	-10	-6	-4	-3	-2	-1	0	1	2	3	13	計
集落数	1	1	4	1	3	6	3	4	3	1	1	28

変更数の大きな13、-10、-6が他に比べてどうしてこう大きくなったかの原

注 この操作では同音異義語と認めるか否かの判定が、一番むずかしい。それについては(われわれのうちの一人が昭和30年11月の国語学会研究発表会で述べた)線型判別函数法によって処理した。この方法の説明は総合雑誌用語調査の報告書に述べられるであろう。

因は、ほぼ突き止められている。従って結果に残る誤差はこのデータよりも小さくならうが、今は上のデータを使って計算すると、集落当り平均が -0.750 語、その不偏分散平方根が 4.001 語であった。この事からして延べ語数 1000 語当りの異なり語数の観測誤差の平均は 0 、その標準偏差は 2.0 程度と見積られる。

3. 採集単位の指定の狂い

調査対象の原文を調査単位である β 単位に句切って指定する作業は、五名の所員が分担した。一人が指定を入れた後に他の一人がもう一度目を通した。この作業は日程の上で急がなければならなかった事と、 β 単位の定義が細部までは十分でなく主観による揺れが生じやすい部分もあった事とで、同一文を所員二名が目を通したにもかかわらず、採集以後の段階で直さなければならないものが散見した。そのためのカード枚数の変更は、第1表に掲げた通りである。

この種の狂いの生ずる原因は様々であるが、結果として現われた形によって類型化すれば、

誤 定義通りに句切られなかったもの。

例：「支持され」は「支持」「され」をそれぞれ 1β とすることにしたのに、一つになっている。

脱 調査対象になるべき語の指定漏れ。

例：「数名ある」の「ある」は採用すべきなのに、指定されていない。

衍 調査対象から除かれるべき語の余分な指定。

例：「…であって」の「あっ」は対象外なのに、指定されている。

不齊 β 単位の細部の規定が不十分だったため、他の句切り方と統一を欠くもの。

以上四つである。この狂いの集落当りの程度は第2表の通りであった。また、28集落について狂いの箇所の数、整理票変更枚数の分布は、第3・1表と第3・2表との通りであった。

第2表 指定の狂いの程度

10.93±4.34は、集落当り平均が10.93、標準偏差が4.34の意。他も同じ。

区 分	狂いの箇所の数	狂いを直した カード変更数
下記四つの全部	10.93±4.34	2.93±3.67
誤	7.57±5.93	1.50±1.72
脱	1.64±1.14	1.64±1.14
衍	0.93±1.00	-0.93±1.00
不齊	0.79±0.94	0.71±0.99

第3・1表 狂いの数の分布

箇所数	全部	誤	脱	衍	不齊
0			5	13	14
1~3		4	22	15	14
4~6	4	9	1		
7~9	7	8			
10~12	8	4			
13~15	5	2			
16~18	2	1			
22~24	1				

第3・2表 変更票数の分布

枚 数	全部	誤	脱	衍	不齊
-3	1	1		2	
-2~-1	1	8		13	1
0	6	2	5	13	14
1~2	7	9	15		11
3~4	6	4	8		2
5~6	4	3			
7~8	1				
10以上	2	1			

4. 採集作業の狂い

カード採集には大量生産における品質管理の技法を入れて、大体望ましい作業精度をあげ得た。調査結果にゆがみを与えるような狂いは、二度の検査を通して整理着手前にほとんど除き去られたと見られる。採集は所外のアルバイトが、その検査は所内の筆生が行った。所外アルバイトの数は前後二十名であって、カードの出来には相当の個人差がある。そこで採集済のカードを受け取るとすぐ検査し、管理図その他の方法で狂いの個癖を早く見つけて、以後の作業精度を高めることに努めた。この効果は著しい。採集カードの不良率は2.05パーセントで、その約八割が第一回の検査で発見され、残り約二割が再度の検査で発見され、訂正を受けた。二回の検査に漏れてその後の段階で見つけられた不良カードは二枚にとどまった。

採集カード全体を、便宜上 941 のロット（仕切り）に分けて、その一ロットごとに検査をした。（一つのロットのカードは同一採集者が採ったものから成る。）この検査結果によって採集の狂いを示せば、第4表の通りであった。なお

第4表 採集の狂い

仕切り	採集枚数	不良枚数	不良率	初検漏れ	漏れ率
	枚	枚	%	枚	%
1~13	1920	23	1.20	6	26.09
14~63	9845	452	4.59	57	12.61
64~113	12822	481	3.75	90	18.71
114~163	13378	489	3.65	77	15.75
164~213	12211	458	3.75	75	16.38
214~263	11537	216	1.87	48	22.22
264~313	13995	369	2.64	58	15.72
314~363	12580	261	2.07	72	27.59
364~413	13505	240	1.78	54	22.50
414~463	13803	200	1.45	28	14.00
464~513	12559	178	1.42	39	21.91
514~563	11438	196	1.71	35	17.86
564~613	12007	181	1.51	30	16.57
614~663	11570	160	1.38	27	16.88
664~713	11338	173	1.53	16	9.25
714~763	11637	168	1.44	32	19.06
764~813	11858	151	1.27	41	27.15
814~863	12294	149	1.21	66	57.72
864~913	12190	121	0.99	42	34.71
914~941	7682	60	0.78	25	41.67
全体	230169	4726	2.05	938	19.85

ロット1~13は、練習のために所内の筆生が採集した分である。これを除いて第14ロット以降の50ロットずつの不良率（ただし914番以後は28ロット）を見ると、次第に不良率が減って行く傾きが認められる。そこで trend を検定すると、^(註) 高0.1パーセントの危険率で、減る傾きがあると言える。これは作業者の慣れと作業管理の成功とを物語るものである。また最初13ロットの不良率は所外の採集の末期ごろの正確さに匹敵する。従って検査者となる筆生が採集法を誤解してい

るため検査の効果をそぐということは、なかったものと思う。

これに対して検査の方の成績は、採集ほどの向上は見られない。ロット番号八百の代からかえって初検漏れの率が増しているが、これは従来の作業に慣れている筆生を採集の再検と次の段階である整理とに回し、初検には新たに一名を採用したからである。初検漏れの不良カード数には大した増加はないが採集

注 方法は、たとえば次の文部参照。永野・林・松下・青山：統計数値表の使い方（昭29）、135ページ以下。

の不良枚数が減って来たため、最後のあたりで漏れ率が増えた。しかし漏れ率の最も大きいロット814～863でも、採集枚数に対する初検漏れ不良カード枚数は0.7パーセント程度であって、それも再検査で訂正された。

次にどんな種類の狂いがどの程度あり、かつそれが初検でどれくらい見のがされたか。941個のロット全体から200個をランダムに抜いて調べた結果、

第5表 類型別に見た狂い、初検漏れ

類	型	狂い 個数	構成 比	初検 漏れ	構成 比	漏れ 率%
カード全般	脱 行 汚損	15	0.015	2	0.011	13.33
		3	.003	0	0	0
		1	.001	0	0	0
主見出し	全部脱	3	.003	0	0	0
	一部脱	20	.020	5	0.027	25.00
	一部行	28	.028	2	.011	7.14
	誤漢字 その他	158	.161	37	.201	23.42
副見出し	脱 行 不 適 当	26	.026	6	0.033	23.08
		8	.008	0	0	0
		33	.034	10	0.054	30.30
本文かこみ	脱 行 不 適 当	79	.080	11	0.060	13.92
		3	.003	0	0	0
		43	.044	7	0.038	16.28
位置コード	脱 不 適 当	27	.027	8	.044	29.63
		331	.336	69	.375	20.85
固有名詞 コード	脱 行 不 適 当	71	.072	10	.054	14.08
		5	.005	3	.016	60.00
		96	0.098	4	0.022	4.17
全	体	984	1.000	184	1.000	18.70

第5表の通りであっ

た。(注)

表の「漏れ率」は、

一回目の検査で発見

出来なかった狂いの

割合、すなわち「初

検漏れ(個数)÷

「狂い個数」;「主見

出し」は採集カード

に調査すべき語を書

いたもの、「副見出

し」はそれに添わっ

ている助詞・助動詞

を書いたもの、「本

文かこみ」はリブリ

ントされた本文中で主見出しとした語につけたしるし、「位置コード」はその主見出しが文節中で占めている位置のコードである。この結果からすると、位置コード関係に狂いも初検漏れも多い。その原因は、コーディングの指示が不適當だった事である。仮にこの指示が適切であったとすれば、採集カードの不良率が相当引き下げられたと思う。

注 『これは抽出して得た標本値だから、941ロット全体を調べた場合と小差であろう。たとえば第4表右下すみの「漏れ率」よりこの表の同様な「漏れ率」が幾分か大きくなるはずだが、そうなっていない。』

しかし全般的に言えば、採集段階での精度は良好であった。今後の問題は、どうやってこれより高い精度に達するかではなくて、この程度の精度を保ちながら更に作業時間を短縮するにはどうしたらよいかである。ことに検査を一度だけ通すのでは済まないか否かを検討する必要がある。

5. 整理作業の狂い

採集作業は前述の通り良く管理された。これに対して整理は、作業自体もずっと複雑だから、管理もまた相当むづかしい。われわれが以前に行った調査で

第6表 整理の狂い

集落番号	個数	初検漏れ	漏れ率 %	変更票数	補う	除く
01	50	2	4.0	13	14	1
02	30	2	6.7	1	4	3
03	18	3	16.7	0	1	1
04	27	3	11.1	-4	0	4
05	30	2	6.7	-4	4	8
06	34	4	11.8	-1	1	0
07	30	3	10.0	-1	0	1
08	30	2	6.7	3	3	0
09	27	4	14.8	1	3	2
10	18	1	5.6	-2	0	2
11	28	7	25.0	1	1	0
12	23	2	8.7	-1	0	1
13	17	5	29.4	0	1	1
14	27	7	25.9	-1	1	2
51	55	11	30.0	-6	1	7
52	36	2	5.6	-10	1	11
53	46	6	13.0	-4	1	5
54	34	10	29.4	-3	0	3
55	37	6	16.2	2	3	1
56	22	3	13.6	-2	1	3
57	33	11	33.3	2	3	1
58	28	3	10.7	-1	1	2
81	33	6	18.2	-1	0	1
82	46	13	28.3	-1	2	3
83	36	4	11.1	2	3	1
84	20	6	30.0	-2	1	3
85	37	8	21.6	0	3	3
86	41	11	26.8	-4	0	4
I	389	47	12.1	7	33	26
II	291	52	17.9	-22	11	33
III	212	48	22.6	-6	9	15
全体	892	147	16.5	-21	53	74

も、整理作業の精度に関する分析は十分とは言えなかった。そこで以下にやや詳しい考察をする。

整理およびその二回にわたる検査は所内の筆生が行い、作業上の処理に迷う場合には必ず所員の指示を求めて決することにした。その狂いの程度は第6表の通りであった。表頭の「個数」は中間集計終了までに発見された整理作業の狂いの数、「初検漏れ」は一回目の検査で発見出来なかった狂いの数、「漏れ率」は「初検漏れ」÷「個数」、「変更票数」は狂いの訂正によって増減があった整理票枚数、「補う」「除く」はそのうち補ったまたは除いた票数である。なお、表の下端の第I、II、III層は、それぞれ集落01~14, 51~58, 81~86から成る層である。

整理作業は、第6表に示した集落の番号順に、集落を単位に進めて行った。つまり01番集落の採集カードを整理して整理票を作り、02番集落では新出の語だけ新たに整理票を加え、既出の語は作ってある整理票に度数を書き込むという進め方である。^{注)} さて第6表の「個数」の欄を見ると、(i) 01番と51番とで狂いの多い事が目立つ。その理由は、01は作業に取掛かった初めだから、また51からは従来の筆生のほかに新しい筆生が一名加わったからだと考えられる。そこで作業の慣れによって狂いの個数が減ると言えるかを検定すると、第I層は高々1パーセントの危険率で減る傾きがあると認められる。他の層では有意水準を5パーセントに取っても、減る傾きがあるとは言いつれない。(ii) 層ごとに狂いの個数の集落当り平均を調べると、第I層から順に27.8, 36.4, 35.5であった。作業が時間的に後になれば、扱うべき整理票の数が増す。そこで、このために操作の間違ひも増すことが予想される。iで第II, III層に有意差が認められなかったのは、あるいはこの事の影響かも知れない。ただし層ごとの平均狂い個数には、検定の結果、差があるとまでは言えない。iとiiとを合わせ考えれば、慣れによる狂いの減少と整理票の増加による狂いの増大とが相殺したのかも知れない。しかし以上のデータだけでは、はっきりした事は言えない。初検での検査漏れについては後に述べる。

次に狂いの個数および初検漏れを類型化して、第7表に掲げよう。これで見ると特に多い狂いの類型は、整理票の見出し形の立て方の誤り、表記形式の注記の忘れ、整理票の排列順の誤り、度数(採集カード枚数)を実際より少なく数える勘定違いなどである。なお採集カードの見出しの読み誤り、同音異義語の分類違いもかなり多く、まだ発見されないものも残っているかも知れない。排列順の誤りは、それ自体は調査結果の狂いとはならないが、これが誘発する狂いと、一回の検査ではなかなか直らないこと(漏れ率34パーセント強)とを考えると、重視すべき狂いである。一回だけの検査では見のがされやすい他の狂いは、同音異義語の分類である。当然予想される通り、分類違いは概して直り

注 従来の経験からして、作業精度を高めるにはこの整理法がよいと言える。

第7表 類型別に見た狂いの数, 初検漏れ

類	型	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		全 体		
		個数	漏れ	個数	漏れ	個数	漏れ	個数	漏れ	漏れ率 %
票全般	単純な脱	17	0	2	0	2	0	21	0	0.0
	単純な行	16	1	14	3	9	2	39	6	15.4
	排列順の誤り	47	14	26	12	12	3	85	29	34.1
カード分類	見出し抽象法の誤り	54	7	63	12	31	8	148	27	18.2
	誤読による誤り	31	1	14	4	17	4	62	9	14.5
	同音異義による誤り	20	6	6	4	18	9	44	19	43.2
	その他の誤り	16	2	27	6	18	7	61	15	24.6
表記形式の注	脱	46	3	64	4	35	7	145	14	9.7
	漢字の誤り	22	1	13	1	10	0	45	2	4.4
	仮名づかいの誤り	5	0	1	0	3	0	9	0	0.0
	送り仮名の誤り	4	0	1	0	0	0	5	0	0.0
	その他の誤り	18	1	9	0	9	1	36	2	5.6
度数	書き込むますの誤り	11	1	1	0	4	0	16	1	6.3
	度数0の記号の忘れ	8	0	2	0	3	0	13	0	0.0
	度数の書き忘れ	21	1	13	2	13	1	47	4	8.5
	度数過少	39	6	19	3	16	4	74	13	17.6
	度数過多	14	4	16	1	12	1	42	6	14.3

にくい。この狂いを小さくするには、更に強力な手を打つべきである。これに比べると度数の狂いははるかに直しやすい。さて漏れ率を全体として考えて、操作すべき整理票の数が増すと検査漏れも増すであろうか。第7表下端の数値によって検定すると、第Ⅰ層と第Ⅱ層との間に(有意水準5パーセントで)、また第Ⅰ層と第Ⅲ層との間に(同じく1パーセントで)差が認められる。従って整理票の増加ということも検査漏れを増す一因かと思う。

なお筆生個人別の作業精度を示せば

筆生	整 理 の 狂 い			検査精度
	集落平均	標準偏差	変異係数	初検漏れ率
ア	4.43	3.22	0.73	10.1%
イ	6.50	3.84	0.59	20.9%

ウ	8.76	6.83	0.78	12.5%
エ	11.94	8.58	0.72	34.7%

である。有意水準を5パーセントに採ると、整理ではアとウ、アとエの間にしか差が認められなかったが、検査の方はアとウとの間を除いて他のどの二人の間にも差が認められた。かつ上の表から分った事は次の二つである。第一に、整理の狂いの平均が小さい者は標準偏差も小さい(つまり仕事にむらが少ない)が、変異係数はほぼ一定らしい。第二に同一個人が整理と検査とで示す能力は必ずしも同様でない。これらの知識は今後の作業管理に参考となる。

6. 結 び

このたびの分析によって、われわれの作業精度が数量的に押さえられた。この精度は、語彙調査に数年の経験をもつ所員と三年前後の経験をもつ筆生とのスタッフについて得られたものであって、もし初めて調査を試みるような場合にはこれより悪いだろうと思われる。われわれが達した程度の精度は言語研究の現在の水準に照らせば一往満足出来るが、なお向上の余地がない訳ではない。

採集作業については十分な精度をあげた。全く経験のないアルバイトを使っても、この水準までもって来る事は割合たやすかるう。ただ問題は、調査時間の短縮のために二度目の検査を省いて、しかも今回に近い精度をどうやってあげるかである。整理事業はなお改良すべき点が多い。作業法の改良と共に作業者の訓練にも意を用いなければならない。ただし所員が行った調査単位の分割を一層しっかりさせる事に、まず努力すべきである。分割指定より後の段階で直さなくてはならなかったような不適當な句切りが多かったので、これに誘発された整理上の狂いもある。また同じ語か異なる語かの区別は、見分ける方法だけを規定して置いたので、これに関する誤りが多かった。辞書体の手引を作る必要を認める。単位語および同じ語か否かの指定は、所員側でもっと丁寧にすることが是非とも必要である。それによって作業の精度も能率も、当然更には上がるはずである。

このように反省される点は色々あるが、現状でも、普通の機械工業で要求されているのと同程度の正確さには達し得たと信ずる。(水谷)

方言地図作成のための準備研究

——昭和30年度地方調査員に対する委託研究——

A. 目 的

方言地図は、言語学・国語学界に広くいろいろな資料を提供すると考えられるので、その作成は学界・識者の多年要望するところであった。特に、日本語史の解明のためには是非とも必要なものの一つである。地方言語研究室では、地方調査員の調査・研究を中心として、全国的な方言地図を作成することになったが、本年度はその準備期間として、下記のような研究を地方調査員に委託した。

B. 担 当 者

委託研究の計画立案・報告の整理分析等には、地方言語研究室の柴田武、野元菊雄、上村幸雄、徳川宗賢が当った。

C. 委 託 研 究 内 容

各地方調査員に対し、担当地域の方言の特性に基づいて、方言地図作成に関する次の諸問題について研究することを求めた。

(1) 資料収集の方法について 通信調査によるか、現地調査によるか、両者を併用するか。

(2) 調査項目について。全国的に方言量の多い単語、現代日常生活に必要な基本語彙、音韻に関する項目、活用などの文法的特徴に関する項目、表現の区別に関する項目、国語調査委員会の音韻・口語法についての調査項目などが考えられるが、担当地域の方言の実状を考慮して、全国的に調査する必要があると認められる具体的な調査項目をあげる。

(3) 音声表記法について どのような表記法を用いたら、全国的に統一のある、しかも信頼しうる結果が期待できるか。

(4) 調査地点について、地点選定の基準について考察し、担当地域について、その方言分布を明らかにするのに十分な地点数、具体的な市町村名を地図上に記入する。

(5) 被調査者選定の基準について

(6) その他、一般に実施に伴う諸問題について

別に、担当地域に関するこれまで発表された方言地図の目録を作成し、できればその現物、あるいは写しを提出することを求めた。

分量は200字づめ原稿用紙80枚以上。

D. 地方調査員

本年度の研究を委託した地方調査員は、次の47名である。

県名	氏名	勤務先	住所
北海道	五十嵐三郎	北海道大学文学部	札幌市北28条東3丁目
北海道	石垣 福雄	札幌北高校	札幌市北2条西12丁目
青森	此島 正年	弘前大学教育学部	弘前市袋町20
岩手	小松代融一	岩手県杜立陵高校	盛岡市加賀野久保田95
宮城	堀籠 敬蔵	宮城県警察学校	仙台市川内三十人町53ノ1
秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部	秋田市手形東新町1
山形	後藤 利雄	山形大学文理学部	山形市緑町2丁目4ノ4
福島	菅野 宏	福島大学学芸学部	福島市太田町208
茨城	田口 美雄	茨城県立土浦第二高校	茨城県新治郡玉里村上玉里
栃木	多々良鑽男	宇都宮大学学芸学部	宇都宮市一ノ沢町196
群馬	上野 勇	群馬県立沼田女子高校	沼田市810
埼玉	大久保忠国	埼玉大学文理学部	埼玉県北足立郡与野町大戸576
千葉	大岩 正伸	千葉大学文理学部	東京都練馬区東大泉町941
神奈川	斎藤義七郎	川崎市立川崎商業高校	川崎市千年新町26
新潟	劍持華一郎	新潟県立柏崎高校	柏崎市本町2ノ873

富山	大田栄太郎	富山大学文理学部	富山市大町2区144
石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部	石川県河北郡津幡町清水ホ313
福井	佐藤 茂	福井大学学芸学部	福井市湊新町66
山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
長野	青木千代吉	通明中学校	長野県更級郡更北村中氷鉤1089
岐阜	笈 五百里	岐阜大学学芸学部	滋賀県東浅井郡浅井町山の前
静岡	望月 諠三	静岡大学教育学部	静岡市小鹿1
愛知	野村 正良	名古屋大学文学部	名古屋市千種区徳川山町3-44
三重	堀田 要治	三重県立亀山高校	亀山市南野町851
滋賀	熊谷 直孝	滋賀県立長浜北高校	滋賀県東浅井郡湖北町今西
京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部	岐阜市堀田町16
大阪	前田 勇	大阪学芸大学	大阪市東住吉区田辺西之町6-34
兵庫	和田 実	神戸大学文学部	神戸市垂水区西垂水町神田122
兵庫	岡田荘之輔	温泉町立温泉小学校	兵庫県美方郡温泉町湯
奈良	西宮 一民	帝塚山学院短期大学	枚岡市河内町920
和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部	和歌山市真砂町和歌山大教官住宅
鳥取	広戸 惇	鳥根大学文理学部	出雲市元宮町
鳥根	岡 義重		鳥根県簸川郡斐川村富村
岡山	虫明吉治郎	岡山県立操山高校	岡山市高島新屋敷
広島	村岡 浅夫	五日市中学	広島県佐伯郡五日市屋代121
山口	渡辺 保	大殿中学	山口市上金古曾2ノ75
徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部	徳島県那賀郡今津村島尻932ノ2
香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部	丸亀市土器町3936
愛媛	杉山 正世	愛媛県立今治工業高校	今治市松本通2丁目
高知	土居 重俊	高知大学教育学部	高知市弥生町52
福岡	都築 頼助	福岡学芸大学	福岡市西新区原1241
佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部	佐賀市赤松町中館93
長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部	長崎市城山町1ノ171号
熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部	熊本市健軍町県営住宅406号
大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部	臼杵市海添190

宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部	宮崎市下鶴町190ノ1
鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文理学部	鹿児島市武町965

E. 研究報告の概要

各地方調査員の報告を参考として、本調査実施の際の方法を決定し、調査票を作成することになるが、各報告のうち二三の点について概観すれば、次の通りである。

(1) 資料収集の方法については、通信調査・現地調査のそれぞれの長所短所を認めて、両者併用という意見が多かったが、なかには、過去数十年にわたる方言研究の成果は無視できないとして、それらを資料として方言地図を作成することを主張したものもある。

(2) 調査項目（主として単語）については、全国的に方言量の多い語・日常生活に必要な基本語を中心に（どちらに重点を置くかは別として）、項目を列挙するのが一般的傾向であったが、方言量の多い語は、よほど調査地点数をふやさなければ、すべての異称をすべて尽くせないから避けるべきだという考えや、語感・待遇・場面などの付加的意味のあるもの、副詞などのようにいろいろの表現のできるものは除くべきだという意見があった。そのほか、意味のずれのあるもの、すなわち形は同じで意味の違うものを、形を目安に、どんな意味で使われているか調査し、地図に表わすべきだという説もあった。

(3) 調査地点数については、担当地域の条件や、各調査員の地点選定の態度の違いから、一県あたり少ないところで20地点、多いもので300地点までいろいろあったが、各調査員が担当県の方言分布を明らかにするために選定した地点の総計は、約2,500であった。

F. 全国協議会・公開討論会

昭和30年11月21日、東京上野の国立博物館講堂において地方調査員全国協議会を開き、委託計画一般について質疑応答を行った。出席した地方調査員は33

名。

引続いて、同講堂において“日本の言語地理学”と題する公開討論会を行った。題目と発表者は次の通り。

- | | | | |
|---|------------|-----|------|
| 1 | あいさつ | | 西尾所長 |
| 2 | 日本の言語地理学 | | 柴田所員 |
| 3 | 調査地点について | 北海道 | 石垣福雄 |
| 4 | 調査語の選び方 | 奈良 | 西宮一民 |
| 5 | 語彙より語法を | 大阪 | 前田 勇 |
| 6 | どういう項目を選ぶか | | 徳川所員 |
| 7 | 会を閉じることは | | 岩淵部長 |

G. 所員による現地調査

昭和30年度には、地方調査員に研究を求め一方、地方言語研究室においても、調査方法・調査項目を検討するため、2回の現地調査を行った。

第1回調査

昭和30年10月、所員柴田武、野元菊雄、徳川宗賢の3名が、中国・四国地方におもむき、それぞれ下記の地点で調査した。

柴田所員	島根県簸川郡斐川村 岡山県岡山市 高知県高知市
野元所員	山口県長門市仙崎 岡山県御津郡金川町
徳川所員	高知県高知市 愛媛県松山市 愛媛県北宇和郡津島町岩松

この調査では、日常基本語彙と考えられるもの、方言量の多いもの、意味のヴァリエエティの多いものなど、合計約1,150項目について、その方言形とともに意味をできるだけくわしく調べることにした。方法は共通語形で与えて、

これに当る方言形を聞き、その意味をくわしく掘り下げた。主な目的は、本調査に当って調べるべき項目はどれか、また技術的に調べにくい項目はどれかなどを考え、最終的な項目決定に役立てるためである。

第2回調査

昭和31年3月、所員柴田武、野元菊雄、上村幸雄、徳川宗賢の4名が、和歌山県新宮市におもむき調査した。

この調査では、上の第1回の調査の結果選び出された約540項目について調べた。方法は、今度は、項目をそのまま共通語形で与えて方言形で答えさせることをせず、別の語を使って質問文を一定にした。その質問文がこちらの求める答を引き出しやすいかどうかを調べ、引き出しにくければどのように変えたらいいかを検討した。またさらに、調べる必要のない項目、あるいは非常に調べにくい項目を本調査の項目からはずすとすれば、どれがそれに該当するかの資料を得た。副次的には、新宮市のような言語的に複雑なところで調査した場合、ある項目について、どのくらいの違った方言形があらわれるかについても見通しを得た。

H. 昭和30年度以降の計画

30年度に引続いて31年度も準備期間とする。地方調査員には現地調査を含む調査・研究を委託し、その結果に基づいて調査方法・調査項目の細目を決定し、調査票を完成して、昭和32年度から、数か年にわたる本調査にとりかかる計画である。

(徳川)

琉球首里方言辞典の編修

A. 目 的

琉球首里出身の琉球研究家、島袋盛敏氏執筆の原稿「琉球語辞典」（収録語数約1万2千）に検討を加え、訂正増補した上で琉球首里方言辞典として刊行する。

B. 計 画 と 経 過

そのために、昭和29年度から30年度にかけておおよそ次の研究と作業を行った。

- (1) 首里方言の発音を音声学的に観察し、表記をかな表記から音素表記に改めた。
- (2) あらたに各語についてアクセントを観察し、記入した。
- (3) 語の意味の記述について、補正し、できるだけ用例を加えた。
- (4) 項目を整理し、補充した。
- (5) 文法の調査を行い、動詞については、おもな活用形を項目ごとに記入した。
- (6) 以上の作業をもとに、現在原稿を全部書き改めつつある。

さらに来昭和31年度は次の研究と作業を行う予定である。

- (1) 文法の調査を続行する。
- (2) 音韻と文法についての解説を加えることとし、その原稿を執筆する。
- (3) 書き改めた原稿によって項目を配列する。
- (4) 日本語(標準語)引きの索引を作る。

これらのすべての作業を昭和31年度中に完了させる予定である。

C. 担 当 者

主として上村幸雄が担当した。音声・アクセントの観察，音素体系の帰納は服部四郎評議員（東大言語学教授）の指導によって行った。

すべての観察，調査は，原稿の筆者島袋盛敏，同じく，首里出身の比嘉春潮（日本民族学協会理事）両氏の大きな協力を得て行った。

（上 村）

言語能力の発達に関する調査研究

A. 前年度までの経過

昭和28年度からはじめた研究で、第1年度の成果の一部は国立国語研究所報告7「入門期の言語能力」として出版した。今年度は第2年度までの一部をまとめて「低学年の読み書き能力」として出版することと、第3年度としての仕事の継続とが主であった。

B. 本年度担当者と実施概要

本年度の調査研究担当者は、興水 実、芦沢 節、高橋太郎、村石昭三および岡本奎六（非常勤）であり、実験学校、協力学校として、次の12校を委嘱した。

実験学校	東京都新宿区	四谷第六小学校
実験学校に準ずる学校	神奈川県中郡	比々多小学校
協力学校	東京都杉並区	方南小学校
	東京都中野区	新井小学校
	岩手県北上市	二子小学校
	栃木県小山市	小山第二小学校
	長野県上水内郡	豊野西小学校
	長野県埴科郡	松代小学校
	神奈川県逗子市	久木小学校
	静岡県静岡市	中田小学校
	滋賀県大津市	中央小学校
	兵庫県氷上郡	北小学校

以上12校はすべて前年度からの継続校である。

本年度は28年度入学児が3年生になっているので、その3年生に対して、各

種の言語能力検査を実施し、また29年度入学の2年生について前年度実施し得なかった諸検査を補充的におこなった。二つの学年とも個人個人について資料を集めて、発達の実態とその要因とをみて行くのであるが、まとめのつごう上、3年生は書きことばの発達を主にし、2年生は話しことばの発達を主にしている。質問紙調査としては、家庭での読書について前年度に引き続き家庭および児童自身に書いてもらったほか、家庭の言語生活の調査、社会性の発達に関する調査などもおこなった。

実験学校についておもな検査や調査を、実施月日順にあげると、次のようになる。

28年度入学児（3年生）

- 4月30日（土） 読書ノート配布
- 7月4日（月） かたかな読字力
- 7月5日（火） 黙読理解・文法能力
- 7月7日（木） かたかな書字力・読書速度
- 10月～11月 読書調査・言語生活調査・社会性調査
- 11月25日（金） かたかな書字力・文法能力
- 11月26日（土） 読書速度・漢字書字力・作文（わたくしのうち）
- 11月28日（月） 読解力・話す力・聞く力
- 11月29日（火） かたかな読字力・語い力
- 11月30日（水） 漢字読字力
- 3月2日（金） 漢字書字力・読書速度
- 3月3日（土） 読解力・文法能力
- 3月5日（月） 漢字読字力・語い力
- 3月7日（水） かたかな書字力・話し方（Ⅰ・Ⅱ）、聞き方（Ⅱ）

29年度入学児（2年生）

- 7月4日（月） 話す力・聞く力
- 7月5日（火） 話し方作法・かたかな読字力
- 7月7日（木） 漢字書字力・総合テスト（読解・語い・文法）
- 7月8日（金） 漢字読字力・かたかな書字力

10月～11月	読書調査・言語生活調査・社会性調査
11月26日(土)	語い力・聞く力・作文(わたくしのうち)
11月28日(月)	文法能力・話す力・聞く力
3月3日(土)	文法能力
3月5日(月)	聞き方(I・II・III)・語い力
3月6日(火)	話し方(II)

以上のほか、だいたい毎日、児童の教室における言語および行動の観察記録をとった。

実験学校に準ずる協力学校、神奈川県比々多校では、その学校職員によってこれと全く同じことが実施され、その他の協力学校でもこれ等の検査のほとんど全部が実施されて、その成績が研究所に送付されている。読書や社会性や言語生活の調査は、研究所で必要とする学校にだけ依頼した。

また、30年3月27日に研究所の会議室で実験・協力学校集会をもよおし、各学校の出席を得た。11月と3月には、実験・協力学校をつなぐ謄写版の小冊子「伝言板」を作った。

オフサルモグラフによる眼球運動の記録は、読む能力の発達の一部として前年度から実施しているところであるが、今年度は、実験学校の全学年について5名ずつ選んで記録をとったほか、中学校の段階にも手をのばして、

東京都中央区 交海中学校

の1～3年の記録をとった。

なお、3月下旬に、前年度の「低学年の国語学習指導の実態」に関する質問紙調査を修正した全学年にわたる国語学習指導の実態調査票を、全国467校に配布し、214校から回答を得た。

C. 成 果

今年度の研究調査の成果は、「低学年の話し聞く能力」(「児童の読書と眼球運動の発達」)および「中学年の読み書き能力」などとしてまとめる予定である。

前年度の成果をまとめた「低学年の読み書き能力」は年度末に国立国語研究所報告10として公刊された。

(興 水)

青年の新聞への接近・理解とその影響

この研究は、昭和30年度の文部省科学研究費補助金四十九万円の交付を受けて行われた総合研究である。

A. 前年度調査との関係

この総合研究は、昭和29年度からひきつづいて行われ、30年度で終了した。29年度は東京都と秋田県について、全日制普通科高等学校の生徒を対象にして調査を行ったのに対し、30年度は、東京都と三重県について、定時制高等学校の生徒および就学していない勤労青年を対象にして調査を行った。

B. 調査の目的

一般に、マス・コミュニケーションが社会の各構成員に、自己の住む社会がどのようなものかを認識させる力は絶大なものである。その中でも、放送の影響が感性的な面にもっとも強くあらわれるのに対し、新聞の与える影響には、理性的な面が強いのではないかと考えられる。

義務教育課程を終わってから、一般普通教育を受けて社会に出るまでの期間、すなわち、高等学校の過程は、青年の人格を形造るのにもっとも大事な過程と見なしうるのであろう。そこで、本研究では、高等学校に在学する青年およびそれに相当する年齢の非就学勤労青年を考察の対象とし、これらの青年が新聞にどう接近し、これをどの程度理解し、その結果、どのような社会認識をもつか、また、新聞以外の環境的因子が社会認識形式にどのように作用しているか、などの問題を明らかにしようとした。なお傍証的に、新聞記事の側に、青年読者の接近・理解を助けたり妨げたりする因子がどのように存在するかについても、部分的に考察を試みた。

C. 調査の眼目

(A) 何を調べるか

- 1) 新聞への接近の度合（新聞距離点への点数化が中心）
- 2) 新聞理解の度合（新聞理解得点为中心）
- 3) 新聞接近の型（読みの習慣・動機，かたよりなど）
- 4) 新聞理解の型（新聞的な常識）
- 5) 新聞記事の読み易さの要因（漢字の含有率と文の長さ）
- 6) 青年の問題意識（問題・悩みの分類）
- 7) 青年の国際理解
- 8) 青年の生活環境，関心事項（勉学や労働の条件，趣味など）
- 9) 新聞以外のマス・メディアへの接触（ラジオ，テレビ，映画，書籍，雑誌等）
- 10) 接近と理解との関連
- 11) 接近・理解と問題意識との関連
- 12) 接近・理解と環境・関心との関連
- 13) 新聞への接触度と他のマス・メディアへの接触度との関連

(B) どういう角度から考察するか

- 1) 地域の別（都市と農村）
- 2) 就学・非就学の別（定時制高校就学者と非就学者）
- 3) 男女の別
- 4) 年齢の別（主として就学者における学年別）

D. 調査の機構と運営

(A) 委員会

国立国語研究所の言語効果研究室と日本新聞協会の編集部調査課とを中心に，次の構成による委員会が設けられ，総合研究を運営した。

国立国語研究所 所 長 西 尾 実（代表者）

	研究第一部長	岩淵悦太郎
	研究第二部長	興水実
	研究室主任	平井昌夫
	所員	林四郎
	所員	寺島愛
日本新聞協会	編集部長	江尻進
	調査課長	前田雄二
	経営課長	三宅東洲
	調査課次長	大和田能夫
	調査課員	伊藤慎一
	調査課員	亀井一綱
	調査課員	宮地進吾
立教大学	講師	堀川直義
東京女子大学	助教授	森岡健二
和洋女子大学	講師	斎藤定良
日本女子大学	講師	高月東一
横浜国立大学	講師	杉溪一言

B) 会計事務

会計責任者には国立国語研究所会計課長黄木得二郎が当たり、会計事務は、齋藤静志がとった。

E. 調査の進行

(A) 調査地点の決定

1 東京都 (1)大都市の代表として、(2)正確な調査を行うためにもっとも有利な地点として、選んだ。

2 三重県度会(わたらい)郡度会村 (1)前年度に東北地方の農村(秋田県角館町)を調査しているので、今年度は、関西地方の農村として、(2)京阪神等大都市の文化圏内に入らぬ地点として、(3)定時制高等学校のある地点として、

選んだ。

度会村は、昭和30年1月に、内城田・一瀬・小川・中川の四か村が合併してできた村であり、今回の調査は、その旧内城田（うちきだ）村地区に限定して行った。人口は、全村10,311人中内城田地区が4,105人を占めもっとも多く、そのうち17才以上20才以下の青年は305人である。同地区は次の13の部落から成っている。大久保、大野木、上久具、下久具、葛原、立岡、棚橋、田間（たま）、当津（とうづ）、平生、鮎川（はいかわ）、南鮎川、牧戸。

（B）被調査者の決定

1 東京都

a 就学者 23区内の定時制高等学校180校から、無作為に10校を抽出した結果、次のとおりになった。被調査者の数は1,166名である。

上野忍岡高等学校	小松川高等学校
大泉高等学校	攻玉社工業高等学校
北豊島工業高等学校	千歳高等学校
北野高等学校	四谷商業高等学校
九段高等学校	早稲田大学工業高等学校

b 非就学者 労働省東京労働基準監督局に登録された資料によって、年齢15才から19才までの、各種企業従業者を企業種別に分類し、総数180名を目標に、割当て按分した。その数に従って、実際に各企業体に交渉した結果、承諾を得た次の23か所で調査を行った。実際の被調査者数は173名となった。

瀬見証券印刷KK パラマウント製靴KK 高分子工業KK 武州産業KK 三谷
 鋳業KK 東京錬磨KK 大同帆布工業KK 芝浦商事KK 三矢帽子KK 丸富
 KK 山善商店 加清洋紙店 珠屋小林商店 石原製鋼KK 帝都信用金庫 渡辺
 製菓KK 片山病院 第一自動車工業KK 全織第一KK 山田屋質店 井出病院
 横山工業KK 日本声器KK

2 三重県

a 就学者 明野高等学校度合分校の生徒全部（75名）を調査した。

b 非就学者 青年団組織を利用し、13の各部落ごとに8名前後を選び、

(選定は団に委任) 計 105 名を調査した。

以上を一括して表に示せば次のとおりである。

	東 京			三 重			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
就 学	786	380	1166	35	40	75	820	420	1241
非 就 学	94	79	173	71	34	105	165	113	278
計	880	459	1339	106	74	180	986	533	1519

(C) 調査票の作成

東京の京華高等学校および千葉県の野田高等学校で部分的にプリテストを行った結果、9月中に次の(1)―(3)の調査票を、12月中に(4)の調査票を作成した。

- (1) 新聞接近調査票 (5 ページ)
- (2) 新聞理解調査票 (16 ページ)
- (3) 新聞記事の読み易さの調査 (2 ページ)
- (4) MOONEY 式問題調査票 (3 ページ)

(D) 調査の実施

- 1 東京都 昭和 30 年 10 月 15 日～12月 5 日
- 2 三重県 昭和 31 年 1 月 11 日～1 月 14 日

(E) 集計整理

昭和 30 年 12 月から整理を始め、31 年 3 月で完了した。

F. 調査の方法と内容

(A) ジェネラル・サーヴェイ

東京の調査はすべて質問紙法によるサーヴェイ法式とし、上記(1)―(3)(接近、理解、読み易さ)の調査票に答えを記入させた。三重でもサーヴェイが主であったが、調査票に(4)(MOONEY)が加わった。

1 新聞接近調査

a 新聞への接触

- (1) 何新聞を読んでいるか (2) いつから読み始めたか (3) どのくらい読むか
 (4) 何が読む気を起させるか (5) 読み始める所がきまっているか (6) どのくらい信用して読むか (7) どういう理由で読むか (8) 各記事(まんが, 子供欄以下 22 種類に分類)をどのくらい読むか (9) 何時ごろ読むか

b 新聞との関係

- (1) 新聞記者について知っているか (2) 記者をどう見るか (3) 新聞(社)と何か関係があるか

c 新聞の記事について

- (1) 記事はむずかしいか(どんな記事, どんな点がむずかしいか) (2) 各記事の中でどんな項目を読むか(政治, 経済, 産業, 社会, 学芸, 家庭, 広告, 小説, 運動, 写真, 国際の各記事) (3) 新聞からどのように外国の知識を得ているか

d 新聞以外の, 情報を得る手段

- (1) 書籍—(a) 何を参考にして買うか (b) 月に何冊読むか (c) よかったもの
 (2) 雑誌—(a) どのくらい読むか (b) どんなものを読むか
 (3) 映画—(a) 何を参考にして見るか (b) よかったもの (c) 月に何回見るか
 (4) ラジオ・テレビ

e あなたの生活

- (1) 労働時間 (2) 賃金 (3) 睡眠時間 (4) 休日 (5) 住居 (6) 寝室の広さ

f 各種関心調査**2 新聞理解調査****a 新聞用語の理解**

- (1) 使用頻度の高いもの (2) 音訓表にはずれた読みその他のもの (3) 補正された当用漢字によるもの

b 新聞記事の理解

- (1) 見出し文 (2) 一般記事 (3) 短評記事

c 常識

(1) 記事常識 (2) 時事常識

3 新聞記事の読み易さの調査

a 漢字の含有率と読み易さ

b 文の長さとの読み易さ

4 問題意識の調査

- (1) 身体・健康 (2) 社交・娯楽 (3) 性格 (4) 対人関係 (異性関係を含む)
 (5) 家庭・家族 (6) 経済 (7) 学習 (8) 学校(教師・進学の問題を含む) (9) 職業
 (10) 生活環境その他 (政治, 社会, 宗教, 人生観等) (11) 雑(新聞との関係)

〔注〕これは、アメリカの心理学者 Mooney によって考案されたガイダンス用の調査票 (Mooney problem check list) をもとにして、われわれが作ったものである。上記(1)―(11)の各カテゴリーについて、気にかかること、悩んでいること、不満なことや欲求など(「やせすぎていて気にかかる」「すぐ顔が赤くなる」等)を20項目ずつ(計220項目)並べ、思い当たるものにしるしをつけさせた。

(B) ケース・スタディー

MOONEY 式問題調査票への記入の結果を中心に、新聞が青年の問題解決のためにどのように役立っているかを、面接法によって調べた。

この調査票を使用したのは三重だけであるから、ケース・スタディーも三重だけに限られた。三重の180名の中から、47名(男24, 女23)を選んで調査した。

G. 調査の結果

調査の結果は、すでに報告書「青年とマス・コミュニケーション」(日本新聞協会・国立国語研究所共編, 金沢書店刊, 昭和31.6.25発行)にまとめられているので、大方はそれにゆずり、ここでは、新聞理解調査の結果のうち、報告書で比較的簡略に記された部分について記す。

(A) 問題別の考察

調査票の問題ごとの得点の比較と、問題の中の各一問ごとの正答率の比較と

を行う。

1 新聞用語の理解

a 使用頻度の高い用語

テストの方法を二つに分け、(1) 語単独での理解の度合と、(2) 文脈の中での語の理解の度合とを調べた。提出した語は、いずれも、昭和25年2月朝日新聞東京本社刊「活字使用度数調査 熟語使用度数調査」の中で、1年間に200回以上使われた熟語の中から選んだ。

1) 語単独での理解

つぎのことばに、ふりがなをつけてください。

予算 候補 提案 違反 追加 逮捕 融資 繊維 宣伝 団体

(制限時間 1分30秒)

得点の比較

満点を10点として、全体のできがどうだったかを見る。

以下すべて問題の次にその結果を記すが、区分のしかたは、東京就学、東京非就学、三重とし、各区分を男子と女子とに分けた。三重を就学と非就学とに分けなかったのは、分けると著しく人数が少なくなることと、分けて考察した結果は何も差が出なかったことによる。

区分・性別	東京就学			東京非就学			三 重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	9.1	9.1	9.1	7.2	6.8	7.0	5.8	6.8	6.2

区分間の差は明らかだが、男女の間には差があるように見えない。

正答率の比較

一語一語が正答された比率は次のとおりである。

配列の順序は、東京就学の総計により、率の高い順からとする。

		東京就学			東京非就学			三重		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
比 率	団体	98.2	98.4	98.3	91.5	92.9	②91.9	78.3	93.2	②84.4
	提案	98.3	97.5	97.8	80.9	79.7	③80.4	57.5	81.1	④67.2
	予算	98.3	95.9	96.7	91.5	93.7	①92.5	83.0	91.9	①86.7
	違反	96.6	96.7	96.6	77.7	76.8	⑤76.9	65.1	83.8	③72.8
	宣伝	96.1	95.9	96.1	79.8	77.2	④78.6	58.5	54.1	⑦51.7
	追加	96.6	94.3	95.0	94.5	70.7	⑥72.8	62.3	72.9	⑤66.7
	候補	96.6	90.2	92.2	70.2	57.0	⑦64.2	57.6	67.5	⑥61.7
	逮捕	72.4	91.0	85.5	66.0	49.4	⑧58.4	47.1	45.9	⑧47.8
	組織	79.3	82.8	81.7	52.1	57.0	⑨54.3	40.6	56.8	⑨47.2
	融資	72.4	81.1	78.3	37.4	31.6	⑩34.7	27.4	28.4	⑩27.8

2) 文脈の中での理解

つぎの十の文章は、{ }のなかの四つのことばのうち、どれを選んだら、正しい文になりますか。正しいものに○をつけてください。

- (1) 第二次鳩山内閣が { 連立 / 成立 / 統一 / 結成 } した。
- (2) 粉乳中毒事件の { 容疑 / 発生 / 発見 } をみた。
- (3) 政府は、デフレ { 政策 / 生産 / 政治 / 整理 } をとろうとしている。
- (4) 社会党が、自由党の憲法 { 方針 / 訂正 / 不正 / 修正 } 案に反対した。

- (5) 山田さんは、鉄工場を $\left\{ \begin{array}{l} \text{従業} \\ \text{作業} \\ \text{事業} \\ \text{経営} \end{array} \right\}$ している。
- (6) 警視庁では、犯人 $\left\{ \begin{array}{l} \text{審査} \\ \text{調査} \\ \text{捜査} \\ \text{検討} \end{array} \right\}$ にのりだした。
- (7) 第一回美術展覧会が $\left\{ \begin{array}{l} \text{開催} \\ \text{再建会} \\ \text{実現} \end{array} \right\}$ された。
- (8) 平事件の $\left\{ \begin{array}{l} \text{起訴} \\ \text{判決} \\ \text{可決} \\ \text{解決} \end{array} \right\}$ がくだされた。
- (9) 増給したいが $\left\{ \begin{array}{l} \text{所得} \\ \text{財政} \\ \text{資材} \\ \text{資金} \end{array} \right\}$ がない。
- (10) 新しい世界 $\left\{ \begin{array}{l} \text{確認} \\ \text{対抗} \\ \text{承認} \\ \text{承認} \end{array} \right\}$ 記録が生れた。

(2 分)

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	8.1	7.0	7.7	6.4	5.0	5.8	5.4	4.5	5.0

区分間の差は、東京の就学・非就学の間で特に明らか。1 点前後の差で男子が優勢。

正答率の比較

	東京就学			東京非就学			三重			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
比 率	政 策	98.4	91.4	96.1	72.3	64.6	④68.8	65.1	61.8	③63.3
	経 営	96.7	91.4	95.0	80.9	75.9	①78.6	67.9	70.3	①68.9
	判 決	94.3	89.7	92.8	76.6	63.3	②70.5	69.8	51.4	④62.2
	開 催	86.1	81.0	84.4	69.1	54.4	⑥62.4	43.4	36.5	⑦40.6
	成 立	84.4	67.2	78.9	78.7	79.5	③69.9	63.1	58.1	⑤61.1
	発 生	77.9	60.5	73.9	67.0	70.9	⑤68.8	71.7	52.7	②63.9
	捜 査	82.8	53.4	73.3	51.1	43.0	⑧47.4	33.0	44.6	⑧37.8
	資 金	67.0	58.6	64.4	59.6	38.0	⑦49.7	47.2	39.2	⑥43.9
	修 正	70.5	37.9	60.0	38.3	20.3	⑩30.6	34.0	20.3	⑨28.3
	公 認	73.0	24.1	57.2	45.7	13.7	⑨31.2	36.8	10.8	⑩26.1

b 字は当用漢字であるが、読みかたがややむずかしいもので、しかも、日常の新聞記事の見出しの中に時折用いられる語

次の三つに分けて考えた。

1) 当用漢字音訓表で認められていない読みかたをするもの

「奏(かな)でる」「易(やさ)しい」「身代金(みのしろきん)」「質(ただ)す」「空(から)」「背(そむ)く」

2) 音訓表で認められていないだけでなく、熟語として全く別な読みかたをするもの(熟字訓, 当て字)

「為替(かわせ)」「火傷(やけど)」「七夕(たなばた)」

〔注〕火傷は「かしょう」とも読めるし、場面によってはこちらのほうが正しいが、新聞の読みかたの調査のためまえから、ここではとらない。

3) 音訓表で認められており、字も教育漢字に属するが、なお、ややむずかしいと思われる読みかたをするもの

「苦手(にがて)」

以上、十個の語をあわせて一つの問題を作った。

つぎのひとつづきのことばのなかで、右側〔(注)調査票は縦書き〕に線を引いたことばのよみかたを、下の()のなかに書き入れてください。

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| (1) <u>七夕</u> () の祭。 | (6) きょうの相手は <u>苦手</u> () だ。 |
| (2) バイオリンを <u>奏</u> () する。 | (7) 疑問の点を <u>質</u> () した。 |
| (3) <u>易</u> () しい問題。 | (8) 車が <u>空</u> () まわりしている。 |
| (4) 火事で <u>火傷</u> () をした。 | (9) <u>親に背</u> () く子供。 |
| (5) <u>身代金</u> () を取られた。 | (10) <u>為替</u> () を同封する。 |

(1分30秒)

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	6.5	6.1	6.4	4.2	4.0	4.1	2.6	2.8	2.7

区分間の差は明らか。男女の差は格別認められない。

正答率の比較

	東京就学			東京非就学			三重			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
比 率	七 夕	94.3	97.4	95.2	85.1	83.6①	84.5	55.3	72.8①	63.5
	空	87.7	82.0	85.7	68.1	53.2②	61.3	34.0	33.9③	34.7
	為 替	82.6	79.6	81.6	50.0	39.2④	45.1	29.1	26.8④	28.8
	苦 手	79.5	79.9	79.6	58.5	60.7③	59.5	41.2	44.8②	42.6
	易 しい	74.1	70.1	72.9	35.1	39.2⑥	36.0	29.2	26.4⑤	28.0
	身代金	59.7	53.4	57.6	40.4	34.2⑤	37.6	12.2	13.9⑧	13.1
	奏 する	53.5	63.4	56.7	28.7	36.7⑦	32.4	14.2	33.1⑦	21.8
	背 くに	49.6	43.7	47.7	18.1	16.5⑨	17.4	8.5	8.4⑨	8.5
	火 傷	51.3	40.1	47.6	26.6	30.4⑧	28.3	26.3	21.1⑥	24.8
	質 す	14.8	2.6	10.8	2.1	5.1⑩	3.5	2.9	0⑩	1.6

首位と末位はどの区分も一致しており、特に「質す」の読みかたが、とびはなれてむずかしかったようだ。誤答のほとんどが「しっす」であった。

c いわゆる補正漢字(昭和29年3月15日の国語審議会で、さしかえ案として公表された出入28字のうち、加えられるほうの28字)で記された語。

この問題は、朝日新聞社用語課長宇野隆保氏の案に基づいて作った。

つぎの三つの文の のなかに、左の十三の漢字のうちから選んだ適当な文字の番号を書き入れてください。

(1) ゆうべの大雨で 水になり、 らが魚 りをした川は 海のようになった。

(2) 敵が 戦してくる様子なので、 察機が出ていったが、間もなく って来た。

(3) 給が一 に 置きになって、みな困っている。

1 戻 2 俵 3 渦 4 僕 5 偵 6 釣 7 洪 8 堀 9 据 10 泥 11 挑
12 披 13 齋 (3分)

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三 重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	8.4	7.6	8.2	6.6	5.0	5.8	4.3	4.1	4.2

区分間の差明らか。男子優勢。

正答率の比較

	東京就学			東京非就学			三 重			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
比	釣	93.7	97.4	94.9	80.9	84.9①	82.6	56.0	81.5①	76.2
	僕	89.5	91.7	90.2	73.4	81.0②	76.9	61.0	72.6②	66.6
	偵	92.8	79.5	88.5	78.6	46.9④	64.2	44.7	55.1④	43.3
	戻	86.5	82.0	85.0	57.5	54.5⑥	56.0	37.6	47.1⑥	42.3

	東京就学			東京非就学			三重			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
率	洪	84.4	80.4	83.0	71.3	57.0③	64.7	53.2	36.9③	45.9
	挑	88.4	69.4	82.3	68.1	40.5⑦	55.5	40.4	22.8⑦	33.5
	泥	81.5	73.0	78.5	67.0	49.4⑤	59.0	38.3	40.0⑥	39.9
	俸	80.0	70.6	77.0	55.4	32.9⑨	45.1	23.4	21.4⑧	23.3
	斉	70.6	66.2	69.2	56.4	36.7⑧	47.4	26.2	36.2⑨	21.2
	据	66.3	50.8	61.2	31.9	16.5⑩	24.8	9.9	14.3⑩	12.5

首位・末位はどの区分でも一致しており、「据」の率は、全般の率の低い所ほど、とびはなれて低い。

2 新聞記事の理解

a 見出しの文章

見出し文は、簡潔さと印象の強さとが要求される所から、次のような要素の入る傾向が強い。

- (1) 倒置 さあ来るぞ、全米オールスターズ
- (2) 文語調 再び連立制をとらん
- (3) 体言どめ 中共で同意
- (4) 助詞の省略 大井映画殺人犯人捕まる 首相演説、野党の批判

以上の点に着眼して作った問題は、

つぎの五つの文は、どれも、新聞記事の見出しです。意味は、下の三つのうちどれが正しいのですか。正しいものに○をつけてください。

- (1) さあ来るぞ全米オールスターズ { 1 全米オールスターズがはたして来るか
2 全米オールスターズがどうやら来そうだ
3 全米オールスターズがいよいよ来る
- (2) 再び連立制をとらん { 1 再び連立制をとらない
2 再び連立制をとる
3 再び連立制をとるだろう

(3) 中共で同意	1 中共で同意した
	2 中共で同意するだろう
	3 中共で同意しない
(4) 大井映画座殺人犯人捕る	1 大井映画座の殺人犯人が捕まった
	2 大井映画座で殺人犯人が捕まった
	3 大井で映画座の殺人犯人が捕まった
(5) 首相演説, 野党の批判	1 首相の演説および野党の批判
	2 首相が演説で野党を批判した
	3 首相の演説を野党が批判した

(2分)

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	7.3	6.6	7.1	6.6	5.7	5.9	5.1	4.4	4.8

区分間の差明らか。男子優勢。

正答率の比較

		東京就学			東京非就学			三重		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
比 率	(例置) さあ来るぞ	96.9	95.1	96.3	92.5	88.6	90.7	80.2	66.1	76.1
	(体言止め) 同意	92.5	90.6	91.9	77.6	83.6	80.4	67.4	73.8	68.1
	(助詞省略) 大井映画座	85.6	78.4	83.3	70.3	59.6	65.3	51.2	33.2	43.5
	(助詞省略) 首相演説	53.9	43.5	50.5	45.8	30.4	38.8	35.5	28.5	37.5
	(文語調) とらん	34.2	25.8	31.4	31.9	22.8	27.7	26.9	13.4	17.0

「再び連立制をとらん」が、どこでも、ひどくできがわるかったが、問いの

数が少ないから、これで、文語調の見出しがいちばん理解されにくいという結論を出すことは、もちろんできない。

b 本文の文章

1) 一般の記事

各面から、次の四つの問題を作った。ここでも、宇野氏の協力を得ることができた。ここでは、事実を報道している記事について、そこに叙述された事実が、そのまま正しく受けとられるかどうかを見た。

問題 1

二十五日深夜ワシントンに到着した重光外相は「ダレス國務長官やアメリカ最高防衛当局との^①話し合いは、日米関係の新しい出発点になるものとわたしは^②信じている」と語った。

つぎの質問を読み、正しい答に○をつけてください。

(1) この文章には、何が書いてありますか。

- 1 ワシントンでのダレス國務長官の考え
- 2 アメリカ最高防衛当局の意見
- 3 ワシントンに着いた重光外相の談話

(2) ①の「話し合い」はいつのものですか。

- 1 昨日やったもの
- 2 これからやるもの
- 3 いまやっているもの

(3) ②の、「信じている」のはだれですか。

- 1 重光外相
- 2 ダレス國務長官
- 3 重光外相とダレス國務長官・アメリカ最高防衛当局

(2 分)

問題 2

二十八日東京電力では、二十九、三十両日に予定されていた^①大口工場への電力制限

を解除すると発表^㊸した。計画では 500 キロワット以上の使用工場に対して 15% の節電^㊹、それで不足する場合には午後からの作業中止を要請^㊺することになっていた。

つぎの質問を読み、正しい答に○をつけてください。

- (1) この文章には何が書いてありますか。
- 1 午後の作業中止
 - 2 電力制限の解除
 - 3 15%の節電
- (2) ㊸の「大口工場」とは、どんな工場をいうのですか。
- 1 間口の広い工場
 - 2 大口氏の経営している工場
 - 3 たくさん電力を使う工場
- (3) ㊸の「発表した」のはいつですか。
- 1 二十八日
 - 2 二十九日
 - 3 三十日
- (4) ㊹の「要請する」のはだれですか。
- 1 政府
 - 2 工場主
 - 3 東京電力

(2 分)

問題 3

中共大豆の輸入は中共側がさきにトン当たり 40 ポンドまで値下げしてもよいと通告してきたのに対し、通産省はトン当たり 38 ポンド以下でないと輸入させないと主張、このため日本側商社は再度値下げを中共側に要請していたが、二十三日中国進出口会社から中日貿易会あて「40ポンド以下には譲歩できない」むねの電報が入った。この結果二十五日の輸入申請受付を目前にひかえ、輸入価格について両者の主張の食い違いが調整される見込は薄くなり、中共大豆は輸入できないのではないかと心配されている。

中国進出口会社から入った電報は、「40ポンドの価格は品質を考慮して決めたも

ので、中共大豆の良質なことは日本の輸入商社も消費者も知っている。どうか日本側で再考慮してほしい」と強調している。

つぎの質問を読み正しい答に○をつけてください。

- (1) この記事に見出しをつけるとしたら、つぎのどれが、いちばんよいと思いますか。
- 1 農林省は価格譲らず
 - 2 大豆の輸入近く実現
 - 3 中共大豆は良質
 - 4 大豆輸入不可能の懸念
- (2) この記事には中共側の態度がどのように書かれていますか。
- 1 38 ポンドまで値下げしてもよい
 - 2 40 ポンド以下に値下げしてもよい
 - 3 40 ポンド以下には値下げできない

(2 分 30 秒)

問 題 4

ドロンコ道に百万円

拾って交番へ

正直者の 落した小使さん大助かり
安田さん

三十日午後一時半ごろ、東京都荒川区南千住三ノ一三昭和通運の小使原田幸作さん(61)は、三菱銀行三輪支店から百五十人の社員の給料九十七万七千七百円を引き出し、赤革カバンに入れ自転車の荷掛につけて雨の中を帰って来た。ところが、ちゃんとしばったはずのカバンが、銀行からさほど遠からぬところでポトリと落ちたが、雨ばかり気にしていたので気がついたのはそれから五、六分後、「老腹をカキ切ってもおっつかない」と悲壮な顔でもと来た道を行きつもどりつ、必死になって探すこと三十分「もうだめだ」と坂本署三輪交番に泣き込んだ。

だが天の助けか交番の机の上にあきらめたカバンがちゃんと置いてある。中身もそのまま、夢かとはばかり事情を聞いたところ、これも浅草の銀行から社員の給料を

取って帰り途に通りかかった安田一郎さん(32)が拾って届けてくれたことがわかった。安田さんは名前もいわず立ち去ろうとしたが、お巡りさんたちに引きとめられ、知らせを受けてかけつけた昭和通運の泉屋経理課長から出された礼金には、「小使さんがかわいそうです」と受取ろうとしなかったが、署長がなかに入り、やっと「金一封」だけを受取り、申訳なさそうに帰っていった。

右の記事のなかで、つぎの五つのことがらはどういう順序であらわれますか。○のなかに、そのことがらがあらわれる順番を数字で書き入れてください。

○昭和通運の小使さんが、落したカバンを、「老腹をカキ切ってもおっつかない」と探した。

○交番の机の上に、あきらめたカバンが置いてあった。

○カバンが雨の中に落ちた。

○小使さんが銀行からお金をおろした。

○安田さんがカバンを拾って届けた。

(3分)

得点の比較

		東京就学			東京非就学			三重		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	問題1	7.3	6.6	7.1	6.6	5.7	5.9	5.2	4.4	4.8
	問題2	8.1	7.6	7.9	7.0	5.1	6.1	4.6	5.5	5.0
	問題3	8.8	8.3	8.6	7.6	6.6	7.2	5.7	6.5	6.0
	問題4	8.1	7.5	7.7	6.8	5.3	6.1	4.5	3.1	3.8

2) 短評記事

この種の記事では、短い文章の中に、筆者の意見や感想が鋭くもり込まれるわけだが、それはかならずしも露骨に表現されるということではない。むしろ逆に、軽妙に書き流したり、ちょっとひねったりしているために、うっかり読むと真意をとりそこなうおそれがある。そういう文章の読みとり能力をテストした。ただし、もちろん、ひねくれた文章は避けた。

つぎの二つの文は、新聞の短評記事として出ていたものです。それぞれについて質問に答えてください。(正しい答に○をつける)

1

「恐怖のみこし」という投書を、いつか新聞で読んだことがある。千葉のある町のお祭に偶然、宿にとまった人が、ミコシを二階から見てはいけないと、きつく女中から注意された。その二階から映画会社のニュース・カメラマンが、町の了解のもとにそのミコシを撮影した。それを見つけたミコシの人たちが「やっちまえ」と、旅館になだれこんだ。こうなると、祭はミコシかつぎの人たちだけの祭である。

この記事を書いた人は、お祭に対してどんな考えをもっているように思われますか。

- 1 お祭に反対
- 2 お祭のミコシに反対
- 3 ミコシの暴力に反対
- 4 お祭に協力しないことに反対

2

第一次大戦で敗れたドイツは二十年後に同じ過失をおかした。二十年たつと、戦争のみじめさ、その無意味さを知らない子供も青年になる。日本では、戦争のむごたらしさを知らない子供がもう十二、三になって、チャンバラやプロレスごっこをしている。敗戦後十年でもう日本の民主主義は危機にきている。危機というクセ者はいつも人の知らない間に来て座り込む。

この記事を書いた人は、戦後十年めの日本のすがたを、とくにどういう点で感じているのでしょうか。

- 1 古い考えが復活している
- 2 国民が戦争への反省を忘れかけている
- 3 国民の体位が向上している
- 4 社会の混乱がひどくなっている
- 5 こどもたちの道徳が落ちている

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	7.6	6.6	7.3	6.0	5.4	5.7	5.7	4.1	4.7

3 新聞常識

常識調査の結果は報告書にかなりくわしく記したので、ここでは、問題ごとの観察はやめ、各種常識の得点だけを記す。

a 新聞記事を読むための特殊な常識

人の死去を報ずる記事の見出し（人名に太いケイを引いただけのもの）とか、案内広告の圧縮された表現とかがどの程度理解されているかを調べた。

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	6.1	5.2	5.8	3.7	3.0	3.4	1.7	1.8	1.7

全般に、非常に理解度が低い。新聞は、この青年たちにとっては、まだ「読みものである」、「生活の友」「利用するもの」にはなっていないというようなことが想像される。

b 国内政治についての常識

「与党・野党」「保守合同」「防衛庁」「日ソ交渉」のことをたずねた。

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	6.9	3.5	5.8	4.4	1.5	3.1	3.5	1.8	2.8

男女のできに著しい開きがある。この開きは、国内政治記事へ接触する度合

の開きと非常によく似ている。

〔参考〕 国内政治記事を「いつも読む」と答えたものが、全体の中で占める比率は次のとおりである。(接近調査による)

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
比率	59.0	35.1	51.3	26.6	15.1	21.3	31.0	8.8	22.0

c 外国についての常識

「三大国の首脳」「主要地名と事件」「人工衛星」「原子力発電」について、すなわち、政治と科学技術の分野に関することをたずねた。

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	6.9	4.0	6.0	4.8	2.5	3.9	3.7	2.7	3.3

男女の差は顕著だが、国内政治の場合ほどではない。

〔参考〕 外国政治記事、自然科学記事(学芸記事の中の)をそれぞれ「いつも読む」と答えたものの比率を平均したものは次のとおりである。

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
比率	36.7	17.8	30.4	17.0	10.5	14.0	17.6	8.8	13.9

d 社会面で扱われる事件に類する事件についての常識

「紫雲丸事件」「M+W」「Yライン」「マンボスタイル」についてたずねた。

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	8.6	7.8	8.3	6.8	6.0	6.4	4.0	4.3	4.1

男女の差はあまりない。

〔参考〕 社会記事を「いつも読む」と答えたものの比率は次のとおりである。

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
比率	73.7	66.5	71.7	69.1	51.6	61.2	40.8	29.4	36.1

e スポーツ用語についての常識

野球、水泳、陸上競技、ボクシング、テニスについての用語 20 個（重盗、ダブルヘッダー、二百パタ、ターン、トラック、バトン、ゴング、TKO、第一セット、デ杯）をたずねた。

得点の比較

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	8.6	5.8	7.7	6.4	2.9	4.8	3.9	2.0	3.1

〔参考〕 運動記事を「いつも読む」と答えたものの比率は次のとおりである。

	東京就学			東京非就学			三重		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
比率	67.9	28.3	55.0	69.1	20.1	46.7	65.1	25.7	49.0

4 新聞理解の全般的窺察

次に、新聞用語の理解、新聞記事の理解、新聞常識の各度合を、それぞれの点数にまとめて記述する。100 点を満点とする。

a 全般

得点の比較

		東京就学			東京非就学			三重		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	用語	80.3	74.6	78.3	61.0	52.0	57.0	45.2	45.4	45.3
	記事	77.5	72.1	75.6	64.2	55.5	60.2	47.8	46.1	47.1
	常識	74.2	52.7	67.1	52.0	32.0	42.8	33.5	24.8	30.0

用語の理解点と記事の理解点とは、たがいに、あらわれかたがよく似ている。この事実は、以上の点数が、新聞という特殊なものを理解する力のあらわれたものであるとともに、むしろそれ以上に、国語能力という基本的固定的な力がそこにあらわれたと見るべきであることを示しているだろう。それに対して、常識の点数は、区分間の相互関係が、以上の二つの点数の場合とはかなりちがっており、男女の差が非常に強く出ている。

以上のことから、文字や文脈を理解する力ではそうちがっていない男子と女子との間で、その関心のちがいや、そのために起る（と思われる）新聞への接触のしかたのちがいやによって、時事的な常識においては、非常なちがいができていることがわかるであろう。

b 東京就学における学年発達の状況

得点の比較

		用語			記事			常識		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均点	1年	74.4	70.0	72.7	76.8	71.6	74.8	68.4	48.3	60.6
	2年	80.6	71.9	78.2	77.8	68.5	75.2	75.1	50.2	68.1
	3年	81.0	79.5	80.5	76.1	74.3	75.6	73.9	56.0	68.3
	4年	85.5	79.6	83.5	79.2	74.3	77.6	79.7	58.5	72.8

男子は一般に、1年→2年、3年→4年に向上があり、2年→3年では停滞しているが、女子はその反対で、2年→3年で向上し、1年→2年、3年→4年

で停滞している。

H. 成 果

前年度から引きつづいた総合研究「青年の新聞への接近・理解とその影響」は以上で終了した。29年度の方は、報告書「高校生と新聞」(国立国語研究所・日本新聞協会共編、秀英出版刊)として刊行され、本年度の方は、前記のように、「青年とマス・コミュニケーション」として刊行された。これに、昭和27年度に行った小中学生についての調査の報告書「少年と新聞」(秀英出版刊)をあわせるならば、青少年がどのように新聞に接近し理解しているかの実態調査が、これで一応完成したわけである。

ただし、青年が新聞からどのような影響を受けるかという問題は、29年度には新聞記事の表現と効果の面から、30年度には、青年の問題意識の面からさぐられはしたものの、ともに満足な結果に達するまでには到らなかった。これは今後に残された課題と言わなければならない。

(林四)

選挙公報文章の調査

昭和30年度における言語効果研究室の仕事として、30年2月に行われた総選挙に際して全国の有権者家庭に配付された総数 1,048 名にのぼる立候補者の選挙公報文章を、「政治における言語効果」研究の一環としてとりあげた。調査項目は大体、表記面の問題を中心としたが、主なる調査項目とその調査結果は次の通りである。

A. 漢字・ひらがな・かたかな・ローマ字の含有率

文章の読みやすさを規定する条件として、漢字・ひらがな・かたかなの含有率の問題が指摘されてきたが、これが公報文章の場合は、どのような比率になっているかを調査した。

調査対象は、保守・革新政党に所属する 890 名の候補者から各々 100 名ずつランダムに抽出した。(下表参照)

	党	総 数	サンプル		党	総 数	サンプル
保 守	民 主	286	54	革 新	右 社	123	34
	自 由	247	46		左 社	120	34
	合 計	533	100		共 産	96	27
			労 農		18	5	
			合 計		357	100	

その調査集計の結果は下の表のとおりである。

党派別	漢 字		ひらがな		かたかな		ローマ字		総 計
	実 数	比率	実 数	比率	実 数	比率	実 数	比率	実 数
民 主 党	48,138	55.9	36,977	43.0	976	1.1	6	0.0	86,097
自 由 党	41,257	59.3	27,593	39.7	669	1.0	9	0.0	69,528
保 守 合 計	89,395	57.4	64,570	41.5	1,645	1.1	15	0.0	155,625

社会党 右派	31,723	58.1	21,694	39.8	1,100	2.0	48	0.1	54,665
社会党 左派	29,614	53.5	24,633	44.5	1,056	1.9	78	0.1	55,381
共産党	19,569	46.0	21,335	50.2	1,552	3.7	69	0.2	42,525
労農党	5,174	58.3	3,384	38.1	280	3.2	39	0.4	8,877
革新合計	86,080	53.4	71,046	44.0	3,988	2.5	234	0.2	161,348
総計	784,641	55.5	598,503	42.5	23,045	1.6	918	0.1	1,407,107

この表を見て言えることは、共産党の例外を除いて保守革新すべての政党を通じて、漢字の含有率はほとんど同じだということである。

ひらがなの含有率も同様に共産党の例外を除いては、大体同じ40パーセント前後である。

かたかなの含有率は共産党労農党が非常に高い。このことは、のち程のべるかたかなによって表記された語の調査結果と対応する。

このような公報文章の漢字・ひらがな・かたかな・ローマ字の含有率を他のものと比較してみるとどうであるか。

森岡健二氏の調査によると次のようである。

文の複雑さがその長さに反映するとすれば、語のむずかしさは、日本語では漢字・漢語に反映するという訳で、同氏は多くの雑誌・教科書・新聞等について漢字の含有率を調査された。そのうち新聞についての調査結果をあげれば、下の表のようになっている。

政治	社説	短評	社会	投書	寸評
57.1%	42.2	37.9	51.8	38.7	40.0

一般に新聞の政治記事は読みにくいと言われているが、この調査でも政治記事の漢字の含有率は他の記事のそれに対して一番高いことがわかる。

いまこの表と公報文章の漢字の含有率とを比較してみると、公報文章の漢字の含有率は大体新聞の政治記事と同じであり、含有率の点からいえば、公報文

章は全体的にいて、新聞の政治記事と同じくかなり読みにくい文章と言わねばならない。

またこの二つの調査結果から次のようなことも言えないだろうか。

公報文章も大体政治を扱った文章だから、ひとつの政治記事であるとも言える。従って一般的なこととして、政治を扱った文章を書けば、その文章は多くの場合それを書いた人のいかに関係しないで、大体漢字の含有率が55パーセント前後の文章を書くのが、今日の社会人一般の自然的傾向であると言ふことである。

B. センテンスの長さ

次に同じく読みやすさを規定する条件の一つと考えられているセンテンスの長さを、前記200名のサンプルについて調査した結果は次のとおりになった。

党派別	字数							
	1~20	21~40	41~60	61~80	81~100	101~120	121~140	141~160
民 主 党	760 36.8	521 25.2	319 15.5	201 9.7	103 5.0	68 3.3	30 1.5	24 1.2
自 由 党	875 47.4	355 19.2	253 13.7	149 8.7	92 5.0	54 2.9	24 1.3	16 0.9
保 守 計	1,635 41.8	876 22.4	572 14.6	350 9.0	195 5.0	122 3.1	54 1.4	40 1.0
社会党 右派	628 41.4	376 24.8	226 14.9	136 8.9	76 5.1	39 2.6	17 1.1	4 0.2
社会党 左派	485 35.4	394 28.4	234 16.9	128 9.2	73 5.0	37 2.7	9 0.6	13 0.9
共 産 党	254 25.0	335 32.9	209 20.5	115 11.3	60 5.9	25 2.5	10 0.9	6 0.6
労 農 党	149 49.2	77 25.4	43 14.2	23 7.6	8 2.6	2 0.7	1 0.3	
革 新 計	1,516 35.9	1,182 28.0	712 16.9	402 9.5	217 5.0	103 2.4	37 0.9	23 0.5
全 体	14,142 39.3	8,901 24.8	5,598 15.6	3,305 9.2	1,816 5.0	1,019 2.8	420 1.2	295 0.8

161~180	181~200	201~220	221~240	241~	総 計	1~40	1~60	1~80
16	10	4	3	5	2,064	1,281	1,600	1,801
0.8	0.5	0.2	0.2	0.2		62.1	77.5	87.3
8	3	6	2	9	1,846	1,230	1,483	1,632
0.4	0.2	0.3	0.1	0.5		66.6	80.3	89.0
24	13	10	5	14	3,910	2,511	3,083	3,433
0.6	0.3	0.3	0.1	0.4		64.2	78.8	87.8
4	7	3		1	1,517	1,004	1,230	1,366
0.2	0.5	0.2		0.1		66.2	81.1	90.0
5	2		2	4	1,386	879	1,113	1,241
0.4	0.1		0.1	0.3		63.8	80.7	89.9
1	1	1	1		1,018	589	798	913
0.1	0.1	0.1	0.1			57.7	78.4	89.7
					303	226	269	292
						74.6	88.8	96.4
10	10	4	3	5	4,224	2,698	3,410	3,812
0.2	0.2	0.1	0.1	0.1		63.9	80.8	90.3
164	105	67	38	93	35,963	2,3043	2,8641	3,1946
0.5	0.3	0.2	0.1	0.3		64.1	79.6	88.8

(注) 各項とも点線の上は実数、下は比率を示す

この表をみると共産党の例外を除いて、20字までのセンテンスの占める比率が一番高い。そして21~40字のセンテンスが、同じく共産党の例外を除いてそれにつづき、以下センテンスが長くなるに従って、その比率は次第に低くなっている。これは保守革新すべての政党を通じて言えることである。1~40字のセンテンスは、大体60パーセント以上を占め、1~60字のセンテンスに至っては、全センテンスの80パーセント前後、労農党は90パーセント近くを占めていることがわかる。

また次の表から、1センテンス当りの平均字数は労農党の例外を除き、大体36~40字前後であることもわかる。

	総 字 数	総センテンス数	一センテンス 平均 字 数
民 主	86,097	2,064	41.71
自 由	69,528	1,846	37.66
保 守	155,625	3,910	39.8
右 社	54,565	1,517	36
左 社	55,381	1,386	40
共 産	42,525	1,517	41.8
労 農	8,877	303	29.3
革 新	161,347	4,224	38.2
全 体	1,407,107	35,963	39

これを同じく森岡氏の調査と比較すると次のようになる。

1) 雑 誌

児 童	大 衆	文 芸	論 説	論 文
29.1字	37.5	42.5	58.7	75.7

2) 教 科 書 (国語・社会・理科を合わせたもの)

小 三	小 六	中 三	高 三
24.8	35.3	42.3	46.3

3) 新 聞

政 治	社 説	短 評	社 会	投 書	寸 評
77.6	61.9	37.5	54.5	48.6	71.7

このことから公報文章は、新聞・雑誌などと比較してかなり短いセンテンスで書かれていることがわかる。これにはのちほどのべる個条書きの問題が大きく作用していると思われる。

(注) 読みやすさの条件分析には、森岡健二氏の詳細な調査がある。同氏論文『読みやすい文章とは？——その測定方法の試案』（新聞研究, 昭和29年3月号）、また国立国語研究所年報3および4にも同氏の調査報告がある。

C. かなづかい

表記に関するひとつの重要な問題としてかなづかいの問題をとりあげた。

1) 一応現代かなづかいに従ったと判定される者, 2) 一応歴史的かなづかいに従ったと判定される者, 3) 両者混合いずれとも判定しがたい者と三つのグループに分類し, それが公報文章の場合, 候補者の学歴・年齢・所属する政党などどのような関係にあるかを総数1,048名の候補者について全数調査を行った。結果は次のようになった。各表とも()内はパーセントを示す。

(1) 学歴の差異からみた, かなづかいの分類

	大 学 高专卒	大 学 高专退	中学卒	中学中退	小学卒	小学中退	不 明	計
現 代 かなづかい	482 (71.7)	47 (85.5)	78 (77.2)	14 (82.4)	31 (68.1)	1 (100.0)	111 (70.7)	764 (72.9)
歴 史 的 かなづかい	64 (9.5)	1 (1.8)	9 (8.9)	1 (5.9)	2 (4.4)	0 (0.0)	18 (11.5)	95 (9.1)
両者の混合	126 (18.8)	7 (12.7)	14 (13.9)	2 (11.8)	12 (26.4)	0 (0.0)	28 (17.8)	189 (18.0)
計	672	55	101	17	45	1	157	1,048

(2) 年齢の差異からみた, かなづかいの分類

	40才以下	41~50才	51~60才	61~70才	71才以上	計
現 代 かなづかい	79 (72.5)	274 (75.5)	292 (71.9)	108 (70.1)	11 (68.8)	764 (72.9)
歴史的かなづかい	7 (6.4)	34 (9.4)	38 (9.4)	14 (9.1)	2 (12.5)	95 (9.1)
両者の混合	23 (21.1)	55 (15.2)	76 (18.7)	32 (20.8)	3 (18.8)	189 (18.0)
計	109	363	406	154	16	1,048

(3) 所属する政党の差異からみた、かなづかいの分類

	民主	自由	右社	左社	共産	労農	保守	革新	諸派	無所属	計
現代 かなづかい	197 (68.6)	170 (69.1)	97 (78.9)	99 (82.5)	92 (94.8)	14 (82.4)	367 (68.9)	302 (84.4)	22 (66.7)	73 (58.9)	764 (72.9)
歴史的 かなづかい	28 (9.8)	28 (11.4)	8 (6.5)	7 (5.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	56 (10.5)	15 (4.2)	6 (18.2)	18 (14.5)	95 (9.1)
両者の混合	62 (21.6)	48 (19.5)	18 (14.6)	15 (12.5)	5 (5.2)	3 (17.6)	110 (20.6)	41 (11.5)	5 (15.2)	53 (26.6)	189 (18.0)
計	287	246	123	121	97	17	533	358	33	124	1048

以上のように1,048名の候補者全体についての調査では、学歴・年齢別に見た場合、ほとんどその間に差異がなく、政党別に見た場合に差異が見られる。

ともあれ、この調査では現代、歴史いずれのかなづかいに従ったのか、全くその判定に苦しむ程かなづかいの完全に混乱している者が189名もあった、一国の選良ともなるべき人の選挙公報においてすら、このような状態であることは、これらの人々にとって惜しむべき残念なことであると同時に、それは反面かなづかい、ひいては国語の表記法そのもののためにも現実の問題として悲しむべき不幸なことであると思う。

D. かたかな表記

いうまでもなく現在の国語の表記は、漢字ひらがなまじり文を主体とし、かたかなはあることばにかぎってのみ使用するというのが、一般的な慣習であり、原則である。

このことは選挙公報の場合でも例外でなく、1,048人の立候補者の中、この慣習を離れて、漢字かたかなまじり文を採用したのはわずかに一人（中河西仁兵衛——福島二区、無所属）であった。

ところで、ひとしくあることばにかぎって、かたかなで書くという習慣ができていくといっても、実際にどのことばをかたかなで書くかという段になると、それは人により、またその時と場合によって必ずしも一定していないようであ

る。

純然たる外国語および大部分の外来語の表記は、かたかなですのを原則とするから、これは人により、また時と場合によって、それほど左右されるものではないと考え、これは考慮の外においた。

問題はこれらの外国語・外来語を除いたほかのことば、すなわち、本来かたかなによって表現するのを原則としないで、漢字やひらかなでも書ける語、少なくともそうすることが一般的であると考えられる語が、人によりまた時と場合により、ことさらにかたかなを使って表現されている場合がしばしば見うけられる。この一般的な原則とか、慣習とかから離れているかたかなの表記が、選挙公報ではどのような状態になっているか、どんな種類の語がどの位の頻度で表記されているか、それが政党別について差異があるかどうか、以上のような点について調査してみた。調査は前記保守・革新各100計200のサンプルについて行った。

まず、漢字やひらかなでも書くことができ、または少なくともそうすることが一般的な慣習と考えられているようなことばを、一語でもかたかなによって表記した候補者の数は次のとおりである。

	サンプル	かたかな表記 候補者数	比率
民主	54人	13人	24.1%
自由	46	6	13.1
保守	100	19	19.0
右社	34	7	20.6
左社	34	20	58.8
共産	27	20	74.1
労農	5	5	100.0
革新	100	52	52.0

この表によってもわかるように、ことさらにかたかなで表記しようとする傾向は保守よりも革新系党派の候補に圧倒的に強く、とりわけ労農・共産の2党では徹底しているようである。

次に、この保守・革新あわせて200名のサンプル中、前者19名、後者52名、計71名の候補によって、どのような語が、どのような頻度で表記されたかを示すのが次にかかげる一覧表である。

語		政 党		自 由	民 主	保 守	
				例	例		
地名・人名							
和 語	漢字では書けない語	活 用 語			バラまく	1 1	
		無 活 用 語	擬声語 擬態語	ビクビク	1	ガラリと ハッキリと ビツタリと ズッと トボトボ ホットした パッと	7 8
			その他	ハッタリ(2)	2	ケチ バチンコ ドラ息子(2) ドン底	5 7
	漢字でもかける語	活 用 語		△ソコノウ (書)	1	ゴマカシ(4) 働く者にハゲミを	5 6
		無 活 用 語	動植物名	×イバラの道	1	×イバラの道 ×カジカ(4) ×カエル(2)	7 8
			道具名			×クツワを並べて	1 1
			食物名			×コンニャク	1 1
そ の 他	△カラ廻り	1	乱斗×ドロ仕合 平和攻勢の×ワナ 疑獄に×フタ	3 4			
漢 語			×ヘキ頭	1	× バカ ×ビョウたる日本 清新×ハツラツたる 戦禍×サンタン	4 5	
				7			

右	社	左	社
例		例	
		ホヅミ (穂積) 「みんな ヨシタ が悪いのよ」	2
デッチあげ	1	バレる バラマク	2
ホクホク	1	キチン キチンと ウンと税を ビシ ビシ ゴッソリ クタ クタ	5
		タダで 汚職のカラクリ キット ハッター ニベもなく オモチャ	7
ゴマカされる	1	×ダマシ ゴマカシ(2) △コワばらせて ミニクイ ヨゴれる ×ツグナウ	7
×ボーフラ	1	×カラス(2) ×イバラの道 ×ハエ(2) ×トウモロ コシ	6
		モノサシ	1
×ヒモであやつる		ネダン(3) △サカナ 吉田政府のアトツギ	
×チョンマゲ軍備	5	×ボタ餅 メス、オス △カラ人気 △カラ宣伝	18
×コブ		×カギ カネ クビ切り	
×アグラ		ヤミの軍備(3) ×ヤミの金融	
×ズサンな		× ワイロ(5) ×ゼイタク品	
×ケンカ腰	2	×アイマイな ×サイの川原 ×ゴウマンの カン違い	17
		× 骨のズイ 誰がなるかというダンになると	
		×ケンカ(3) テン倒 × 一家ダンラン	
	11		65

語		政 党		共 産		例												
		地 名・人 名																
和	漢字では書けない語	活 用 語																
		無 活 用 語	擬声語 擬態語	バラ バラな	キッパリ	ホットした	3											
			その他	チャチ	ボロ儲け	ハッキリ	3											
語	漢字でもかける語	活 用 語		×ダマオ	ヤトイ兵(2)	×モウケ	ゴマかす	ゴマカシ政治(2)	マシな	ゴマ化し(5)	△ハネアガリの考え	14						
		無 活 用 語	動植物名	×アワビ	×ミカン	ナタネ	3											
			道具名	×ナベ	×カマ	2												
			食物名	×スルメ	1													
			その他	△オカズ	×ニセ(3)	くさいものに	×フタ	メチャクチャ	×ウソ(2)	シケ	タマゴ	×カジのない船	マユ	×ヤミ	小作	×ヒビ	×ヒモつき	×アワ
他	×シワ寄せ(2)	アカ(赤)	×カンヅメ	手に	×タロができる													
漢 語				×ギマン	ビンボウ(2)	ホ償	×ボウ大な	ギセイ(3)										
		フ役キフ	カンゴク	ギゴク	×ドレイ(2)	カンゲイする	権利ヨーゴ	財バツ	軍国主ギ	×ムダな再軍備	フカ金	×ワイロ	×コウ留	原子バクダン	キフ	バクロ(3)	人権×ジユウリン	34
				原バク基地(2)	自エイ	×シャニムニ												
							81											

勞 農		革 新	計
例			
		2	2
		3	4
		9	17
		10	17
汚職に×タダれ切った	ゴマカシ	2	24
		10	18
×クワの手を休め		1	4
		1	2
×ヤミ米		1	47
×ラチあかん ×ゼイタク品 × 植民地的ダイハイ文化(2) × センエツ	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> ×……表外漢字 △……音訓表外の読みをする漢字 ()……頻度数 </div>	5	56
		9	166
			207

この一覧表から言えることは、

(1) かたかなによる表記は、保守よりも革新系の候補が好んで使うようである。延べ語数において、保守41・革新166の数字を示し、前者は後者の $\frac{1}{4}$ に過ぎない。特に共産党はこの傾向が強く、革新100人のサンプル中、共産党の占めるサンプルは27人、革新全体の $\frac{1}{4}$ 強に過ぎないが、かたかな表記は革新全体の $\frac{1}{2}$ を占める。

(2) 漢字では書けない語（活用語・無活用語としての擬声語擬態語・その他）のかたかな表記は、保守も革新も大して差はない。

	保 守	革 新	計
活 用 語	1	3	4
擬声・擬態語	8	9	17
そ の 他	7	10	17
計	16	22	38

(3) 保守と革新との差異をはっきり見せるのは、漢字でも書ける和語（活用語および無活用語としての動植物名・道具名・食物名・その他）と漢語の部分である。漢語のかたかな表記は、保守5・革新56と著しい差異を見せており、漢字でも書ける和語の面でも、保守20・革新87とこれまた革新が保守よりも4倍以上も多い。

(4) 漢字でも書ける和語と漢語のかたかな表記を、当用漢字表・同音訓表と関係させて見ると、保守の場合は、ハゲミ・バカのバ（馬）および従来あて字と考えられてきたゴマカシを除いた他のすべてのものが、当用漢字表にはない漢字、およびあっても音訓表にはのっていないものである。これに反して、革新の場合は当用漢字表にもっているし、音訓表にもっている、従ってそれから何の制約もうけていないことばまでが、ことさらにかたかなで表記されている。このような表記は人名もまぜて、革新全体で延べ51に達している。

（右社0・左社16・共産31・労農4）それは革新全体のかたかな表記の30パーセントを占めている。このことは注意すべきことであると思う。

E. 個条書き・流し書き・問答体

公報文章全体を通じて見られた文章の個条書き・流し書き・問答体という三つの書き方を、同じくその読みやすさを規定する一つの要因と考えて、調査した結果は次のとおりである。

	個条書き		流し書き		問答体		計
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数
民 主	242	84.3	41	14.3	4	1.4	287
自 由	195	79.3	49	19.9	2	0.8	246
右 社	109	88.6	12	9.8	2	1.6	123
左 社	99	81.8	17	14.0	5	4.1	121
共 産	69	17.1	28	28.9	0	0.0	97
労 農	16	94.1	1	5.9	0	0.0	17
保 守	436	81.8	91	17.1	6	1.1	533
革 新	293	81.8	58	16.2	7	2.0	358
諸 派	23	69.7	9	27.3	1	3.0	33
無 所 属	96	77.4	26	21.0	2	1.6	124
計	849	81.0	183	17.5	16	1.5	1,048

(注) 流し書きとは、普通の書き流した文章をいう。
問答体とは、立候補者と有権者との間にかわされた問答の形で記述されている文章をいう。

F. ～である調・～です・ます調

文章全体の調子として、～である調・～です・ます調がどのようになっているかを調べて見た。結果は次のとおりである。

	～である調		～です・ます調		計
	実数	比率	実数	比率	実数
民 主	36	12.5	251	87.5	287
自 由	38	15.4	208	84.6	246
右 社	8	6.5	115	93.5	123
左 社	9	7.4	112	92.6	121
共 産	8	8.2	89	91.8	97

		～である調		～です・ます調		計
		実数	比率	実数	比率	実数
労	農	2	11.8	15	88.2	17
諸	派	5	15.2	28	84.8	33
無	所 属	23	18.5	101	81.5	124
保	守	74	13.9	459	86.1	533
革	新	27	7.5	331	92.5	358
計		129	12.3	919	87.7	1,048

G. ルビ

同じく読みやすさを規定する条件の一つとしてルビの有無（姓名を除く部分について）を調査した。その結果は次のとおり，ルビをつけたものは非常に少ない。

		ルビあり		ルビなし		計
		実数	比率	実数	比率	実数
民	主	3	1.0	284	99.0	287
自	由	5	2.0	241	98.0	246
右	社	2	1.6	121	98.4	123
左	社	0	0.0	121	100.0	121
共	産	3	3.1	94	96.9	97
労	農	0	0.0	17	100.0	17
諸	派	0	0.0	33	100.0	33
無	所 属	2	1.6	122	98.4	124
保	守	8	1.5	525	98.5	533
革	新	5	1.4	353	98.6	358
計		15	1.4	1033	98.6	1048

H. 姓名の表記

選挙における候補者の活動は，自分の姓名を有権者の脳裏にいかにしたた

き込むかということにつきる点がかなり強い。街頭における運動員のあの騒々しい連呼行為はその典型的な例である。それゆえ、候補者はどうすれば自分の姓名が一般有権者にとって読みやすく、覚えやすく、書きやすいかということに深い注意と関心とを払うだろうということは当然推測される。

1,048名の全立補者について、その点を調査してみると、全体の82.3パーセントにあたる863人の候補が自分の姓名にルビをつけたり、その一部または全部をかな書きにしていることがわかった。そしてこのことは政党別についても大して差異がなかった。(保守は81.6パーセント、革新は84.9パーセントである。)

大部分は、鳩山一郎はとやまいちろう または 寺田武雄テラノタケヲのように、姓名の全部にルビをふったものであるが、ひらがなによるルビが、かたかなによるルビよりもはるかに多いこともわかった。前者が70.3パーセント、後者は11.5パーセントである。中には 椎名隆しいな たかし (千葉二区, 民主党) や 安平鹿一やすひらしかいち (愛媛二区, 左派社会党) のように、ひらがなとかたかなで二重にルビをふった人もあった。保守系の人によく、全部で21人(4パーセント)、革新系の人には少なく、全部で3人(1パーセント)しかいなかった。

清水 浄しみづ きよし (茨城三区, 民主党) 高山政夫たかやまさお (山形二区, 自由党) のように、歴史的かなづかいによってルビをつけた人は非常に少ないこともわかった。全部で33名だけだった。

このように姓名の全体にルビをつけたのに対し、奥村鉄三オクムラテツ (愛知一区, 民主党) 佐藤観次郎さとうかん (愛知二区, 左派社会党) のように特殊な省略に従ったルビもあった。

姓名のいずれかを省略して、柳谷清三郎ヤナギキミ (秋田一区, 民主党) 神戸 真かたがは (愛知二区, 民主党) のようにルビをつけたものも、全部で12名ほどあった。

またむずかしい漢字をさけて姓名の一部もしくは全部をかな書きにした候補も全部で17名もあった。

(例) 民主党 宮沢タネオみやざわたねお (長野二区) サツマ雄次ベツケ (福井) 別城 イー (大阪二区)

右派社会党 中島 ガン (長野三区)

左派社会党 おおしげ お 大柴しげ夫 (東京二区)
 共産党 みやもと 宮本けんじ (東京一区) よしだ 吉田すけはる (東京六区) おおの 大野み
 つる (東京七区) たかひら 高橋まさし (鹿児島一区) いづみ 飯屋まさか
 (鹿児島二区)
 無所属 むのたけし 武野 武治 (秋田二区) むらひろし かし村広史 (東京一区) かくし
 勇三郎 (東京六区)

最後に、下の例のように歴史的かなづかいかでも現代かなづかいかでもない特殊なかなづかいによってルビをつけた候補者が見うけられた。表記法そのものが誤りであるとかないとかの問題よりも、自分の姓名を読みやすく、書きやすく、覚えやすいように表記するには、どのようにすればよいかという問題に直面した場合、あえてこのような表記法に従う候補者も少なからずいるという事実に注目したい。

自由党 たじまごーぼん 田島好文 (愛知一区) いくたごをいち 生田宏一 (徳島) えとおなつを 江藤夏雄 (佐賀) カハノ 川野
カヘマン 芳満 (宮崎一区) ながの せい一 長野清一 (鹿児島一区)
 右派社会党 たかはしとくじろー 高橋徳次郎 (群馬二区)
 無所属 ナコーワイ 中河西仁兵衛 (福島二区) ごとおちいち 後藤帰一 (東京六区) まつい ふきゆー 松井不朽 (愛知一
 区) まつおかさんじ 松岡賛城 (大阪四区) 一井一イ 市井栄作 (京都二区)
イタイエイサク

(渡 辺)

明治時代語の調査研究

A. 目 的

この調査は、明治時代語調査研究の資料として選ばれた郵便報知新聞の明治10年(1877)11月から明治11年(1878)10月までの1年分について、語彙、表記、文体、助詞・助動詞の用法等にわたってその実態を記述しようとするものである。

この調査は、現代語の歴史的背景を明らかにするためにとりあげられたものであって、現代語の形成期であった明治10年代の書きことばの実態を明らかにすることにより、現在われわれの直面している国語問題解決の有力なる一資料を提供することを究極の目的とするものである。

明治10年代の新聞を資料として明治時代語の調査を開始した理由は次のとおりである。

明治10年という年は、維新後10年の歳月を経過しているが、明治政府が基礎をかためて、はじめてその性格を発揮することができるようになった年だと言われている。すなわち、西南の役の終結したのは、その年の9月25日であったが、維新後最大の内乱が鎮定された結果、もはや大規模な内戦の憂いもなくなったので、政府は安んじて国内の施政に専念できるようになり、人心もまた安定するに至ったということである。10年一句切りというが、明治10年という年は、いろいろの意味で注目すべき時期である。江戸言葉をそのままひきついで明治初期の東京語が、こんとんとした当時の世相と同様にはげしく動揺しながら独自のものを形成しつつあったのもこの時期であった。明治10年代は現代語の形成期として大切な時期である。また、近代文学史上、最初に言文一致体を採用した二葉亭四迷の「浮雲」があらわれたのは、明治20年のことであった。明治維新と10年代と「浮雲」の出現した20年とは偶然ながら10年の間隔をおいているのであるが、そういった観点からも10年という年代は注目すべ時期である。

以上がこの調査において明治10年という年代を選んだ理由である。

次に新聞を資料として採用した理由は、(1)新聞は、当時多数の日本人の目に触れた刊行物であった。もちろん、現代の新聞とは比較にならないが、当時としては相当広い範囲の読者をもっていたものと考えられる。(2)新聞記事は、社会生活の各方面から取材されるものであるゆえ、資料としての片寄りをさけることができる。(3)郵便報知新聞をはじめとして、明治10年代の東京における有力新聞は、おおむね、創刊時代より5,6年の経験を積んでおり、体裁内容ともに充実した紙面になっていて、指導的権威をもっていたことなどによる。

B. 担 当 者

この仕事は、資料調査室の一つの分担業務として始めたのであるが、昭和30年10月、第3部の近代語研究室の新設が認められたので、以後、近代語研究室がこれを引きついで調査を行うことになった。

山田 巖(10月1日から参加) 村尾 力 広 浜 文 雄
市川 孝 進 藤 咲 子

なお、標本抽出についての設計等、統計学上の扱いについて、所員水谷静夫の協力を求めた。

C. 資 料

明治10年代の郵便報知新聞を資料に選んだことについては、当時の新聞界の情勢をかえりみる必要がある。日本人に未経験であった新聞というものが、はじめて刊行されたのは、すでに幕末の頃であったことはよく知られているところである。そして最初の日刊新聞が発行されたのは、明治3年12月12日に創刊号を出した横浜毎日新聞であった。明治7,8年頃に東京で一流新聞の声望をかちえた東京日日新聞、日新真事誌、郵便報知新聞は明治5年にあいついで創刊されている。創刊当初は発行部数も少なく、郵便報知などは木版刷で体裁も冊子型月5回の発行であり、今日の新聞の姿からはほど遠いものであった。し

かるに、征韓論がやぶれて退官した副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平らによって明治7年1月民選議院設立の建白書が太政官に提出された頃から自由民権論が新聞紙上にとりあげられ、世論をいたく刺激し、ついで明治8年6月新聞条例及び讒謗律が公布せられた結果、諸新聞は一斉にこの新律を攻撃して読者の関心をひき、新聞が世人の注目をあびることになった。また時事の報道が新聞の重要な使命であることを認められたのもこの頃であって、まだ出発点にあった7、8年頃のわが新聞界の発展に寄与するところが大きかった。その原因をなしたものは、7年2月の佐賀の乱、同4月の台湾征討、8年9月の江華島事件などである。

俗語平話をモットーにやや低い読者層を相手に発刊された読売新聞は明治7年11月2日に隔日発行で創刊号を200部刷ったに過ぎないが、8年5月1日からは日刊となり、10,000部の発行部数となって、諸新聞中第1位の部数を誇るに至っている。そして明治10年には年間の総発行部数6,189,000部となり、一日平均約20,600部という異常な発展ぶりを示している（読売新聞八十年史参照）。

明治10年代で自他ともに東京の三大新聞と認めていた東京日日新聞、郵便報知新聞、朝野新聞（日新真事誌は9年に廃刊となり、朝野がその位置を占めた）なども読売ほどではないにせよ、大なり小なり読者数を増加していることは、諸種の統計が示すところである。このような読者層の拡大は、新聞が報道機関として欠くべからざるものと認められるに至ったからである。新聞の紙面の改良を見ても、わずか5、6年の間にずいぶん進んでいる。たとえば、郵便報知を例にとってみると、最初木版刷のものが、6年6月には活字を使用して一枚刷となり、字数を3,120字と定めているが、同年10月には380字を増加して、3,500字となった。7年5月には4号活字を廃して5号活字を採用し、字数が7,590字となった。8年4月には紙面を拡張して字数を290字増加し7,880字となった。更に10年1月には字数を大増加して19,676字となっている（この項、小池洋二郎、日本新聞歴史による）。このように新聞紙面の改良のあとをた

どってみても10年代の新聞が形式的にも相当発達した段階にあったことがわかる。事実、明治初期の新聞が形式内容ともに整備されたのはこの10年代であったと認められており、新聞経営もその基礎をかためて、一つの事業として成り立ちうる見通しがもたれるようになったのもこの時代であったと言われている。

10年に東京で発行されていた主要な新聞は、前記の日日、郵便報知、朝野のほか、曙新聞、読売新聞、東京絵入新聞、かなよみ新聞の4新聞がある。日日、郵便報知、朝野、曙は体裁の上から見ると、現在の新聞よりやや小さい程度の大型のもの1枚4頁であり、読売、絵入、かなよみはタブロイドよりもやや小型のもの1枚4頁である。前者を大新聞^{おおしんぶん}と言い、後者を小新聞^{こしんぶん}と呼んでいたことはよく知られているところ、この命名は型の大小から来たという説もあるが、新聞の権威や品位から来たものという説もある。この2種類の新聞は種々の点で相違があったが、その主な点を記すと、大新聞^{おおしんぶん}の読者は主として知識階級であり、小新聞のそれは主として町人層、芸能人、婦女子であったと言われている。文章はもちろん、扱う記事内容にも相違が見られた。大新聞は雑報欄以外は、おおむねルビなしの漢文書き下し文体で片仮名を用い、雑報欄は平仮名を用い、漢字にはバラルビがついており、口語体が主として用いられている。これに対して小新聞は平仮名まじりの口語体で総ルビ付きであった。大新聞は政論新聞と呼ばれていたように、政治や時事問題に関する社説、投書が読者に歓迎せられたのであり、新聞社側もそれらの欄を重視したのに対して、小新聞は社会雑報欄に中心をおき、新聞によっては芸能花柳種に力をそそぐものもあった。記者も大新聞は主として漢学洋学の素養のある者が多く（もっとも大新聞でも雑報欄は戯作者あがりの記者が担当することが多かった）、小新聞は国学者、戯作者出身の記者が多かった。

このように大新聞と小新聞とは、体裁内容ともかなり相違が見られるのであるが、当時書きことばとして普通に用いられていた種々の文章は、大新聞に見られるのであって、その点語彙の上にも文体の上にも小新聞には片寄りが見

られる。漢文書き下し文体の文章が書きことばとして権威を有していた当時において、その種類の文章をほとんど含んでいない小新聞よりは大新聞の方がわれわれの調査の資料として適当なものと考えられる。また、大新聞は紙面の大きさから考えてもわかるように、その所収語彙は小新聞の約2倍にのぼるものと思われるが、大新聞の雑報欄の文章は、小新聞の文章と同様、いわゆる俗文体であり、俗語も多く含まれており、小新聞の用語、文体の特徴も大新聞の雑報欄によってえられるものと思われる。これも大新聞を資料に選んだ一つの理由である。資料として選んだ郵便報知新聞は、言うまでもなく大新聞と呼ばれたものに属するが、この新聞には、いろいろな文章が見られる。公布、録事は候文体、社説は漢文書き下し文体、雑報は俗文体が中心になっている。もちろん、これだけであらゆる文体が網羅されているとは言えないにしても、代表的なものは含まれていると思われる。

郵便報知新聞は、当時、東京日日新聞とならんで東京における代表的な有力紙であった。このことは、明治10年に発行された二三の新聞雑誌番付表を見ても常に日日と共に東西の第1位を占めていることによっても証明される。教養のある階層を読者にもった権威ある新聞と考えてさしつかえないであろう。

なお、明治初期のこの種の新聞は現在では残っているものが非常に少ないのであるが、幸い研究所で入手することができたので、種々の点で便利である。

以上が郵便報知を資料として採用した諸理由であるが、明治10年11月から11年10月までの1年間の新聞をとったのは、西南の役が起ったのは10年2月15日、終結は同9月25日であって、新聞記事にあらわれる語彙が戦争関係のものに片寄るといふ恐れがあるので、それを避けるためであることを付言しておきたい。

郵便報知の明治10年11年頃の発行部数はどのくらいあったか参考のために記しておくが、統計表によって相違があるので正確な部数はわからないが（最高1日8,000部とあるのが多いけれども）、最小の部数を示している読売新聞八十年史に引用している上野図書館蔵の東京府統計表によれば、明治10年は年

間 2,070,000 部で 1 日平均約 6,900 部（当時、日曜祭日は休刊で、1 年の刊行日を約 300 日と見て、総発行部数をそれで除すればよい）、11 年は年間 2,119,000 部で 1 日平均約 7,060 部ということになる。今日の大量生産せられる新聞の発行部数に較べると、まことに隔世の感があるが、郵便報知は 7,000 部から 9,000 部の発行部数を 15 年頃まで続けており、明治 21 年東京発行の新聞中、発行部数第 1 位にのぼった時も 22,000 部に過ぎないのであるから、6,900 部あるいは 8,000 部という部数も当時としては相当な部数であったのだろう（読売新聞は明治 21 年には 1 日の発行部数約 13,500 部で 4 位に落ちている）。当時の新聞の普及度をおる人は現在のテレビの普及率をもってたとえたが、そんなものかも知れない。この問題を考えるには当時の日本人の読書能力や経済力を考慮に入れる必要があろう。郵便報知は当時 1 部 3 銭で、米 1 升 5 銭であった。

D. 調査の方法

標本調査法をとった。前述のとおり、各種の文章が欄という枠にはまっているので、そのことも考えて以下のような層別による抽出を行った。

(1) 層別

文体の違いと記事内容の違いとを合せ考え、層別が簡単にできることも考えて以下の 5 層に分けた。結果としては、いわゆる欄によって分けることになった。

- a 層 公布・公開・録事（官庁からの公示事項）
- b 層 社説
- c 層 雑報（府下、西京、大阪、諸県に分かれている）
- d 層 外国通信記事
- e 層 雑（投書、論説その他）

このうち c, d, e は文章の違いというよりも、記事内容の違いによるものである。特に e には、投書という性格からも想像できるように、各種

の文体が含まれているわけである。

(2) 調査単位

われわれの作成する語彙表には、異なり語を全部載せる予定であるから、当然異なり語の数が多く出るような調査単位を選ばなければならない。

そこで、第二研究室が行った「婦人雑誌の用語」の「 α 単位」(「婦人雑誌の用語」19頁以下参照)を基準とした。もっとも、これは現代語の調査のために作られたものであるから、そのすべてをそのまま採用するわけにいかず、一部修正した。

(3) 抽出

われわれに許されている時間と予算とを考え合せて、操作できるカード数(1調査単位にカード1枚)の上限を10万枚と見積った。

抽出単位は語彙の種類を豊富にしたいという考えから、紙面の面積によらず、行をえらび、各層ごとに抽出することにした。これは面積によるよりも行による抽出の方が、異なり語が多く出るからである。

そこで、母集団から行を単位として抽出し、抽出した総行の中に予定している10万の調査単位が含まれていればよいことになる。パイロットサーヴェイの結果得た母集団の総行数と、行平均の調査単位数とから、抽出比を12.33と算出した。すなわち、各層別に、12行おきに1行ずつ抽出すればわれわれが調査しようとする10万調査単位を得ることができるわけである。

E. 作業の経過

(1) 準原本の作成

原本である新聞は貴重品扱いであり、しかも研究所にはただ1部しかないため、書き込みなどの作業のために必要な事項の指示ができないので、写真で $\frac{1}{2}$ に縮写してそれを準原本とした。

(2) 抽出

層ごとに全行数を勘定して、これを標本台帳とする。その台帳をもとにして採集箇所を記録すると同時に、準原本に印をつけた。

(3) カード採集

決定した採集箇所(行)をわれわれのきめた調査単位に分割して採集者に渡すという手続をふんだ。

カード採集は常時2名の臨時筆生と夏期・学年末の休暇に学生補助者4名あるいは5名ずつ委嘱して行った。

採集項目は次のとおりである。

見出し語 用例 出所(台帳番号 標本番号など)

F. 成果および次年度

この調査の基礎となるカード採集は、前述のとおり、10万枚を予定しているが、本年度内にはカード6万枚を採集し、それに点検と補正を加えたのみで終わった。

次年度においては、引続き4万枚のカード採集を完了した後、各種語彙表の作成、助詞助動詞の分析、語構造の分析、表記に関する研究、層別による総合的研究などの完成を予定している。

(山田)

音声史資料の収集と整理

本年度は上記の研究題目について、声明と催馬楽および朗詠の録音をした。

(1) 声明

現在までその伝統を持ち続けている声明の中でも、古い歴史を持っている高野山系統（南山進流）の声明をテープに録音した。当流の中で実際家であると同時に研究者としても著名な岩原諦信師を、岡山県勝田郡勝北町大吉の五穀寺に訪ねて、師の唱えるところを直接録音することができた。

曲は、四座講式の中から、「涅槃講和讃」・「羅漢講和讃」・「遺跡講和讃」の3曲である。

曲の選定にあたっては、和讃であることと、古い時代の発音を忠実に伝えていること、の2点を条件として考えた。この3曲は特に、アクセントの型を崩すことなく節付がしてある点が特徴であると言えよう。その他細部についての検討はまだ行っていない。

(2) 催馬楽・朗詠

代々家の伝統としてその伝授を受けて来た大塚実忠氏を、京都市北区堀ノ内宝鏡寺に訪ねて、下記の曲を録音した。

催馬楽

席田（律旋・呂旋）・如何為（律旋・呂旋）

朗詠

徳是・曉梁王

これらの曲の選定に当たっても、音楽としての見方からではなくて、当時のよみくせを残していると考えられる曲を選んだ。これについての検討はまだ行っていない。

以上の担当者は岩淵悦太郎・広浜文雄・市川孝である。

（広 浜）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行った。

I 刊行書の調査

国語学・国語問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典などの新刊書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化した336点(1955年1月～12月)の分類目録を作った。

この目録は、下記の雑誌論文、および新聞記事の目録とともに、当研究所編「国語年鑑」(昭和31年版)に掲載された。

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌、ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの逐次刊行物から、関係論文を調査し、題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数、およびページ数などを記載したカード3通を作り、分類別・雑誌別・筆者別のカード目録を作った。採録した論文の総数は2,070点(1955年1月～12月)で、調査した雑誌・紀要の類は下記のとおりである。

A 雑誌の類

(1) 大学関係出版誌

国語 (東京教育大学)	国語研究 (国学院大学)
国語国文 (京都大学)	国語と国文学 (東京大学)
国学院雑誌 (国学院大学)	方言研究 (駒沢大学)
国文 (お茶の水大学)	国文学 (関西大学)
国文学叢 (広島大学)	国文研究 (愛媛大学)
語文 (大阪大学)	語文研究 (九州大学)

- 女子大 国文 (京都女子大学)
 日本文学 (東京女子大学)
 立命館文学 (立命館大学)
 近世文芸 (東京大学図書館)
 中世文芸 (広島大学)
 学苑 (昭和女子大学)
 山辺道 (天理大学)
 教育科学 (新潟大学)
 文化と教育 (静岡大学)
 人文学報 (東京都立大学)
 人文論究 (北海道学芸大学)
 人文社会 (弘前大学)
 英文学思潮 (青山学院大学)
 新聞学評論 (東大新聞研究所)
 経済研究 (成城大学)
- (2) その他の出版誌
- 国語学 (国語学会)
 国語講座 (日本放送協会)
 言語生活 (筑摩書房)
 ことばのしおり (毎日新聞社)
 解釈と鑑賞 (至文堂)
 万葉 (万葉学会)
 ことば (朝日新聞社)
 放送文化 (日本放送協会)
 Romazi Sekai (日本ローマ字会)
 カナノヒカリ (カナモジカイ)
 三重県方言 (三重県方言学会)
 和歌山方言 (和歌山方言学会)
 民間伝承 (民間伝承刊行会)
 語学教育 (語学教育研究所)
- 女子大文学 (大阪女子大学)
 文学研究 (九州大学)
 文学論輯 (九州大学分校)
 成城文芸 (成城大学)
 日本文芸研究 (関西学院大学)
 不知火 (熊本大学)
 文芸と思想 (福岡女子大学)
 教育研究 (東京教育大付小)
 人文 (京都大学)
 人文論究 (関西学院大学)
 人文研究 (大阪市立大学)
 中国語学 (早稲田大学)
 日本文化 (天理大学)
 経済研究 (一橋大学)
- 国語研究 (愛媛国語研究会)
 言語研究 (日本言語学会)
 ことば (日本語術ロータリー)
 解釈 (解釈学会)
 音声学会会報 (日本音声学会)
 万葉研究 (万葉三水会)
 文研月報 (日本放送協会)
 民間放送 (日本民間放送連盟)
 Romazi no Nippon (ローマ字教育会)
 近畿方言 (和歌山近畿方言学会)
 山形方言 (山形県方言研究会)
 日本民俗学 (日本民俗学会)
 民族学研究 (日本民族学協会)
 国語教室 (国語教室友の会)

- 国語教室(大修館)
 ことばの教育(ローマ字教育会)
 実践国語(実践国語編修所)
 カリキュラム(誠文堂新光社)
 教育技術(小学館)
 小二教育技術(小学館)
 小四教育技術(小学館)
 小六教育技術(〃)
 中学社会科(〃)
 教育手帖(日本書籍kk)
 教育文化(教育文化研究会)
 信濃教育(信濃教育会)
 中等教育資料(文部省中等教育課)
 山形教育(山形県教育研究所)
 教育心理(日本文化科学社)
 児童心理(金子書房)
- 輩(輩会)
 心(平凡社)
 思想の科学(講談社)
 新論(新論社)
 世界と日本(国際日本協会)
 中央公論(中央公論社)
 文芸春秋(文芸春秋新社)
 理想(理想社)
 人生手帖(文理書院)
 ニュースレター(日本ユネスコ国内委員会)
- 週刊朝日(朝日新聞社)
 週刊読売(読売新聞社)
 近代文学(近代文学社)
- 国語教室(高等)(大修館)
 作文教育(作文の会)
 新しい教室(中教出版kk)
 教育(国土社)
 小一教育技術(小学館)
 小三教育技術(小学館)
 小五教育技術(〃)
 中学国語科(〃)
 幼児と保育(〃)
 教育統計(文部省統計課)
 京都の教育(京都市教育委員会)
 初等教育資料(文部省初等教育課)
 日本の教育(新日本教育学会)
 治療教育研究集録(光風出版)
 教育心理学研究(日本教育心理学協会)
 青年心理(金子書房)
- 改造(改造社)
 思想(岩波書店)
 新潮(新潮社)
 世界(岩波書店)
 知性(河出書房)
 日本及日本人(日本新聞社)
 平和(大月書店)
 学閥評論(学閥評論社)
 ニューエイジ(ニューエイジ社)
- サンデー毎日(毎日新聞社)
 週刊サンケイ(産経新聞社)
 新日本文学(新日本文学会)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 日本文学(日本文学協会, 未来社) | 文学(岩波書店) |
| 文学界(文芸春秋新社) | 文学研究(文学研究会) |
| 漢文学(福井漢文学会) | 群像(講談社) |
| 詩世紀(詩世紀の会) | 明日香路(明日香路社) |
| 短歌研究(日本短歌社) | 俳句(角川書店) |
| 文芸研究(日本文芸研究会) | 文芸首都(文芸首都社) |
| 芸術新潮(新潮社) | 主婦の友(主婦の友社) |
| 婦人公論(中央公論社) | 婦人生活(同志社) |
| 婦人之友(婦人之友社) | 暮しの手帖(暮しの手帖社) |
| 電通広告論誌(電通) | 印刷雑誌(印刷学会) |
| 国際電信電話(国際電信電話kk) | 信濃(信濃郷土研究会) |
| 社会学評論(日本社会学会) | 中央タイピスト通信(中央通信社) |
| リーダーズダイジェスト(同日本支社) | アメリカーナ(米国大使館文化交換局) |
| 学術月報(日本学術振興会) | 文部時報(文部省調査局) |
| 文部統計速報(文部省調査局) | 図書(岩波書店) |
| ビブリア(天理大学図書館) | Books(Booksの会) |
| 学鏡(丸善kk) | 出版ニュース(出版ニュース社) |

B 紀要・報告の類

(1) 紀要

- 愛知県教育文化研究所研究紀要 愛知女子短期大学紀要 跡見学園国語科紀要
 茨城大学文理学部紀要 宇和島教育研究所紀要 大阪学芸大学紀要(人文科学)
 大阪市教育研究所教育研究紀要 岡山大学法文学部学術紀要 お茶の水女子大学
 人文科学紀要 鹿児島大学教育研究所研究紀要 鹿児島大学文理学部研究紀要
 神奈川県教育研究所研究紀要 京都大学教育学部研究紀要 熊本女子大学学術紀
 要 群馬大学紀要 駒沢大学研究紀要 国立教育研究所紀要 千葉大学文理
 学部紀要 中央大学文学部紀要 東京教育大学教育学部紀要 東京女子大学比
 較文化研究所紀要 東京大学教養学部人文科学科紀要 東京大学新聞研究所紀要
 桐朋女子学園紀要 東洋文化研究所紀要 徳島大学学芸学部紀要 富山大学文

理学部文学紀要 名古屋大学教育学部紀要 奈良学芸大学紀要 日本女子大学
 紀要 日本大学世田谷教養部紀要 広島女子短期大学研究紀要 広島大学文学
 部紀要 福井大学学芸学部紀要 福岡学芸大学紀要 福岡学芸大学久留米分校
 研究紀要 武庫川学院女子大学紀要 北海道立教育研究所紀要 三重大学教育
 研究所研究紀要 明治大学人文科学研究所紀要 横浜市立教育研究所研究紀要
 和歌山大学学芸学部紀要

(2) 年報・所報・学報

同志社女子大学学術研究年報 東北大学文学部研究年報 三重県立大学研究年報
 文部省第79年報 京都大学人文科学研究所所報 国立教育研究所所報 兵庫県
 立教育研究所所報 愛知学芸大学国語国文学報 大谷大学大谷学報 京都学芸
 大学学報 京都大学文学部中国文学報 天理大学学報

(3) 論集・論叢・論文集

宇都宮大学学芸学部研究論集 甲南大学文学会論集 神戸女学院大学論集 鳥
 根大学論集(人文科学) 信州大学教育学部研究論集 東京外国語大学論集
 東京教育大学社会科学論集 東京女子大学論集 東京大学教育学部東大付属論集
 名古屋大学文学部研究論集 福島大学学芸学部論集 竜谷大学論集 熊本大学
 法文論叢 神戸市外国語大学神戸大論叢 神戸大学国文論叢 聖心女子大学
 論叢 山口大学教育学部研究論叢 竜谷大学国文学論叢 佐賀大学教育学部研
 究論文集

(4) その他報告類

香川県教育研究所教育研究 香川大学学芸学部研究報告 岐阜大学学芸学部研究
 報告 京都西京大学学術報告「人文」 京都市教育研究所研究月報 京都府教
 育研究所教育研究 神戸大学教育学部研究集録 神戸大学文学会「研究」 国
 際基督教大学教育研究所教育研究 駒沢大学東洋学会東洋学研究 静岡大学文理
 学部研究報告 統計数理研究所彙報 徳島県教育庁教育月報 徳島大学国語教
 育の研究 鳥取大学学芸学部研究報告 山口大学文学会誌 山梨大学学芸学部
 研究報告 早稲田大学教育学部学術研究

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、その整理に当たるとともに、分類別

および日付順のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語（欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜に題名をつけた。）・紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。調査した紙名と記事の点数は次の通りである。

(1) 東京出版（日刊） 朝日 毎日 読売 東京 東京タイムズ 産経時事 日本経済

（夕刊） 朝日 毎日 読売 東京 産経時事 日本経済

(2) 地方出版 中部日本 同（夕刊）

なお大阪在住の山田房一氏から、関係記事のあるごとに、恵送された京阪地方の諸紙

(3) 特殊新聞 読書 図書 読書タイムズ 新聞協会報その他

1955年（1月～12月）の切抜数 1,395点。

（高橋・有賀）

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動に必要なと思われる研究書・参考書・調査資料・文献の類を収集し管理した。収集の方針、整理の方法等、すべて従来通りである。

各方面からの寄贈図書も従来と大差なく、当所書庫の充実に大きな役割を果たしている。

本30年度に備えた図書数は次の通りである。

単行本	購入	917冊
	寄贈	180冊
雑誌	購入	1,586冊（73種）
	寄贈	907冊（269種）
新聞	購入	15種
	寄贈	3種

本年度末現在の蔵書数（単行本）は 20,905冊である。

研究所には、開所以来特定の書庫がなく、図書の管理には不便をきたしていたのであるが、一ツ橋の現在地に移って30年の初めに、本屋に隣接して星野式不燃書庫(二階建、建坪30坪)が完成し、同年8月末に図書の移転を完了した。

昭和30年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名	図書名
(1) 単行本	()内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。
愛知県教育文化研究所	「鋼鉄の父、本多光太郎博士」(岡田弥市)
石川国語方言学会	「謡開合仮名遣」〔孔版複製〕
石原 忍氏	「あたらしい横がきカナ文字」「横書『新カナ文字』の提唱」
井手 至氏	「国語副詞の史的研究」(二)
井沼 潤之助氏	「国語の学力調査」(日本教職員組合学力調査委員会編)
岩井隆盛氏	「石川方言のアクセント長音・強音」「志賀方言の概観」〔旧福野湯 周辺総合調査報告書〕(石川考古学研究会編)
岩崎通信機kk	「日本語特性資料の調査」Ⅰ・Ⅱ
上村 孝二氏	「奄美大島方言の発音について」
楳垣 実氏	「東条操先生古稀祝賀論文集」(近畿方言学会編)
内田 道夫氏	「校本冥報記・附訳文」
小国町教育委員会	「小国方言集」名詞編, 1. 2. (金 儀右エ門)
大島 義夫氏	「講座日本語」Ⅰ
開国百年記念文化事業会	「明治文化史」1・3・4・10・11「日米文化交渉史」4・5
カリフォルニア大学出版部	「PAPERS FROM THE SYMPOSIUM ON AMERICAN INDIAN LINGUISTICS」
北村 甫氏	「AN EASTERN TIBETAN DICTIONARY AND A STUDY OF THE EASTERN TIBETAN LANGUAGE」(MINORU GŌ)
北山 長雄氏	「南部方言雑葉書、津軽あはがき」
京都市教育研究所	「高等学校の学力調査,(国語・英語)」「創設五年を迎えて」
近畿方言学会	「船場の言葉」(楳垣 実)「奈良県北部方言覚書」(都竹 通年雄)

- 金田一 春彦氏 「講座日本語」Ⅲ 「話しことば新書」2.
- 楠 道隆氏 「ローマ字国字論の立ち場」
- 熊谷 孝氏 「講座日本語」Ⅶ
- 黒坂 勝巳氏 「本校下児童の生活語の考察」
- 剣持 隼一郎氏 「鶴川方言集」(大関 八郎)
- 口語俳句発行所 「穴とですべら」(市川 忠男)
- 国際文化研究所 「朝鮮動乱回顧録」(グイー・ウイント・小野 武雄訳)「民主政
治是か非か」(B・ラッセル・牧野 力訳)
- 国立教育研究所 「全国小・中校児童生徒学力水準調査」
- 国立国会図書館 「国内出版物目録」昭和 29 年定期刊行物「節用集類 仮目録」
(亀田 次郎氏旧蔵)「日本の辞書展示会」「国立国会図書館。参考図
書総合目録」「地方公共団体刊行物目録稿」
- コロンビア大学図書館 「新書目録」(日本:37・38・39・40)
(中華民国:11・12・13)
- 斎藤 義七郎氏 「出羽方言叢書」6
- 佐藤 茂氏 「福井県の言語調査」4
- 三省堂出版 kk 「漢字の学習指導のために」(中等国語編修委員会)
- 児童読物調査研究会 「児童読物の研究」
- 衆・参議院記録部 「国会用語集」第 22 回国会
- 小学館 「全国児童生徒作品コンクール入選作品集, 昭和 29 年度」
- 昭和女子大学 「近代文学研究叢書」1
- 史料館 「史料館所蔵 史料目録」第 4 集
- 新宮市 「新宮市誌」
- 総理府統計局 「昭和 25 年・国勢調査報告」第 5 巻・第 8 巻
- 第一生命保険相互会社 「文書ハンドブック」
- 高羽 五郎氏 「ロザリオの経」翻字篇Ⅰ・Ⅱ「コンテンツズスムンヂ, 原文 1596年
版」「譬喩尽」四
- 筑摩書房 「日本語さまざま」(西尾 実)
- 中教出版 kk 「日本文法, 口語編」(時枝誠記)
- 天理図書館 「宗教都市 天理」(朝日新聞社編)「開館 25 周年記念, 稀観本集」

「中文地志目録」 「CATALOGUE OF SPECIAL BOOKS ON CHRISTIAN MISSIONS VOL II」

- 土居 光知氏 「日本音声の実験的研究」
- 土居 重俊氏 「敬語に関する調査」 (上)
- 東京教育大学 「東京文理科大学閉学記念誌」 (東京文理科大学編) 「紫式部日記用語索引」
- 東京大学教育学部 「東京都内大学図書館等所蔵 教育雑誌総合目録稿」
- 東京大学史料編纂所 「大日本近世史料」 唐通事会所日録一, 肥後藩人畜改帳, 一・二・三・四・五, 「大日本古記録」 梅津政景日記, 三, 上井覚兼日記, 中, 「大日本古文書」 幕末外国関係文書の二十六 家わけ第十七・第十八・第十九, 「大日本史料」 第五編之十六・十七 第七編之十三・第九編之十・第十編之八・第十二編之三十七, 「図書目録」 第一部 和漢書刊行本編 (2, 歴史), 第四部 洋書編
- 東京堂 「国語学辞典」 (国語学会編)
- 東洋文化研究所 「新収図書目録」
- 東洋文庫 「東洋文庫, 収書目録」
- 富山市教育委員会 「富山市児童言語調査, 第五集, 動詞篇」
- 仲田 庸幸氏 「国語教育の原論と実践」
- 中村 通夫氏 「講座日本語」 II
- 日本学術会議 「文学・哲学・史学・文献目録」 I・II・V
- 日本国語教育学会 「国語教育の諸問題」
- 日本生命保険相互会社 「執務必携」
- 日本放送協会 「放送水産用語集」
- 仁平 芳郎氏 「商業放送用語研究」 (ラジオ東京調査局編)
- 野地 潤家氏 「国語教育」
- 原田英雄氏 「広島方言概要」
- 久松幼稚園 「幼稚園児の話しことばの指導」
- 美術研究所 「日本美術年鑑」 1955 年版
- 一橋大学・一橋学会 「一橋大学創立八十周年記念論集」 上・下巻
- 一橋大学経済研究所 「AUTHOR AND SUBJECT INDEXES TO THE AME-

RICAN ECONOMIC REVIEW」

- 平井 秀文氏 「陽明文庫本 遊仙窟・訓読語彙」
- 広戸 惇氏 「岡山県に於けるアクセントの分布」
- 文化放送 「スポット・コマーシャル研究誌, I」 「アメリカ・コマーシャル例集」
- 放送文化研究所 「音のライブラリー・資料リスト」 「放送が児童の言語に与える影響調査報告書」
- 松村 明氏 「江戸語における連母音の音訛」
- 民主日本協会 「信念としての民主主義」 (木村健康) 「ソ連対日外交の分析」 (岡 貢)
- 民俗学研究所 「総合日本民俗語彙」 第一・三巻「日本民俗図録」
- 室谷 幸吉氏 『幼児におけるコトバの発達の調査「読み」「聞き」理解の確かさについて』
- 百瀬 澄雄氏 「国語学習手引きのつくり方あたえ方」
- 森岡 健二氏 「文化変容現象として見た共通語化の問題」
- 文部省 「学術用語集」 船舶工学編, 同 機械用語編, 同 化学編, 同 建築学編
「国語の慣用語」 「ローマ字問題資料集 第1集」 「漢字の学年配当」 「法令用語の改正」 「国語問題問答 第3集」 「外来語の表記」 「漢字学習指導実践学校会議, 昭和29年度」 「研究業績要覧」 1950 「学術雑誌総合目録」 人文科学
欧文編 「統計教育はどう行われているか」 「公立小学校・中学校, 長期欠席児童生徒調査, 昭和29年度」
- 矢野 文博氏 「ミギリ考」 「三重方言に於ける口蓋化音について」
- 矢作 春樹氏 「河北地方の方言」
- 山本修之助氏 「稿本, 佐渡方言集」 (荻野由之)
- 読売新聞社 「読売新聞八十年史」
- 早稲田大学教育学部国語学会 「国語国文学 研究資料総覧」 1955 年版
- 渡辺 綱也氏 「東蒲原郡方言調査報告書, 第一輯」 (東蒲原郡 PTA 連合会, 編)

AMERICAN DIALECT SOCIETY

- „ THE VOCABULARY OF MARBLE PLAYING (KELSIE B. HARDER)
- „ THE POSITION OF THE CHARLESTON DIALECT „ (RAVEN J. MC-DAVID)

「WHIZ MOB」(DAVID W. MAURER)

HARRY H. JOSSELSON

「THE RUSSIAN WORD COUNT」

(2) 逐次刊行物 (おもなもの)

愛知学芸大学国語国文学会 「国語国文学報」4集・5集

愛知県教育文化研究所 「研究紀要」7集・8集

朝日新聞社 「ことば」34号～43号

アジア言語研究会 「Azia Gengo kenkyû」7号・8号

明日香路社 「明日香路」7巻3号～12号・8巻1号～3号

印刷局研究所 「研究所時報」7巻1号～6号・7巻8号～12号, 8巻1号

牛山初男氏 「信濃」7巻9号・10号

宇部宮大学学芸学部 「研究論集」1部4号・5号, 2部4号

大分県教育研究所 「研究報告」7集・8集

大阪市教育研究所 「教育研究紀要」21・22号

大阪市立大学文学会 「人文研究」6巻2号, ～12号, 7巻1号・2号

大阪大学国文学研究室 「語文」14輯～16輯

大谷学会 「大谷学報」34巻4号, 35巻1号～3号

岡山大学 「岡山大学学術紀要」3号・4号

お茶の水女子大学 「人文科学紀要」6号・7号

解釈学会 「解釈」1巻1号～8号・2巻1号～3号

香川大学学芸学部 「香川大学学芸学部研究報告第1部」5号・6号

神奈川県教育研究所 「研究紀要」3号・4号

カナモジカイ 「カナノヒカリ」393～403号

関西学院大学文学会 「人文論究」5巻5号・6号・6巻1号～3号, 6巻5号

関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」6巻2号～4号, 7巻1号～3号

教育技術連盟 「教育技術」10巻1号～14号, 11巻1号「教育技術 幼児と保育」1巻1号～12号, 2巻1号「小一教育技術」9巻1号～14号, 10巻1号「小二教育技術」8巻1号～14号, 9巻1号「小三教育技術」9巻1号～14号, 10巻1号「小四教育技術」8巻1号～14号, 9巻1号「小五教育技術」9巻1号～14号, 10巻1号「小六教育技術」8巻1号～14号, 9巻1号「中

一國語科—教育技術」5卷1号～12号,「中学—社会科—教育技術」7
卷1号～12号「中学—理科—教育技術」5卷1号～12号「中学教育—教育
技術」1卷1号「社会科研究—教育技術」1卷1号

京都学芸大学 「京都学芸大学学报」A6号・7号・B6号・7号

京都大学国文学会 「国語国文」246号～258号

京都大学人文科学研究所 「所報」43号・44号

京都教育委員会 「京都の教育」1号・3号・4号

京都市教育研究所 「研究月報」12号・13号

九州大学国文学会 「語文研究」創刊号～3号

九州文学会 「文学研究」45輯～53輯

訓点語学会 「訓点語と訓点資料」4輯～5輯

甲南大学文学会 「甲南大学文学会論集」2号・3号

神戸市外国語大学 「神戸外大論叢」28号・29号

神戸市教育研究所 「教育研究展望」15号・16号

神戸女学院大学研究所 「論集」4号・2卷1・2・3号

語学教育研究所 「語学教育」228号～231号

国学院大学 「国学院雑誌」55卷4号,56卷1号～5号

国語学会 「国語学」20輯～23輯

国立教育研究所 「国立教育研究所所報」27号・29号「国立教育研究所紀要」6—
IV, 5—IV～VII, 7—I

国立国会図書館 「国際ライブラリアン」1卷1号・2号「国立国会図書館公報」7
卷2号～11号

西京大学 「西京大学学術報告人文」2号・3号・5号・6号

作文の会 「作文教育」9号～20号「小学さくぶん—初級用—」22号～33号「小学作
文—中級用—」22号～33号「小学作文—上級用—」22号～33号「中学作文」
22号～33号

滋賀大学学芸学部 「滋賀大学学芸学部紀要」人文・社会・教育科学・4号・5号
自然科学, 4号・5号

静岡大学教育研究所 「文化と教育」65号～75号

信濃教育会 「信濃教育」820号～831号

- 初等教育研究会 「教育研究」10巻4号～12号・11巻1号～4号
- 昭和女子大学光葉会 「学苑」175号～188号
- 成城大学文芸学部 「成城文芸」3号～6号
- 誠文堂新光社 「カリキュラム」76号～80号
- 大修館 「国語教室」42号～52号
- 中央大学文学部 「大学部紀要」1号・2号
- 中国語学研究会 「中国語学」36号～42号・44号～48号
- 中国語友の会 「中国語文」34号～42号
- 電通 「電通広告論誌」Ⅲ号・Ⅴ号
- 天理大学 「天理大学学報」15輯～17輯
- 天理図書館 「ピブリア」3号～5号
- 東京堂 「日本読書新聞」791号～841号「図書新聞」290号～341号「出版ニュース」
302号～337号
- 東京教育大学国語国文学会 「国語」10号～12号
- 東京女子大学学会 「東京女子大学論集」5巻2号, 6巻1号
- 東京女子大学日本文学研究会 「日本文学」創刊号～5号
- 東京都立教育研究所 「研究シリーズ」4号～6号, 8号～23号
- 統計数理研究所 「統計数理研究所彙報」4号・5号
- 同志社女子大学 「学術研究年報」5巻・6巻
- 東洋文化研究所 「東洋文化研究所紀要」第6冊・7冊
- 徳島県教育庁 「徳島県教育月報」62号～74号
- 鳥取大学学芸学部 「研究報告—人文科学—」5号「研究報告—自然科学—」5号
- 奈良学芸大学 「奈良学芸大学紀要」人文科学 4巻1号・3号
- 日仏会館 「日仏会館学報」新4巻1号・3号
- 日本音声学会 「音声学会会報」84号～89号
- 日本書籍 kk 「教育手帳」50号～53号, 58号
- 日本のローマ字社 「RÔMAZI NO NIPPON」38号～49号
- 日本比較文学会 「日本比較文学会会報」2号・4号
- 日本文学協会 「日本文学」4巻4号～12号, 5巻1号～3号
- 日本文芸研究会 「文芸研究」20号～22号

- 日本放送協会 「NHK 教養放送」創刊号～6号「NHK 国語講座」1巻1号～4号,
2巻1号「文研月報」47号～58号
- 日本民間放送連盟 「民間放送」30号～38号
- 日本民俗学会 「日本民俗学」2巻4号, 3巻1号～3号
- 日本民族学協会 「民族学研究」19巻1号～2号
- 日本ローマ字会 「ローマ字世界」478号～490号
- 広島大学文学部 「広島大学文学部紀要」6号～8号
- 広島中世文芸研究会 「中世文芸」5号～7号
- 福井大学学芸学部 「福井大学学芸学部紀要」人文科学4号・5号, 社会科学4号・
5号
- 福岡学芸大学 「福岡学芸大学紀要」3号～5号
- 米国大使館文化交流局出版課 「アメリカーナ」1巻1号～3号・2巻1号～3号
- 北海道学芸大学 「人文論究」13号・14号(函館人文学会)
- 穂波出版社 「実践国語」174号～184号
- 毎日新聞社 「ことばのしおり」17号～19号
- 万葉学会 「万葉」15号～18号
- 三重大学学芸学部教育研究所 「研究紀要」人文科学13集, 社会科学14集
- 文部省 「文部統計速報」73号, 76号～77号「文部時報」931号～943号「初等教育
資料」58号～70号「中等教育資料」4巻3号～12号・5巻2号・3号「びぶろす」
6巻2号～11号 17巻1号～3号「指定統計」13号～15号「教育統計」34号～
35号, 37～39号
- 山形県教育研究所 「山形教育」53号～56号
- 山口大学文学会 「山口大学文学会誌」6巻1号～2号, 7巻1号
- 立命館大学人文学会 「立命館文学」118～128号
- 竜谷学会 「竜谷大学論集」349号・350号
- ローマ字教育会 「ことばの教育」66号～77号
- 和歌山方言学会 「和歌山方言」5号・6号
- MAGYAR TODOMANYOS AKADÉMIA (BUDAPEST) "ACTA LINGUISTICA"
1954 (VOL, 4. NO 1～2)
- SEVER POP "ORBIS" Tome VOL 3 NO. 2. Tome VOL 4 NO. 1.

THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN
STUDIES "BULLETIN" VOL VII Part 1・3
UNIVERSITY OF CARIFORNIA "UNIVERSITY OF CARIFORNIA PUBLI-
CATIONS IN LINGUISTICS" 1954 NO. 11.
WASHINGTON UNIVERSITY "MODERN LANGUAGE QUARTERY" VOL
6 NO. 1~4. (高橋・芳賀)

庶 務 報 告

A. 庁舎および経費

(1) 庁 舎

所 在 東京都千代田区神田一ツ橋 1ノ1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 323.417 坪

軽量不燃書庫 30.501 坪 閲覧室(新築) 13.985 坪 計 367.903 坪

(2) 経 費

昭和30年度予算	総	額	24,829,000 円
	人	件 費	16,468,000 円
	事	業 費	8,361,000 円

B. 評 議 員 会

会 長 柳 田 国 男	副会長 山 崎 匡 輔	
伊 藤 忠 兵 衛	金 田 一 京 助	倉 石 武 四 郎
桑 原 武 夫	颯 田 琴 次	沢 登 哲 一
東 条 操	時 枝 誠 記	土 岐 善 磨
土 居 光 知	中 島 健 蔵	波 多 野 完 治
服 部 四 郎	古 垣 鉄 郎	松 方 三 郎
松 坂 忠 則		

C. 組 織 と 職 員

(1) 予 算 定 員

教 官 31 事務職員 17 合 計 48

(2) 組 織 お よ び 職 員

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所 第1研究部	所 長	西 尾 実	31.3.31. 立教大学へ転出
	部 長	岩 淵 悦 太 郎	
話しことば研究室	主 任	大 石 初 太 郎	
		飯 豊 毅 一	
		宇 野 義 方	
		吉 沢 典 男	
	臨時筆生	樋 口 き よ 子	
	"	染 谷 佳 子	
書きことば研究室	主 任	林 大	
		永 野 賢	
		斎 賀 秀 夫	
		水 谷 静 夫	
		石 綿 敏 雄	
	臨時筆生	橋 本 圭 子	
	"	高 木 翠	
	"	岡 本 美 奈 子	
	"	松 垣 玲 子	
	"	広 吉 玲 子	
地方言語研究室	主 任	柴 田 武	30.6.1. 東京大学へ転出
		北 村 甫	
		野 元 菊 雄	
		上 村 幸 雄	30.6.1. 採用
		徳 川 宗 賢	
	臨時筆生	山 下 道 代	
	"	渡 辺 泰	
第2研究部 国語教育研究室	部 長	興 水 実	
	主任(兼)	興 水 実	

	職 名	氏 名	備 考
言語効果研究室	非常勤 臨時筆生 " " 主任	芦 沢 節	
		高 橋 太 郎	
		村 石 昭 三	
		岡 本 奎 六	
		根 本 今 朝 男	
		川 又 瑠 璃 子	
		久 保 陽	
		平 井 昌 夫	
		林 四 郎	
		寺 島 愛	
第 3 研 究 部 近代語研究室	臨時筆生 部長 (専取) 主任 (兼) (兼) (兼) 室長(併) 主任(兼)	渡 辺 友 左	
		高 森 美 保 子	
		西 尾 実	30.10.1. 部長事務取扱
		山 田 巖	30.10.1. 岐阜大学から配 置転換
		広 浜 文 雄	30.10.1 兼任発令
		市 川 孝	30.10.1 兼任発令
		進 藤 咲 子	30.10.1 兼任発令
		岩 淵 悦 太 郎	30.10.1. 発令
		岩 淵 悦 太 郎	
		村 尾 力	
資 料 調 査 室 調 査 室	主任(兼) 臨時筆生 " 主任	広 浜 文 雄	
		市 川 孝	30.4.1 採用
		進 藤 咲 子	
		田 中 喜 一	
		寺 尾 敏 明	
		上 甲 幹 一	
		高 田 正 治	
編 集 室	主任		

	職 名	氏 名	備 考	
文 献 室	臨時筆生	織 田 滌		
	主 任	高 橋 一 夫		
		有 賀 憲 三		
	(兼)	芳 賀 清 一 郎		
	臨時筆生	樋 口 三 男		
	"	大 塚 通 子		
	"	吉 村 輝 一		
	兼任所員	遠 藤 嘉 基	京都大学教授	
	"	藤 原 与 一	広島大学助教授	
	"	浅 井 恵 倫	金沢大学教授	
庶 務 部 庶 務 課	"	佐 藤 喜 代 治	東北大学教授	
	部 長	細 井 房 夫		
	課 長	真 取 正 二		
		芳 賀 清 一 郎		
		鈴 木 篁 二		
		加 藤 ふ み	30.7.1. 病気のため休職, 30.12.3. 死 亡	
		西 山 博		
		波 谷 よ ね 子	30.6.30. 辞職	
		増 山 治 子		
		三 枝 や す 江	31.1.15. 辞職	
		味 岡 善 子	31.3.31. 辞職	
		大 沢 敏 子	31.1.16. 採用, 31.3.31. 辞 職	
	会 計 課	課 長	黄 木 得 二 郎	
			伊 藤 仲 二	
			鈴 木 亨	
		三 浦 清 伍		
		波 谷 正 則		

	職 名	氏 名	備 考
		斎 藤 静 志	
		塚 田 と し	
		江 頭 健 一	
		吉 田 芳 太 郎	
		金 田 と よ	
	臨時筆生	斎 藤 美 智 子	

D. 内地留学生受入れ

全国都府県道派遣の内地留学生を迎えて、各研究室で研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目などを掲げる。

氏 名	学 校	研 究 題 目	期 間
秋 田 芳 郎	兵庫県加東郡滝野町立滝野中学校教諭	国語科における作文指導法—作文の位相的診断とその治療技術—	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
丹 羽 実 夫	兵庫県西脇市立西脇中学校教諭	話しことばの指導法 (標準語教育)	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
須 藤 明	千葉県松戸市立教育研究所 研究員	作文の欠陥分析と対策	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
磯 部 武 雄	千葉県木更津市立木更津第一小学校教諭	文章読解力を育てるにはどうしたらよいか	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
百 瀬 澄 雄	千葉縣市川市立真間小学校教諭	国語の治療指導	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
中 村 裕 子	千葉県立野田高等学校教諭	話しことばの教育	昭和30. 4. 1から " 31. 3.31まで
岩 下 忠 男	東北大学教育学部付属小学校教諭	文章構造と読解力の発達について	昭和30.10. 1から " 31. 3.31まで

E. 日 誌 抄

1955.6. 2~3 第14回文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所長会議
(日本学術会議で)

6.6 第29回国立国語研究所評議員会

議 事

9. 新年度の研究計画について報告
 2. 昭和 30 年度地方調査員の承認
 3. 総合雑誌語彙調査の中間報告
 4. その他
6. 9 埼玉県深谷有朋国語研究会会員 15 名研究所見学
6. 17~18 第 6 回文部省直轄研究所事務協議会
10. 1 国立国語研究所組織規定改正
10. 11 第 8 回文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所事務協議会（東北大学で）
10. 18 関東地区厚生福祉担当官会議（宇都宮大学で）
10. 29~30 文部省直轄研究所並びに国立大学付置研究所第 3 部所長会議（奈良文化財研究所で）
10. 31 同上事務協議会（同所）
11. 21 地方調査員全国協議会（国立博物館で）
12. 2 第 30 回国立国語研究所評議員会
- 議 事
1. 昭和 30 年度研究経過報告並びに昭和 31 年度予算要求について
 2. 第 3 研究部の設置にともなう組織規定の改正について
 3. その他
1956. 1. 30 給与監査（文部省人事課・会計課員 5 名来所）
3. 5 第 31 回国立国語研究所評議員会
- 議 事
1. 昭和 31 年度予算の概要について報告
 2. 昭和 30 年度研究経過報告
 3. その他

— 国立国語研究所刊行書 —

昭和24年度	国立国語研究所	年報	1	
昭和25年度	国立国語研究所	年報	2	
昭和26年度	国立国語研究所	年報	3	
昭和27年度	国立国語研究所	年報	4	
昭和28年度	国立国語研究所	年報	5	
昭和29年度	国立国語研究所	年報	6	
<hr/>				
国立国語研究所報告1	八丈島の言語調査			
国立国語研究所報告2	言語生活の実態 <small>—白河市および付近の農村における—</small>			(秀英出版刊) ¥ 350.00
国立国語研究所報告3	現代語の助詞・助動詞 <small>—用法と実例—</small>			
国立国語研究所報告4	婦人雑誌の用語 <small>—現代語の語彙調査—</small>			
国立国語研究所報告5	地域社会の言語生活 <small>—岡山における実態調査—</small>			(秀英出版刊) ¥ 600.00
国立国語研究所報告6	少年と新聞 <small>—小学生・中学生の新聞への接近と理解—</small>			
国立国語研究所報告7	入門期の言語能力			
国立国語研究所報告8	談話語の実態			
国立国語研究所報告9	読みの実験的研究 <small>—音認にありわたれた読みあやまりの分析—</small>			
国立国語研究所報告10	低学年の読み書き能力			
<hr/>				
国立国語研究所資料集1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)			
国立国語研究所資料集2	語彙調査 <small>—現代新聞用語の一例—</small>			
国立国語研究所資料集3	送り仮名法資料集			
国立国語研究所資料集4	明治以降国語学関係刊行書目			(秀英出版刊) ¥ 300.00
<hr/>				
国立国語研究所編	国語年鑑	(昭和29年版)		(秀英出版刊) ¥ 450.50
国立国語研究所編	国語年鑑	(昭和30年版)		(秀英出版刊) ¥ 600.00
国立国語研究所編	国語年鑑	(昭和31年版)		(秀英出版刊) ¥ 450.00
国立国語研究所編	国語年鑑	(昭和32年版)		(近刊)

昭和32年3月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋1-1
電話九段(33)代表4295

936

UDC 058:495.6

NDC 810.5

1955 ~ 1956

ANNUAL REPORT OF NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1955 to March 1956

Research in the Standard Forms of Colloquial Japanese

Statistical Study of Words in "Sôgô Zassi" (Cultural Reviews)

Preparatory Research for Linguistic Maps

Compilation of Dialect Dictionary of Syuri, Ryûkyû

Study of Language Development of School Children

How Young People Approach and Understand Newspapers and are
Influenced by them ?

Study on the Language of Election Bulletins

Study on the Japanese Language of the Meiji Period

Collection and Arrangement of Materials for Historical Study of
Japanese Phonetics

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO